

石見銀山遺跡発掘調査報告 1

— 平成 5 ~ 10年度調査・石銀地区 —

1999年3月

会・大田市教育委員会

場所	正	副	表
例言	藤岡大悟(鳥取県立女子短期大学教授)		藤岡大悟(鳥取県立女子短期大学学長)
目次	第3章5「成果」		「成果と課題」
序文目次 第14回	1/250		1/500
	第40回 58(P)		57(P)
	第69回 「SB07」		「SB08」
序文目次 第3夜	「SB02SX」 119(P)		「SB02SX」 120(P)
図版目次 PL14	「岩盤加工遺構」		「岩盤を加工した遺構」
PL26	「岩盤加工遺構」		「岩盤を加工した遺構」
PL43	~・現		~・現・張り糸状繩維(A)
P1	左列「大森層」 「石英安山岩は」 「火山碎屑岩は」		「久利層」 「第四系の大江高山火山層である石英安山岩は」 「同じ大江高山火山岩層の凝灰角砾岩は」
P24	第14回 1/250		1/500
P29	SK01の所 2行目「土坑の」		「土坑に」
P33	(4) 2行目 「0.45mm」		「0.45m」
	(5)の2行上 「おこなうためと」		「おこなうために」
P43	第32回 グリッドの線		東西南北にズレ
P44	(2)の17行目 「土壌」		「土壌」
P46	左列下から2行目 「100m場所」		「100mの場所」
P50	左列上から14行目 「土壌」		「土壌」
	左列下から9行目 「炉跡が3基が」		「炉跡3基が」
P54	第38回 キャブション中「炉跡」		SB01 NSX06-07
P55	左列上から17行目 「伊万里焼」		「伊万里焼」
	左列上から19行目 「伊万里小碗」		「伊万里小碗」
	右列上から1行目 「14、15」		「15、17」
	右列上から5行目 「16~18」		「14、16、18」
	右列上から6行目 「16、17」		「14、16」
P58	右列下から7行目 「塔場」		「塔場」
P68	右列上から17行目 「被熱の」		「被熱が」
P69	第48回 キャブション中「07」		トル
P70	左列上から6行目 「砂質土により」		「砂質土であり」
P73	右列下から3行目 「18~20」		「18~20」
P77	第56回 キャブション中「03井戸」		「03・井戸」
P81	左列下から10行目 「ほとんど占める」		「ほとんどを占める」
P89	右列上から16行目 「第671~22」		「第67回1~22」
	右列下から10行目 「18~21は」		「18~20は」
P95	右列 「SB07-08出土遺物(第70回・72回)」		「(第70回・71回)」
	右列下から14行目 「72回」		「71回」
	右列下から16行目 「72回」		「71回」
P98	左列上から17行目 「72回」		「71回」
	左列上から20行目 「72回」		「71回」
P102	第74回 記入なし		左側B列、右側A列
P105	左列下から2行目 「及び区南半部の」		「及び底地状遺構南側の」
P106	第78回 3・4		4・3
P107	第80回 キャブション中「底区集石」		「底区1・2号集石」
P111	左列下から3行目 「亀ぼ下分」		「亀の下半部」
	右列上から2行目 「水平」		「水平」
	右列上から3行目 「手鏡」		「手鏡」
	右列下から5行目 「25cm腐んでいる」		「25cmで腐んでいる」
	右列上から7行目 「と思われる」		「と思われる。」
	左列上から6~7行目 「共にしようされ」		「共に使用され」
	右列下から4行目 「河床遺跡・出雲市」		「河床遺跡・松江市黒田堀遺跡・出雲市」
P112	第85回 番号37~41		42~46
	番号42~46		37~41
P114	第1表		第2表
P116	左:SB01 右:SB02		左:SB02 右:SB01
P118	右列上から18行目 「蓄熱」		「蓄熱」
P125	下款 上段右から2番目:3		同 上段右から2番目:6
図版 PL36	中段中央:6		中段中央:3

序

石見銀山遺跡発掘調査につきましては、昭和58年に初めて代官所跡、藏泉寺口番所跡の調査を実施し、その後も調査を継続して、着実に成果をあげてまいりました。

平成4年、林道工事中に銀の製鍊所跡が発見され、調査を仙ノ山山頂でおこなうという大きな転機を迎えます。これは石見銀山遺跡の長い調査にとっても大きな出来事となりました。

また、平成8年には島根県、大田市、温泉津町、仁摩町により、石見銀山遺跡の調査を推進し遺跡の保存整備を図ることを目的に石見銀山遺跡発掘調査委員会を設置し、石見銀山遺跡の全体像の解明に向けてスタートしたところです。

大田市と致しましても、石見銀山遺跡の調査・整備を島根県政の重要な柱として位置づけられ、取り組みいただいていることに心強く思います。

こうした取組みの中、平成9年度からは大田市、温泉津町、仁摩町において文化財保護のため石見銀山遺跡の国史跡追加指定に取り組んでおります。

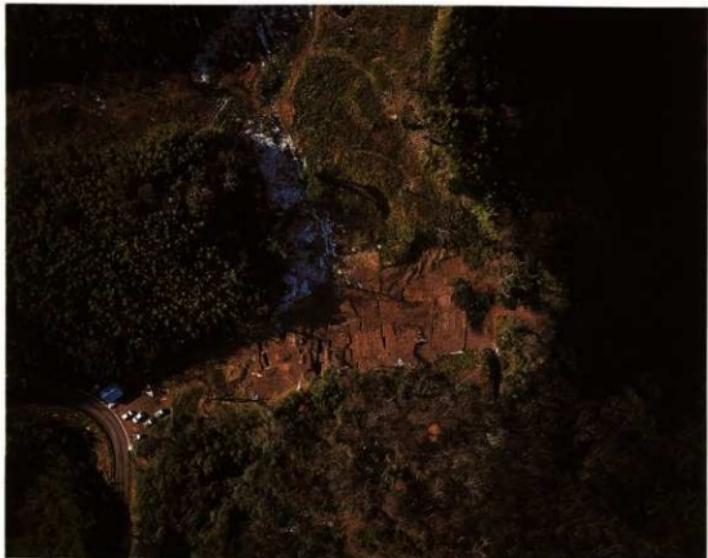
本書は平成5年度から平成10年度までの発掘調査報告書であります。調査においてご指導ご協力いただきました、文化庁、島根県教育委員会をはじめ関係各位に深くお礼申し上げますと共に、本書が石見銀山遺跡に対するご理解と、今後の調査研究の基礎資料として活用されることを祈念いたします。

平成11年3月

島根県大田市
市長 熊谷國彦



南から見た仙ノ山



上空から見た石銀藤田地区



藤田地区SB01・02・03



藤田地区SB02内SX04・05



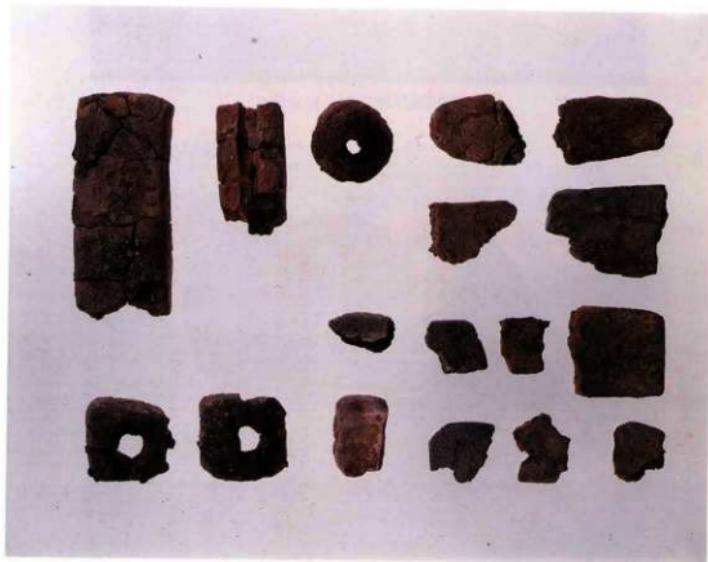
藤田地区坑口前トレンチ



坑口前トレンチから出土した鉄鍋



出土遺物



精錬に使用した土製品

例 言

1 本書は、昭和58年度および昭和63年度から平成10年度まで、国庫補助事業として島根県大田市教育委員会が事業主体として実施した、史跡石見銀山遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書の構成は、平成5年度から実施している石銀千疊敷地区・石銀藤田地区的調査報告を中心において、それ以前の調査は遺跡ごとにまとめて報告する。また、平成10年度から実施している於紅ヶ谷地区・板畠谷地区・出土谷地区的調査報告は来年度以降に刊行予定である。調査年度毎に刊行している『石見銀山遺跡発掘調査概要』1~9も参照されたい。

3 調査体制は下記のとおりである。平成8年度からは島根県教育委員会と大田市教育委員会の共同調査として実施し、石見銀山遺跡発掘調査委員会から調査の全般にわたり指導を得ている。

〔石見銀山遺跡発掘調査委員会〕

田中 琢（奈良国立文化財研究所所長）

田中圭一（元筑波大学教授）

田中義昭（島根大学法文学部教授）

脇田晴子（滋賀県立大学教授）

藤岡大拙（島根県立女子短期大学教授）

小寺八郎（同和鉱業（株）取締役管理副本部長）

熊谷國彦（島根県大田市長）

宮原史郎（島根県温泉津町長：平成8年度）

安田憲（島根県温泉津町長）

池龜 貴（島根県仁摩町長）

山崎悠雄（島根県教育委員会教育次長：平成8年度）

広沢卓嗣（島根県教育委員会教育次長：平成9年度）

山下嘉三（島根県教育委員会教育次長）

〔事務局〕

島根県大田市教育委員会 文化振興室

〔調査員〕

大田市教育委員会 大國晴雄・遠藤浩巳・中田健一

島根県教育委員会 大庭俊次・椿 真治・広江耕史・目次謙一

〔調査指導〕

文化庁記念物課

奈良国立文化財研究所

島根県教育委員会文化財課

4 下記の方々から多くのご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表すものである。（敬称略・五十音順）

市田京子・大橋康二・小野正敏・松村恵司・神崎 勝・小池伸彦・小菅徹也・坂井秀弥・下津間康夫・

（故）鈴木秀典・永原慶二・葉賀七三男・萩原三雄・細見啓三・松尾信裕・村上 勇・村上 直・

村上 隆

5 挿図の縮尺は、図中に示した。

6 插図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の方位を示すが、磁北を使用したものはMNと明記している。またレベル高は海拔高を示している。

7 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8 本文中に使用した略号は下記のとおりである。

S B - 建物跡 S X - 炉跡 S K - 土坑 S D - 溝跡 P - ピット

9 本書の執筆、編集は上記の調査員が共同でおこない、関係各位の協力を得た。

10 本書に掲載した出土遺物「鉄鍋」の写真撮影は奈良国立文化財研究所の牛嶋茂氏に依頼し、写真を提供いただいた。他の遺物の写真撮影は広江がおこなった。

11 出土遺物及び作成した実測図、写真などは大田市教育委員会で保管している。

目次

第1章	位置と環境	1
1	位置と環境	
2	遺跡の概要	
第2章	調査の経過	5
第3章	昭和58年度～平成4年度の調査	8
1	生産遺跡	
2	生活遺跡	
3	支配関連遺跡	
4	出土遺物	
5	成果	
第4章	石銀千疊敷地区	22
1	調査の概要	
2	遺構	
3	遺物	
第5章	石銀藤田地区	42
1	調査の経過と概要	
2	遺構と遺物	
第6章	遺構と遺物の検討	117
1	町と吹屋の構造	
2	遺構と遺物の検討	
まとめ		127

挿図目次

第1図	石見銀山遺跡位置図	2
第2図	石見銀山遺跡発掘調査位置図	6
第3図	下河原吹疊敷地区第5トレンチ実測図(1/125)	9
第4図	山吹城下屢敷地区第5トレンチ実測図(1/60)	11
第5図	山吹城下屢敷地区第5トレンチ炉跡実測図(1/30)	11
第6図	市場地区遺構実測図(1/60)	14
第7図	山吹城下屢敷地区第2トレンチ実測図(1/60)	16
第8図	山吹城下屢敷地区第3トレンチ実測図(1/60)	16
第9図	藏泉寺口番所跡石列実測図(1/60)	19
第10図	龍源寺間歩四ツ留役所跡出土要石実測図(1/6)	21
第11図	山吹城下屢敷地区第5トレンチ出土金属製品実測図(1/2)	21
第12図	市場地区最下層出土土器実測図(1/3)	21
第13図	千疊敷地区・藤田地区調査区配置図	23
第14図	千疊敷地区調査前地形測量図(1/250)	24
第15図	千疊敷地区遺構配置図(1/80)	25~26
第16図	千疊敷地区遺跡実測図(1/60)	28
第17図	千疊敷地区SB01内第1石積土坑実測図(1/30)	29
第18図	千疊敷地区SB01内第2石積土坑実測図(1/30)	30
第19図	千疊敷地区SB01内SX01・02・03実測図(1/30)	31
第20図	千疊敷地区SB01内SK01実測図(1/30)	31
第21図	千疊敷地区SB01内SK02実測図(1/30)	32
第22図	千疊敷地区SB01内SK03実測図(1/20)	32
第23図	千疊敷地区SB02内石積土坑実測図(1/30)	33
第24図	千疊敷地区SB02内SX01実測図(1/15)	34
第25図	千疊敷地区SB02内SX02実測図(1/10)	35
第26図	千疊敷地区SB02内SK01実測図(1/30)	36
第27図	千疊敷地区坑道実測図(1/40)	36
第28図	千疊敷地区岩盤加工遺構実測図(1/40)	37
第29図	千疊敷地区出土遺物実測図(1)(1/3)	38
第30図	千疊敷地区出土遺物実測図(2)(1/3)	39
第31図	千疊敷地区出土遺物実測図(3)(1/3)	41
第32図	藤田地区調査区・建物跡配置図(1/500)	43
第33図	藤田地区SB01・02・03遺構配置図(1/120)	45
第34図	藤田地区SB01実測図	47~48
第35図	藤田地区SB01第3遺構面実測図(1/20)	49
第36図	藤田地区坑口前トレンチ実測図(1/20)	51~52
第37図	藤田地区鉄鍋出土状況実測図(1/5)	53
第38図	藤田地区SB01内SX06・07実測図(1/10)	54
第39図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(1)(1/3)	56
第40図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(2)(1/3)	58
第41図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(3)(1/3)	59
第42図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(4)(1/3)	60
第43図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(5)(1/4)	61
第44図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(6)(1/4)	62
第45図	藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(7)(1/3)	64

第46図	藤田地区SB02実測図(1/100)	66
第47図	藤田地区SB02内SX04・05実測図(1/10)	67
第48図	藤田地区SB02内SX08・09・10実測図(1/10)	69
第49図	藤田地区SB02内SK02実測図(1/40)	70
第50図	藤田地区SB02内SK04実測図(1/20)	71
第51図	藤田地区井戸跡実測図(1/30)	71
第52図	藤田地区SB02内溝跡実測図(1/30)	72
第53図	藤田地区SB02出土遺物実測図(1/3)	74
第54図	藤田地区SB02上層中層・道路出土遺物実測図(1/3)	75
第55図	藤田地区SB02下層・東西道路出土遺物実測図(1/3)	76
第56図	藤田地区SB03・井戸跡出土遺物実測図(1/3)	77
第57図	藤田地区SB04・05実測図(1/100)	79
第58図	藤田地区SB04実測図(1/40)	80
第59図	藤田地区SB05内SX01・02実測図(1/10)	82
第60図	藤田地区SB05内SX03実測図(1/10)	83
第61図	藤田地区SB05内SK01・02・03実測図(1/40)	84
第62図	藤田地区SB06実測図(1/60)	85
第63図	藤田地区SB06内SX01実測図(1/10)	86
第64図	藤田地区SB06内SX02・03・04実測図(1/10)	87~88
第65図	藤田地区SB04・05出土遺物実測図(1/3)	90
第66図	藤田地区SB04・05・06出土遺物実測図(1/3)	91
第67図	藤田地区SB06出土遺物実測図(1/3)	92
第68図	藤田地区SB07・08実測図(1/100)	93
第69図	藤田地区SB07内SX01・02実測図(1/10)	94
第70図	藤田地区SB08出土遺物実測図(1)(1/3)	96
第71図	藤田地区SB08出土遺物実測図(2)(1/3)	97
第72図	藤田地区SB10実測図(1/80)	100
第73図	藤田地区SB10SK01実測図(1/20)	101
第74図	藤田地区SB10銭貨出土状況実測図(1/2)	101
第75図	藤田地区SB09・10出土遺物実測図(1/3)	103
第76図	藤田地区くぼ地実測図(1/200)	104
第77図	藤田地区大溝実測図(1/40)	105
第78図	藤田地区くぼ地出土遺物実測図(1/3)	106
第79図	藤田地区VII区遺構実測図(1/80)	107
第80図	藤田地区VII区1・2号集石遺構実測図(1/20)	107
第81図	藤田地区VII区出土遺物実測図(1/3)	108
第82図	藤田地区出土金属製品・土製品実測図(1/2)	109
第83図	藤田地区出土石製品実測図(1)(1/6)	110
第84図	藤田地区出土石製品実測図(2)(1/3)	111
第85図	藤田地区出土銭貨拓影(1)	113
第86図	藤田地区出土銭貨拓影(2)	114

挿表目次

第1表	藤田地区出土銭貨一覧表(1)	115
第2表	藤田地区出土銭貨一覧表(2)	116
第3表	藤田地区SB02内SX04・05科学分析結果一覧	119
第4表	石銀地区検出炉跡一覧表	123
第5表	石銀地区検出土坑一覧表	124

図版目次

(巻頭カラー)

- P L 1 南から見た仙ノ山
上空から見た石銀藤田地区
- P L 2 藤田地区 S B 0 1 • 0 2 • 0 3
藤田地区 S B 0 2 内 S X 0 4 • 0 5
- P L 3 藤田地区坑口前トレンチ
坑口前トレンチから出土した鉄鍋
- P L 4 出土遺物
精錬に使用した土製品

(巻末白黒)

- P L 5 下河原吹屋跡全景（西から）
山次城下屋敷地区第5トレンチ遭構検出状況（南から）
- P L 6 上市場地区遭構検出状況（南から）
藏泉寺口番所跡石列検出状況（南から）
- P L 7 千畳敷地区全景（西から）
千畳敷地区全景（北から）
- P L 8 千畳敷地区 S B 0 1 全景（東から）
千畳敷地区 S B 0 2 全景（東から）
- P L 9 千畳敷地区 S B 0 1 全景（南から）
千畳敷地区 S B 0 1 第1石積土坑（南から）
- P L 10 千畳敷地区 S B 0 1 第2石積土坑（南から）
千畳敷地区 S B 0 1 S K 0 2（西から）
- P L 11 千畳敷地区 S B 0 2 石積土坑（東から）
千畳敷地区 S B 0 2 S X 0 1 • 0 2 全景（西から）
- P L 12 千畳敷地区 S B 0 2 S X 0 1 全景（北から）
千畳敷地区 S B 0 2 S X 0 1 土層堆積状況（西から）
- P L 13 千畳敷地区 S B 0 2 S X 0 2 断ち割り状況（西から）
千畳敷地区 S B 0 2 S X 0 3 全景（南から）
- P L 14 千畳敷地区 S B 0 2 S K 0 1 内逆鉢ずり堆積状況（北から）
千畳敷地区 S B 0 2 岩盤加工遭構（西から）
- P L 15 藤田地区 S B 0 1 • 0 2 • 0 3 全景（西から）
藤田地区 S B 0 1 • 0 2 • 0 3 全景（北から）
- P L 16 藤田地区 S B 0 1 第2遭構面検出状況（西から）
藤田地区 S B 0 1 S X 0 6 • 0 7 全景（北から）
- P L 17 藤田地区 S B 0 1 西側道跡断ち割り状況（南から）
藤田地区 S B 0 1 第3遭構面検出状況（北から）
- P L 18 藤田地区坑口前トレンチ 下層建物跡検出状況（西から）
藤田地区坑口前トレンチ 下層建物跡検出状況（東から）
- P L 19 藤田地区坑口前トレンチ 鉄鍋検出状況（南から）
藤田地区坑口前トレンチ 土層堆積状況（左下が鉄鍋出土地点：南から）
- P L 20 藤田地区 S B 0 2 全景（西から）
藤田地区 S B 0 2 S X 0 4 • 0 5 検出状況（南から）

- P L21 藤田地区 S B 0 2 S X 0 8 • 0 9 • 1 0 検出状況（東から）
藤田地区 S B 0 2 S K 0 2 検出状況（西から）
- P L22 藤田地区 S B 0 3 全景（北から）
藤田地区 S B 0 3 石積み検出状況（東から）
- P L23 藤田地区 S B 0 4 • 0 5 全景（南から）
藤田地区 S B 0 4 • 0 5 調査風景（北から）
- P L24 藤田地区 S B 0 5 と道跡（西から）
藤田地区 S B 0 4 • 0 5（南から）
- P L25 藤田地区 S B 0 5 S X 0 3 検出状況（北から）
藤田地区 S B 0 5 S K 0 1（南から）
- P L26 藤田地区 S B 0 5 岩盤加工遺構（南から）
藤田地区坑道入口（西から）
- P L27 藤田地区 S B 0 6 S X 0 1 検出状況（南から）
藤田地区 S B 0 6 S X 0 2 • 0 3 • 0 4 検出状況（南から）
- P L28 藤田地区 F 2 0 • 2 1 • 2 2 グリッド全景（南から）
藤田地区 S B 0 8 S X 0 1 検出状況（南から）
- P L29 藤田地区 S B 1 0 S K 0 1 完壊状況（東から）
藤田地区 S B 1 0 銭貨出土状況（西から）
- P L30 藤田地区くぼ地全景（東から）
藤田地区くぼ地大溝（北から）
- P L31 VII区全景（西から）
VII区遺構検出状況（北から）
- P L32 千畳敷地区出土遺物（1）
千畳敷地区出土遺物（2）
- P L33 千畳敷地区出土遺物（3）
藤田地区 S B 0 1 出土遺物（1）
- P L34 藤田地区 S B 0 1 出土遺物（2）
藤田地区 S B 0 1 出土遺物（3）
- P L35 藤田地区坑口前トレント出土遺物（1）
- P L36 藤田地区坑口前トレント出土遺物（2）
- P L37 藤田地区坑口前トレント出土遺物（3）
- P L38 藤田地区 S B 0 2 出土遺物
藤田地区道跡（上層・中層）出土遺物
- P L39 藤田地区道跡（下層・東西）出土遺物
藤田地区井戸跡・S B 0 3 • VII区出土遺物
- P L40 藤田地区 S B 0 4 • 0 5 出土遺物
藤田地区 S B 0 4 • 0 5 • 0 6 出土遺物
- P L41 藤田地区 S B 0 6 出土遺物
藤田地区 S B 0 8 出土遺物（1）
- P L42 藤田地区 S B 0 8 出土遺物（2）
藤田地区 S B 0 9 • 1 0 出土遺物
- P L43 藤田地区出土 金属製品・土製品・石臼・硯
- P L44 藤田地区出土 銭貨

第1章

位置と環境

1 位置と環境

石見銀山遺跡は東西に長い島根県のほぼ中ほど、日本海に面した大田市の南西部、大田市大森町を中心に周辺の邇摩郡仁摩町、同温泉津町などを含めた広い範囲に分布する。遺跡の地図上の位置としては北緯35度5分30秒、東経132度26分30秒が与えられる。

大田市大森町は日本海から直線距離にして6km、石見地方に特徴的な、海岸からすぐ始まる標高100mから250mほどの低山地の中にいる。遺跡の中核となる仙ノ山は標高537.8m、頂上部は北東から南西方向に平坦地の広がりが見られるが、斜面は概ね急峻である。この仙ノ山と山吹城跡のある標高412mの要害山の狭隘な谷間に銀山川が流れ、その流れに沿って町並みが形成されている。

遺跡周辺の地質を概観すると、下層に新第三紀大森層の堆積岩が鶴山周辺から北部にかけて広く分布し、凝灰岩、凝灰質角礫岩、凝灰質砂岩、シルト岩及び頁岩などとなる。石英安山岩は永久鉱床北部の山吹城周辺及びそこから南西に分布し、永久鉱床の母岩となっており、火山碎屑岩は仙ノ山から福石鉱床にわたる一帯と永久坑口付近に分布し、福石鉱床の母岩である。

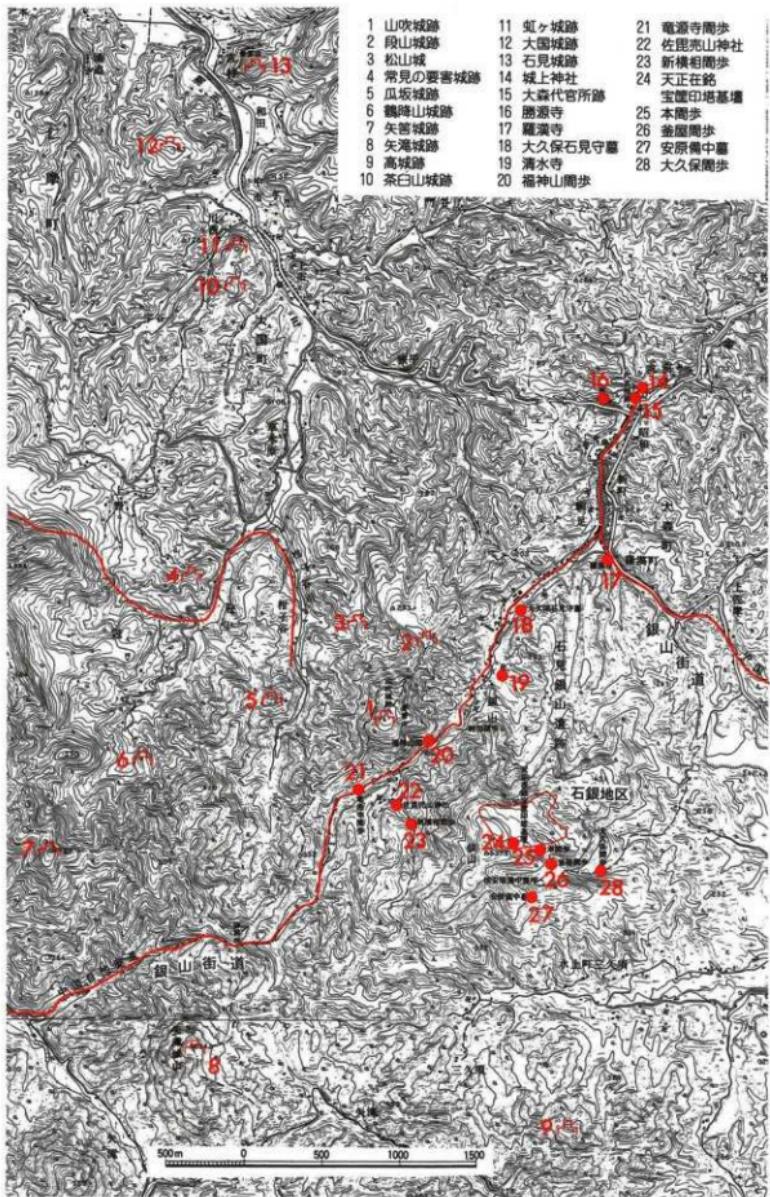
植生はコナラ群落及びアカマツ植林が広く分布し、要害山の南側や大森集落の西側にはスギ、ヒノキ植林が、銀山川の谷筋や仙ノ山の山頂にはマダケ林、モウソウチク林がまとまって見られる。

石見銀山遺跡周辺の旧石器・縄文時代の遺跡は頓原町の板屋遺跡や仁摩町の久根ヶ曾根遺跡・鳥居原遺跡などに代表されるように、三瓶山周辺と

日本海の海岸部に立地する。大田市内では夏焼遺跡・波根川遺跡などが縄文時代後期の遺跡として知られる。弥生時代になると大田市内の遺跡として、前期の土江遺跡・小屋原遺跡、中期の鶴山遺跡、仁摩町の川向遺跡、そして後期に続く高地性集落を含む大田市鳥井南遺跡群がある。

古墳時代では、後期に家型石棺をもち横穴式石室を主体とする仁摩町の明神古墳をはじめとする横穴式石室10数基と、大田市の赤井穴ガ迫古墳など數基がみられるほか、横穴墓が大田市、仁摩町に集中して200基以上存在している。奈良時代においては、寺院跡として大田市波根町の天王平庵寺がある。石見銀山遺跡付近には從来古代の遺跡は認められなかったが、最近の調査で大森代官所跡近くで古墳・奈良時代の土器が発見されている。大田市水上町白环遺跡では古墳時代の木製品や土器、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や土器、木簡、木製品などが、大田市大代町の大家八反田遺跡では古墳時代の祭祀遺構が発見されている。

中世には周辺に多くの荘園・国衙領が成立する。石見銀山地域は久利郷と大家荘に含まれ、「さま」あるいは「佐摩(間)村」と呼ばれた。川合郷には石見一宮の物部神社が鎮座し、鎌倉時代以来金子氏が神主兼幕府御家人として勢力を振るい、同郷の地頭を勤めている。邇摩郡には大家氏や久利氏をはじめ、周布・石見吉川・小笠原氏など石見国内の主要な領主の所領が密集し、安濃郡では南北朝期から室町・戦国期にかけて小笠原氏や、邑智郡佐波郷に拠点を置く佐波氏などが勢力を伸ばした。安濃郡は古代より石見と出雲を結ぶ交通の要衝として重要な位置を占めたが、特に戦国期に石



第1図 石見銀山遺跡位置図

見銀山が開発されるとその重要性は一層高まり、佐波氏の管轄下にあった大田北市庭や、波根湖沿岸部の波根津・刺賀津などが発達した。また戦国期には各國一宮をめぐる廻國型の發展に伴い、各地から多数の聖が当地を訪れ、大田南八幡宮の境内には永正から天文年間（1504～55）を中心とする168口の経筒を納めた鉄塔納経堂がある。

仁摩町の白石遺跡は中世前半の居館跡と考えられ、孤立柱建物跡11棟と12世紀後半から14世紀代の青磁・白磁などの中国磁器、土師質土器が大量に発見された。石見銀山地域とその周辺には戦国期の城館遺跡が多数存在している。

近世になると石見銀山地域は幕府領の石見銀山附御料となり、「天保郷帳」では152ヶ村、石高約5万2千石となっている。初代奉行となつた大久保長安は甲州流の鉱山技術と新しい鉱山経営方法を採用し、慶長年間（1596～1615）に銀山は最盛期を迎えるが、これ以降は徐々に衰退し、幕末の安政期（1854～60）には代官所直営の御直山五ヶ山のみが稼業している。

幕末の慶応2年（1866）、第二次長州戦争の長州軍の進攻によって石見銀山とその領地は江戸幕府支配を終え、長州軍の支配下に入る。維新後は明治2年（1869）に大森県が発足するが、同3年には浜田県の発足によって消滅することになる。

石見銀山は明治政府の官営鉱山とはならなかつたが、明治6年（1873）には民営鉱山として経営され、同20（1887）年には藤田組により「大森鉱山」として操業されるものの、大正12年（1923）には休山し現在に至っている。

2 遺跡の概要

石見銀山の種々の遺跡は、生産遺跡・流通遺跡・生活遺跡・信仰遺跡・支配関連遺跡と大きく分けることができる。ただし時代や技術の変遷により、生産と生活の場所が重複したり、前代の施設を壊して築くことがあるなど、遺跡が単純な形で残っ

ているとは限らない。

(1) 生産遺跡

銀生産の採鉱と製錬の遺跡である。採鉱の遺跡として露頭掘りや坑道掘りの跡がある。平成9・10年度の間歩調査では露頭掘りが47ヶ所、坑道掘りが527ヶ所確認されている。坑道掘りの代表的な遺跡としては、国史跡に指定されている大久保間歩、釜屋間歩、本間歩、龍源寺間歩などがある。運鉱の遺跡としては、釜石の粉碎に使われる要石や、比重選鉱に関連する石積土坑が発掘調査により複数検出されている。製錬の遺跡としては本書で詳細の報告をおこなう石銀地区をはじめ、山吹城下屋敷地区吹屋跡、下河原吹屋跡、柄畠谷吹屋跡があり、近代の製錬工場の遺跡として清水谷製錬所跡、永久稼所跡が検出されている。

(2) 流通遺跡

戦国期に銀の積出し港であった鞆ヶ浦、沖泊がある。鞆ヶ浦は石見銀山の開発の初期に鉱石を買付ける船が着いた港で、船とともに網を張りだす自然の岩盤をくり抜いた係留用の「鼻ぐり岩」がここにある。沖泊は温泉津湾の西に開口し、岸まで深い良港であり、港の北に鷹山城が南に鷹丸城という二つの海域が位置している。港には「鼻ぐり岩」や岩盤を穿ったビット状の遺構が確認されている。銀山と流通上必要な地を結んだ街道として、日本海に至る街道と江戸時代の尾道に至る街道がある。前者には銀山から鞆ヶ浦と沖泊に通じる二つの街道が想定されているが、道標の存在が知られるのみで、詳細については調査中である。

(3) 生活遺跡

仙ノ山一帯の広い範囲で大小の約1,000か所を数える平坦地が認められ、そのほとんどは住居跡兼工房跡と推定される。現時点での区分は困難なため大まかな谷ごとにみると、下河原集落跡、上市場集落跡、伏谷集落跡、柄畠谷集落跡、昆布山

谷集落跡、石銀集落跡などがある。

下河原集落跡は豊栄神社・吹屋跡・西本寺・大久保石見守墓などが現在の平坦地に所在するが、江戸時代後期の絵図では建物が散在している。上市場集落跡は発掘調査により16世紀以降の遺構・遺物が検出され、16世紀後半には存在した集落と考えられている。休谷集落跡は16世紀後半には存在した集落で、毛利支配下では中心となった地区で「魚店」「千京」などの地名を残している。柳畠谷集落跡・昆布山谷集落跡は16世紀後半には存在した集落と考えられている。

(4) 信仰遺跡

寺院が約70、境内を持つ神社が數ヶ所あり、祠や石造物なども多数認められる。寺院は寺跡が確認できるものが20数ヶ寺あり、由来は不明であるが地名として残っているものが多數を占めている。神社の中の佐比売山神社は、別当寺として神宮寺をもち、神仏混淆の社殿。境内と神楽殿を有するということが特徴であり、農栄神社は寺院であったものが明治初年に神社に変質したことが境内の様子からもうかがえることが特徴的である。大量に遺存する石造物については、分布や特徴などから寺に付属した墓地、付属しているかどうか明らかでない墓地、単独の石造物の3種類がある。

(5) 支配関連遺跡

戦国期の城館遺跡として石見銀山周辺に築かれた山城と居館がある。代表的な山城としては山吹城、矢滝城、矢筈城、石見城、鶴丸城、柳山城などがある。山吹城に付随する居館として、大手に位置する毛利氏領有期の休役所跡がある。江戸時代の代官所跡は、南北に延びる細長い谷沿いに形成された町並みの北端に位置している。休役所は江戸時代に入り奉行所となつたが、幕府二代目奉行により移転、後に代官所となつた。代官所跡の周辺には向陣屋跡・御銀蔵跡・中間長屋跡などがある。

江戸時代には銀山を管理するため周囲に柵を廻らしており、そこに数ヶ所の口番所を設けていた。この銀山の柵内と外を隔てる柵列跡と口番所跡の推定地として、尾根上に存在する平坦地が確認されている。幕府直営の間歩入り口には四ツ留役所が置かれ、龍源寺間歩入り口では発掘調査により役所跡と推定される建物跡が検出されている。国境等に置かれた口番所や、川・港に置かれた浦番所の詳細については不明である。

第2章 調査の経過

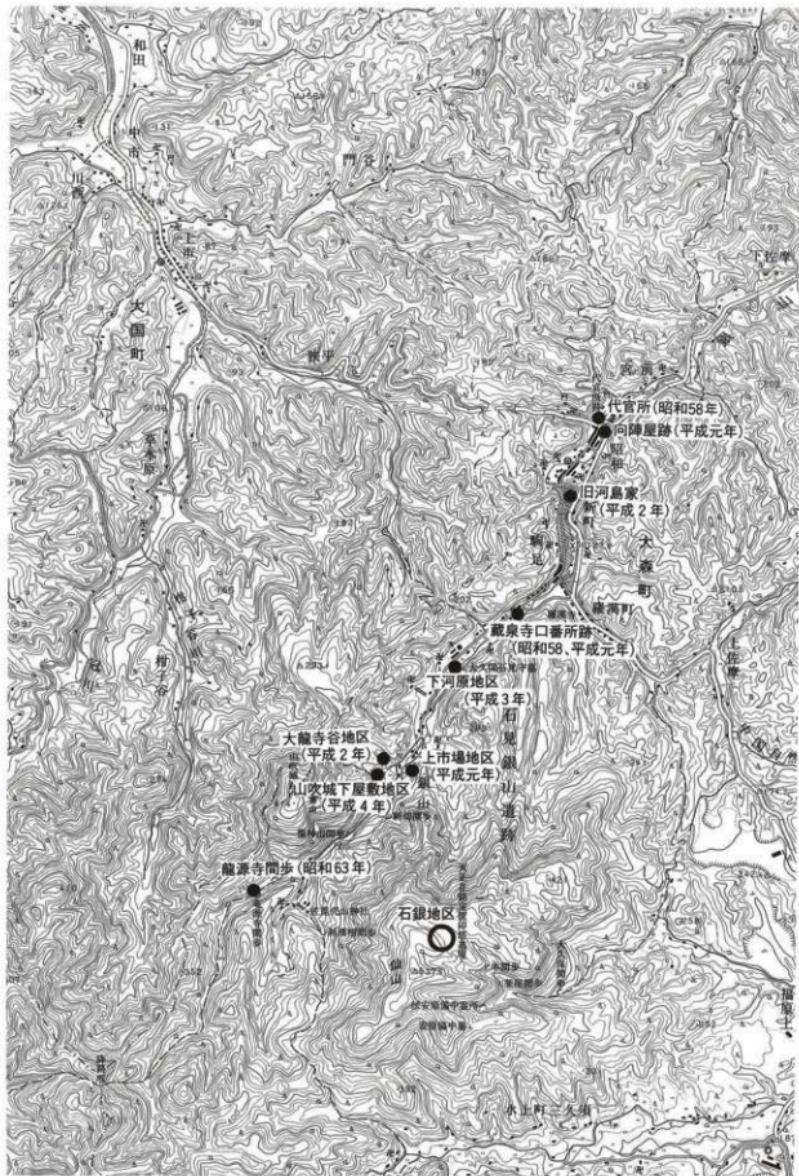
石見銀山遺跡は、銀生産遺跡と銀山の支配・管理に関連する遺跡の保存状態の良さとその歴史性が高く評価され、代官所跡、山吹城跡、大久保間歩・本間歩などの間歩7か所などの計14ヶ所が、昭和44年に国指定史跡となる。昭和58年からは島根県教育委員会による石見銀山遺跡総合整備計画策定事業が4年計画で着手され、遺跡整備の基本構想、基本計画の策定を目指し調査と検討が開始され、その後大田市においても石見銀山遺跡総合整備事業の準備が進められることになった。全国的な中近世遺跡の発掘調査の増加と、遺跡整備などによる活用面の進展などを背景に、鉱山遺跡としての石見銀山遺跡の保護と活用の必要性が再確認されるのがこの頃である。

大田市教育委員会は昭和58年度から、広大な範囲に広がる遺跡を保存保護し、将来の遺跡整備のための資料を得ることを前提として、遺跡の拠点となる地点での地下遺構確認のために発掘調査を開始することになった。これは、同時に都市計画公園整備などの関連整備事業の導入が計画されることにも起因している。昭和58年度の調査は代官所跡地区40m²と藏泉寺口番所跡地区30m²で実施し、国史跡指定地代官所跡に隣接する南地区的調査では、切石による石列と自然石による石列が検出され、切石のものは建物の基礎と考えられた。出土した遺物には肥前陶磁や地元産の陶磁器があり、年代はほとんどが幕末以降であるが、江戸時代初頭の唐津焼が数点ある。藏泉寺口番所跡地区では、番所推定地の北側隣接地で調査がおこなわれ、建物跡の整地面が検出されたが、その性格を明らかにする遺構は検出されなかった。出土した

遺物には、瓦・陶磁器・曲物などの建物と生活に関連するものがある。この2地点の調査は、初めて石見銀山遺跡の地下に存在する遺構と遺物が検出されたことで大きな意味をもつことになった。まず戦国期から江戸時代の遺跡の存在が予測された地点で、調査によって当該時期の遺構と遺物が確認されたことである。このことは現況が建物敷地や水田・畑などの耕作地であっても、下層には遺跡が存在する可能性を広く示すことになった。次に整地層と出土遺物の問題である。2地点共に現代に至るまでに数度の整地を繰り返していることが観察され、層ごとに時期的なまとまりをもつ陶磁器が出土したことである。土層層序の観察による遺構面と整地層の確認と、出土する陶磁器の年代をおさえていくことが遺跡の性格と年代を考える有効な調査方法となることを示唆したのである。しかし一方で陶磁器の年代幅が戦国時代から江戸時代さらに近代までと長く、これらを整理し編年と組成を考えることが大きな課題となつた。

昭和60年度には島根県教育委員会により『石見銀山遺跡関連遺跡分布調査報告書』が刊行され、石見銀山遺跡と周辺の町村に広がる銀山関連遺跡の分布が明らかになった。また昭和61年度には同教育委員会による『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』が刊行され、拠点箇所での発掘調査を継続することが、石見銀山の歴史と遺跡を明らかにしていく上で重要であるという指針が示され、大田市教育委員会は文化庁・島根県教育委員会と協議の上、昭和63年度から国庫補助事業として発掘調査を再開することになった。

昭和63年度は国指定史跡である龍源寺間歩の坑



第2図 石見銀山遺跡発掘調査地位置図

口前の平坦地（調査面積 200m²）、平成元年度は藏泉寺口番所跡（100m²）・上市場地区（100m²）・向隣屋跡（10m²）、2 年度は藏泉寺口番所跡（50m²）・大龍寺谷地区（50m²）、3 年度は下河原下塙地区（530m²）、4 年度は史跡山吹城跡の指定地内の下巻敷地区（60m²）で調査を実施した。この間の調査は代官所跡から南に延びる谷筋の平坦地で実施したものであり、それぞれの地点で遺構・遺物が確認され、鉱山遺跡を特徴づける製錬遺構なども検出された。しかしこの時点では鉱山遺跡全体の仙ノ山の調査には着手するに至ってはおらず、採鉱と製錬の実態に迫るには鉱山の調査が必要不可欠とされていた。

このように発掘調査が進捗する一方でいくつかの整備事業が導入され、その一つに宮谷を起点とし仙ノ山山頂付近に至る林道仙ノ山線の工事が昭和63年度から実施され、平成4 年度にはルート選定のために仙ノ山山頂付近の石銀地区と本谷地区の分布調査と石銀地区の試掘調査を実施することになった。分布調査により明らかとなった平坦地や坑道などの遺跡は林道ルートから回避することにしたが、石銀地区の字「千疊敷南向山」付近で谷地形に階段状に存在する平坦地を横切ることになり、この部分で試掘調査を実施した。調査の結果、江戸時代の建物跡と考えられる礎石や、戦国期から江戸時代の陶磁器を中心とした遺物が大量に出土し、この平坦地が石銀に存在した建物跡であることが明らかになった。遺跡の内容確認と林道事業との調整を図るために平成5 年度から国庫補助事業として、この千疊敷南向山地区（以下「千疊敷地区」という）で調査を実施することとした。

平成5 年度は調査面積が160m²、6 年度が29m²、7 年度が50m²である。調査の結果、検出した建物跡は内部に製錬施設をもつ吹屋（製錬所）跡であり、下層の遺構の年代が戦国期に遡ることが明らかとなったことにより、石見銀山遺跡の中でも重要な内容を含んだ地域として位置付けられる

ことになった。この間、林道事業との調整を併せておこない、この吹屋跡の直前の地点を林道の終点とし遺跡の保存を図った。一方、この調査で明らかとなった遺跡の内容は、石見銀山遺跡の保存状態の良さを示した。また鉱山でおこなわれた採鉱と製錬の作業を知ることのできる遺跡として注目され、平成8 年度からの島根県教育委員会と大田市教育委員会との共同調査が始まる契機となつた。平成8 年度からの調査は千疊敷地区より東方、南北にのびる谷の藤田地区について実施した。

平成8 年度は石銀藤田地区 I 区・II 区（調査面積500m²）、9 年度は石銀藤田地区 I 区・II 区・VII 区（450m²）、10 年度は石銀藤田地区（200m²）。断崖谷地区（200m²）。出土谷地区（80m²）で共同調査を実施している。

昭和63年度以降については、国庫補助事業以外にも開発と整備事業に伴いつかの調査を実施している。町並みの中に位置する武家住宅河島家の復原整備の際には、敷地内の調査で近世初頭の建物の遺構を検出した。また近年では、道路改良に伴う調査で古墳時代・奈良時代の土器が出土し、銀山開発前の遺跡の存在が確認されたり、電線類地中化工事に伴う調査で、代官所周辺において、戦国時代の町割りを示す道路や側溝の遺構が検出されている。

遺跡の保存と整備については、昭和44年の国史跡指定以来、代官所跡と問歩群を中心とした整備・活用が進められてきたが、大規模な整備事業としては平成4 年度の下河原吹屋跡整備事業があげられる。この整備は平成3 年度に調査した下河原吹屋跡を、都市計画公園（歴史公園）整備事業と一緒に整備したもので、吹屋を露出展示することで保存と活用を図った。遺構の処理は薬剤を含浸することで礎石と土間面を強化し、風化や流出による土間面の欠落部分については、同質の土壤を用い土間を新たに成形し、薬剤による強化をおこなった。そして展望施設と説明板を設置することで、公園利用者の便宜を図るようにした。

第3章

昭和58年度～平成4年度の調査

1 生産遺跡

(1) 龍源寺間歩四ツ留役所跡（平成元年度）

龍源寺間歩四ツ留役所跡のII区では、江戸時代と明治時代の建物の基礎と考えられる石列が検出されている。この江戸時代の遺構面の下層30～60cmの深さで、岩盤を加工した造構が検出されている。この造構には溜樹状の土坑・溝・ピットがあり、土坑は長辺140cm短辺90cmの長方形で深さ40cmを測る。溝はこの土坑と平行な位置に、幅10～20cmで東西方向に5本走っている。ピットは径10～20cmのものと30～60cmのものに大別され、柱穴と考えられるものがある。これらの遺構のほかに鉱脈を採掘したと推定される径80cm、深さ70cmの採掘坑や、岩盤表面の鉱脈を穿った溝状の遺構がある。この岩盤を加工した遺構については、鉱石の採鉱遺構と採鉱に関連する建物や施設と考えられる。（『石見銀山遺跡発掘調査概要2』）

(2) 下河原吹屋跡（平成3年度）

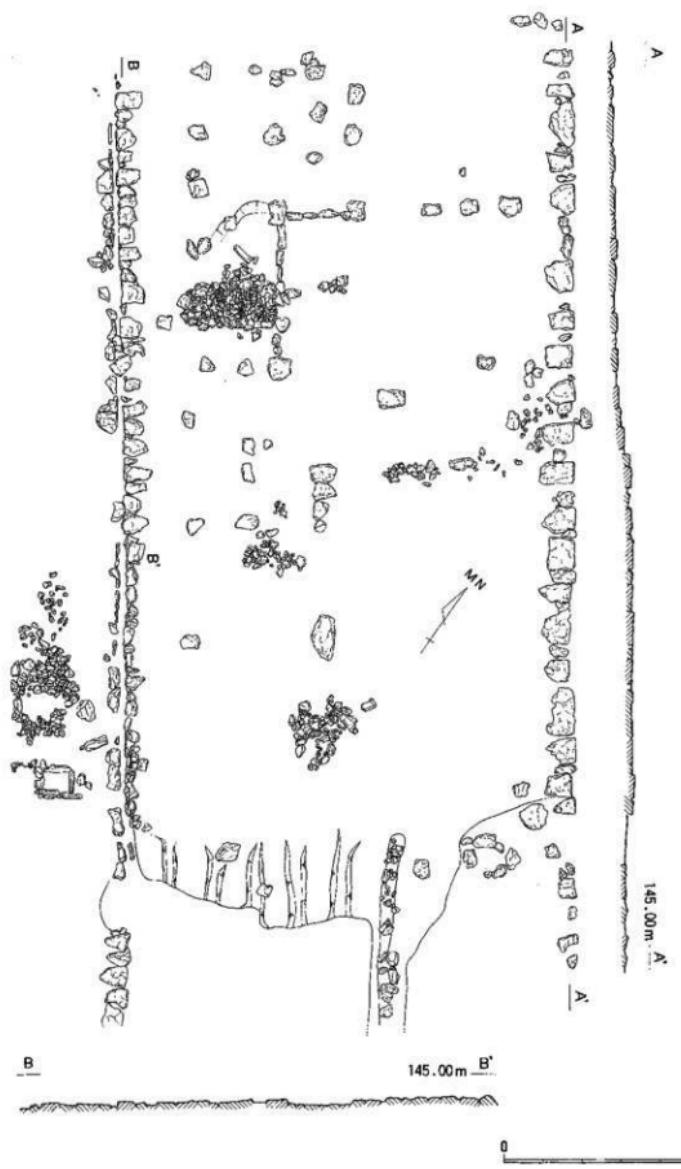
下河原吹屋跡は間口6間奥行10間の敷地をもつ礎石建物跡で、建物内部から製錬施設が検出された。（第3図）検出遺構として、土間に埋め込まれた選鉱用の要石、土間面から一段高く築かれた石組施設、井戸と溝などがある。これらの遺構のほかに、土間面で製錬作業によって被熱し、赤く締まった部分が確認されたことや、土間面から大量に出土したずり・ゆりかす・からみなどから、この建物は選鉱から製錬までをおこなった吹屋（製錬所）跡と考えられた。出土した遺物は、からみや要石などの製錬作業に伴うものと、陶磁器

類がある。

下河原吹屋跡の建物跡の基礎はほとんどが礎石である。石材は地元産の凝灰岩系の切石を使用し、東側の石列は大小の石を隙間がないように交互に並べている。西側の石列は側溝と礎石を兼ねたもので、側溝の石積の上に礎石となる平坦な切石を置く。この礎石には柱の位置を示す12cm（4寸）四方の痕跡があり、柱間の距離は約1mとなっている。西側の石列は検出した範囲で、北側10mには礎石があるが、南側7mには礎石をもたず切石と自然石で側溝の石積を築いており、建物の構造が異なると考えられる。東西の石列は柱を乗せた痕跡や石列の並び方から建物の壁になると推測され、内部で検出された平坦な石は礎石になり、部分的に床をもつ構造も考えられるが、内部の大半は土間敷きの建物が想定される。

建物中央やや北寄りに位置する石組遺構は、南北1.2m東西2.7mの長方形の範囲を石で囲み、その中を疊やからみで充填し平坦面を造り出している。土間からは20cm高くなり、この石組の東側に接して要石が埋め込まれ、北側は2m四方が深さ20～30cmでくぼんでいる。この石組遺構と要石、くぼ地は一体となった施設の遺構と考えられる。

建物の南端には溝跡、井戸跡が位置している。溝跡は南北方向に幅30cm長さ4.5mを測り、溝内部は土間と同じ粘質土が貼られている。この溝跡の西側には幅40～60cm深さ5～10cmの5本の浅い溝が並行して検出されている。井戸跡は石積で構築され内径が60cm前後を測る。これらの溝跡・井戸跡は吹屋としての作業に必要な水を給排水した施設と考えられる。建物の南半部の土間は



第3図 下河原吹屋跡遺構実測図 (1/125)

被熱している箇所があり、ここで製鍊作業が行われたと推測される。炉跡は検出していないが下層に炉跡が存在する可能性がある。

調査区の西側では吹屋跡の西に隣接する建物跡が検出され、土間面で石組の土坑を検出した。平面は一辺75cmと65cmの長方形で、平坦な石を縦に置いて組み、深さは50cmを測る。断面は台形状で、底面が固く締まっていることから、水を溜めた施設と考えられる。

下河原吹屋跡の出土遺物の大半を占める陶磁器は、15世紀末から16世紀代と幅があるが、建物の土間面や造構に伴って出土した陶磁器をみると、17世紀前半の中国磁器、肥前陶磁が中心となっている。

造構と遺物から下河原吹屋跡の性格・時期は、出土陶磁器の示す17世紀前半という年代から、銀山の最盛期、大久保長安の時代（1601～1613）には存在していた、大規模な吹屋と考えられ、造構が改変を受けた痕跡がないことから、比較的短期間で操業を終えた可能性がある。

吹屋の周囲には大久保長安墓所のある大安寺跡（1605年の創立）や西本寺（1635年の創立）が位置し関連が注目される。

この調査により、江戸時代には既に整備されていたであろう道路（現在の市道の下層に存在すると推定）に面してこの建物と敷地は位置し、下河原一帯の地割りは間口に対して奥行が長いものと予測される。

また大量に出土したからみの科学分析をおこなった結果、マンガンを多量に含有するからみがあることが判明し、造洋剤としてマンガンが使用されていたことが確認されている。このことは、絵図や文献にみられる「三石錠」が現在のマンガンの分布場所と一致することから、「三石錠」が使用された可能性がある。（『石見銀山遺跡発掘調査概要5』）

(3) 山吹城下屋敷地区的吹屋跡（平成4年度）

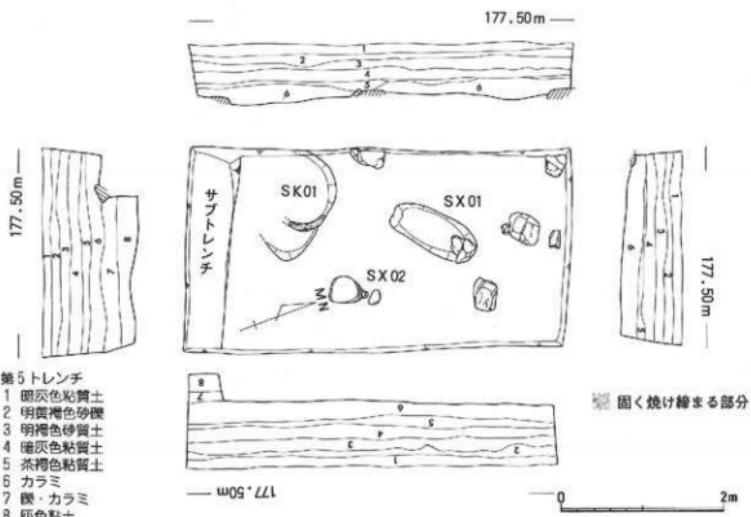
史跡指定地内の山吹城跡大手の下屋敷地区で計6ヶ所のトレンチ調査をおこなった。第5トレンチは現在の山吹城登山口から近い旧水田に設定したトレンチで、調査の結果、建物の礎石列と炉跡を検出している。土層層序は比較的単純で、上層から旧耕作土である暗灰色粘質土、明褐色砂質土、明褐色砂質土、暗灰色粘質土、茶褐色粘質土、からみ堆積層となる。（第4図）2層は大きいもので拳大になる躰を含み、旧水田の基盤になると考えられる層である。

3層は砂粒の堆積が顕著に認められ、昭和18年の水害時の土石流の堆積と推測される。4層の暗灰色粘質土は昭和18年以前の耕作土と考えられる。5層の茶褐色粘質土はからみを多量に包含し、全体に固く締まっている。6層はからみの單一層で、黒色を呈し塊の大きな様態のからみが堆積している。7層がからみの下の建物の土間と考えられる黄褐色や灰褐色の粘質土である。被熱したところが茶褐色に変色している。

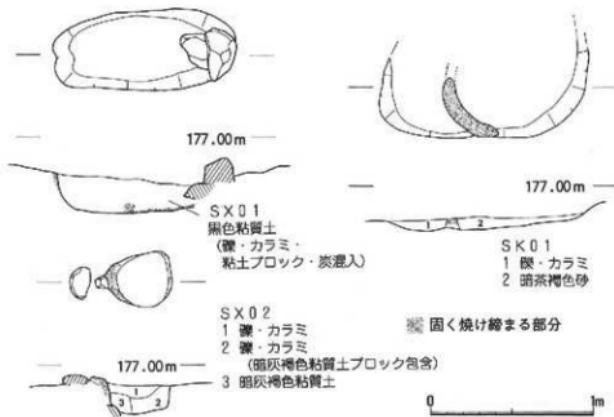
建物の礎石は南北方向と東西方向のものがあり、礎石間距離は南北方向のものが約1m、東西方向のものが約2mを測る。この礎石建物の内部と考えられる位置で、2基の炉跡と土坑を検出している。（第5図）

1号炉はプランが橢円形で、長径130cm短径50cm深さ20cmを測る。炉跡の東側に2個の礎石が埋設されており、炉内の土層は、黒色粘質土の一層で躰、からみ、粘土ブロック、炭化物を包含している。炉の西側と底面の東半分は厚さ1～2cmで固く締まっている。

2号炉はプランが円形で直径35cm深さ20cmを測り、炉の東に接して長径が20cmの偏平な石が埋設され、この石に近い部分が被熱し固く締まっている。2号炉内の土層は、1層が黒色で固く締まる躰。からみ層、2層がブロック状に暗灰褐色粘質土を含む躰。からみ層、3層が暗灰褐色粘質土層である。



第4図 山吹城下屋敷地区 第5トレンチ実測図 (1/60)



第5図 山吹城下屋敷地区 第5トレンチ炉跡実測図 (1/30)

1号炉は精錬作業後の状況を示し、2号炉については1層の底面が炉底になると推測される。土坑は平面積円形を呈し、長径120cm深さ15cmを測る。南側に礫・からみが堆積し、北側の暗茶褐色砂層との境には、固く締まる黒色土が幅10cm長さ40cmで弧状に堆積している。この土坑底面は被熱した痕跡が認められることから、精錬施設の可能性がある。

第5トレンチの出土遺物としては、陶磁器、金属製品がある。陶磁器は中国磁器と肥前陶磁が主なもので、17世紀初頭前後から17世紀前半の年代が与えられる。金属製品としてタガネ2点、分銅1点が出土している。

第5トレンチの検出した礎石建物跡は、遺構と遺物から江戸時代17世紀前半代の吹屋と考えられる。土間面から出土した多量のからみと、黒色で塊が大きいからみの様態から、永久鉱床の銀銅鉱石が製錬された可能性がある。また遺構の時期が江戸時代前半と考えられることにより、初代奉行の大久保長安支配下の時期になることから、奉行所に近接して吹屋が存在した可能性がある。(『石見銀山遺跡発掘調査概要6』)

2 生活遺跡

(1) 上市場地区(平成元年度)

山吹城跡山麓東側の休谷に位置する。山吹城大手から東側には「千京」「魚店」「上市場」などの地名が残り、戦国時代には城下に形成された「町」の中心であり、引き続き江戸時代においても銀山町の中心のひとつであったと考えられている。

上市場地区では戦国時代から明治時代までの3時期の遺構面を検出している。(第6図)第1遺構面は表土から30cm下層で検出された昭和期まで続く民家の跡である。伝承と出土陶磁器の年代から江戸時代末から明治初期の建築と考えられる。検出した遺構に、建物の基礎となる礎石と石列、溝跡、井戸跡がある。(第6図)溝跡は2段の石

積で構築され、幅40cm深さ40cmを測り、検出した範囲で4mの長さになる。井戸跡は円形の石積井戸で深さは60cm以上になる。溝跡は井戸の西に位置しており、排水施設として使われたものと考えられる。

第2遺構面は第1遺構面の30cm下層で検出した。遺構面は黄褐色粘土で整地された土間で、遺構に建物の基礎となる南北方向の石列がある。石列の中の礎石には地元産の凝灰岩の切石を使用したものや、要石を転用したものがみられる。第2遺構面から20cm下の整地層の中では、南北方向の溝跡を検出した。これは幅40cmで2列の石列があり、この上に蓋石になる平坦な石を乗せたものである。この溝跡は第2遺構面の建物に伴う溝跡か暗渠跡と考えられる。第3遺構面は下層遺構面の確認のために設定したトレンチ内で検出した礎石と土間面である。

土層層序と遺構面をみると、上から暗褐色土(耕作土)、暗褐色土(上面が第1遺構面)、黄褐色粘土(上面が第2遺構面)、黒褐色粘質土、灰褐色粘質土(上面が第3遺構面)と観察される。出土遺物は陶磁器をみると、第2遺構面に伴うものが肥前陶磁を中心とした17~18世紀代でつまり、第3遺構面のものは16世紀末~17世紀前半の中国磁器と肥前陶磁がみられる。第3遺構面の整地層は灰褐色粘質土で、この層からは瓦質のすり鉢と土師質土器が出土している。陶磁器以外には、砥石や櫛、火箸などの鉄製品、銭貨などが出土地している。

それぞれの遺構面で検出した建物の性格については、調査面積は限られているものの、調査地の歴史的な性格や出土陶磁器の器種構成などから、いずれも町屋の跡と推定される。発掘調査をおこなった石見銀山遺跡の中では、生産よりも消費が中心となった、商人の「町」に関連する遺跡とみられる。(『石見銀山遺跡発掘調査概要3』)

(2) 大龍寺谷地区（平成2年度）

大龍寺谷は山吹城大手の北に位置する谷で、谷奥には大龍寺跡があり幅60m奥行40mの境内地が広がる。大龍寺は臨済宗東福寺の末寺で、天正12年（1584）の創立と伝えている。大龍寺谷の現状は寺跡のほかは休耕田となっているが、明治時代にはまだ住居があったと伝えられている。

調査は谷の入り口に位置する旧水田をI区、I区から谷奥に向かって20m入った旧水田の調査地がII区である。調査の結果II区では表土から90cm下層で、掘立柱建物跡の一部を検出している。

II区の層序は、旧耕作土、明灰色粘土、茶褐色粘質土となり、茶褐色粘質土が炭化物・礫などとともに陶磁器類を含む包含層で、この層の下面が遺構面の土間となっている。検出した遺構は、柱根の残る柱穴と土間に埋設された要石がある。柱穴は径25cmを測り、その中に一辺15cmに加工された方形の柱材が残存していた。土間面は暗灰色粘土と10~20cm大の礫で整地され、特に要石の周囲は集中して埋められていた。

II区から出土した遺物には、陶磁器、要石、タガネがある。陶磁器は遺構面からの出土はほとんどなく、大半が包含層からの出土で中国磁器と肥前陶磁が多く、年代は戦国時代16世紀後半から17世紀代のものが中心となっている。タガネは長さ33cmの断面が一辺1.4cmを測る細長いタイプで、先端が細くなっている。

II区で検出した建物跡については、検出した要石の遺構とタガネなどの遺物から、戦国期～江戸時代の運転作業がおこなわれた建物と考えられる。調査範囲では、建物の規模や性格について不明な点が多いが、掘立柱建物という構造を考えると、鉱山労働者の住居と工房という性格を兼ねていたと推測される。（『石見銀山遺跡発掘調査概要4』）

(3) 旧河島家敷地内（平成2年度）

旧河島家住宅修理工事に伴い、河島家の南側の空き地で調査を実施した。大森の町並みは寛政12

年（1800）の大火でその大半を消失したといわれ、現存する建物は大火以降の文政8年（1825）頃の建築と考えられている。調査により、大火以前の遺構や町並みが形成される時期の遺構の存在が予測された。

I・II区において、表土から50cm下層で遺構面を検出している。遺構として井戸跡、石組みの炉状遺構、石組みの柱穴状遺構、石列などがある。井戸跡は直径90cm深さ1m以上を測り、石積みがなく素掘りである。井戸内は常に水が湧出している状態で、壁面は固く締まっている。石組みの炉状遺構は、20~30cm大の石を3~4段に積んで円形にしたもので、内径で40cm深さ30cmを測る。この遺構の内部には炭化物が堆積しており、何らかの目的で火を使用した施設と考えられる。石組みの柱穴状遺構は20cm前後の細長い石を棒円形に積んだもので、内径は20~30cm深さ60cm以上を測る。石列は10~30cm程度の石を並べたもので、南北方向に長さ1.3m東西方向に2.0mを測る。

この遺構面の整地層を観察すると、かなり大きな礫とからみを含んだ砂礫層で整地され、部分的に黄褐色粘土を含んでいる。この整地層の下層は、暗褐色砂礫層と炭化物と礫を包含する黄褐色粘土層が互層に堆積しており、これらの層も整地によるものと観察された。

出土した遺物は陶磁器がほとんどである。遺構に伴うものとしては、井戸跡、石組みの炉状遺構から出土したものがある。井戸跡からは唐津の叩き成形のすり鉢の破片が1点あり、年代は1590~1610年代、石組みの炉状遺構内からは肥前磁器碗が1点あり、年代は1620~1640年代である。また井戸跡周辺の整地層からは、中国磁器、肥前陶磁、かわらけなどが出土しており、17世紀初頭前後と考えられる明代の青花碗・皿、16世紀末~1630年代と考えられる肥前陶器などがある。

検出した井戸跡、石組みの炉状遺構、石組みの柱穴状遺構、石列については、出土した陶磁器の年代がいずれも17世紀前半という年代が与えられ

ていることから、明らかに寛政の大火以前であり、江戸時代初頭の建物に関連する遺構と考えられる。町並みの形成を考える上で貴重な資料が得られた調査となった。(『旧河島家住宅修理工事報告書』)

3 支配関連遺跡

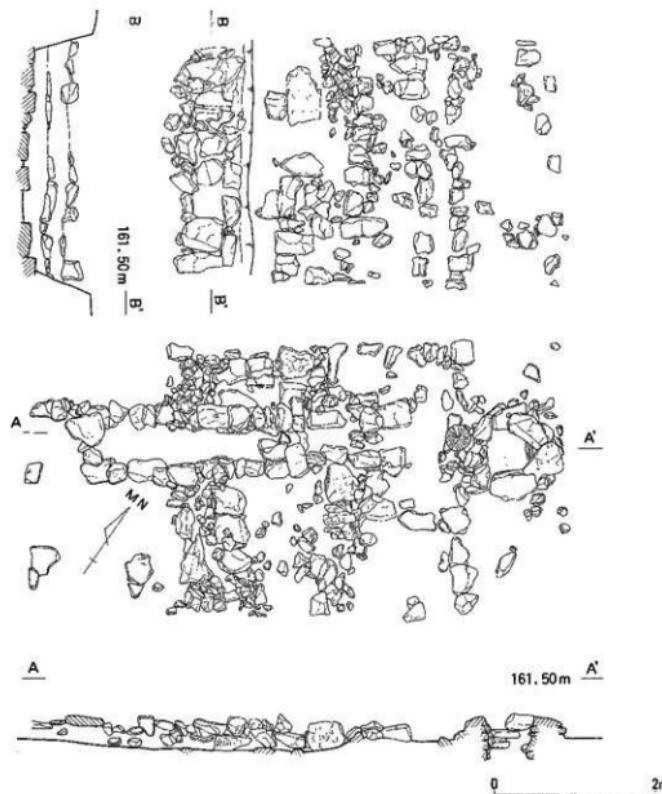
(1) 山吹城下屋敷地区（平成4年度）

史跡山吹城跡の大手に位置する下屋敷地区において、第2・第3トレンチで戦国期から近世初頭

の支配関連遺跡を検出している。

戦国期に毛利氏が石見銀山管理のために置いた休役所跡には、大規模な石垣と造成された平坦地が現存している。第2トレンチは、この石垣に接するように平坦地に設定したトレンチで、役所跡の遺構と石垣の構築状況の確認を調査目的とした。調査の結果、遺構として礎石と石列を検出している。(第7図)

トレンチ内の層序は、旧耕作土（暗褐色土）、茶褐色土、明茶褐色粘質土となり、石垣近くで暗



第6図 上市場地区遺構実測図(1/60)

灰褐色土が入る。このうち4層の明茶褐色粘質土の上面が遺構面となり、この4層の上面で礎石と石列が検出された。礎石は凝灰岩の切石で2基あり、いずれも不整形な方形で南側のものが一辺40cm、北側のものが一辺20cmを測り、石垣から西に3.4m離れて位置する。石列は石垣と平行に10～20cmの自然石が南北方向に並んでいる。遺構と石垣の最上段の石とのレベル差は、石垣の最上段の積み方が堅固でなく不規則であることから、後世の烟などの造成に伴って後補されたものと考えられる。

遺物は、遺構面と茶褐色土層から陶磁器が出土しており、16世紀末から17世紀前半の青花皿、唐津の碗・徳利がある。検出した遺構は建物の基礎と考えられ、戦国期に存在した休役所か、江戸時代に引き続き置かれた大久保長安の奉行所の遺構と推測される。

第3トレンチは、休役所跡の南側に位置する台形状の平坦地に設置した。この平坦地は第2トレンチを設定した平坦地よりも7m低く、焰硝蔵跡の方形の平坦地とともに樹形虎口の一角を構成している平坦地である。この平坦地の北斜面と焰硝蔵跡の間は現在水路となっているが、戦国期には大手門に至る道跡であったと考えられている。

調査の結果、検出した遺構にトレンチの南に位置する石垣と、石垣から北斜面にかけて地山を掘削した平坦面を確認した。(第8図) 石垣はトレンチ内で凝灰岩系の自然石を3段に積み、高さ60cm以上を測る。トレンチ西壁の土層をみると、10層の灰色土は疊を多く含む地山と考えられる層で、上面の疊が平坦に削平された痕跡があり、地山を加工したと観察される。10層の上面は南の石垣の最上部に繋がっていることから、石垣とこの平坦面は同時に構築された可能性がある。トレンチ北側の斜面は、表土の下が地山となっており、斜面裾で疊が散乱した状態で検出されたことから、石積みが存在したかもしれない。

出土した遺物には、17世紀前半の志野皿、唐津

皿があることから、遺構は戦国期の休役所か江戸時代初頭の奉行所に関連する施設と推定される。(『石見銀山遺跡発掘調査概要6』)

(2) 代官所跡・向陣屋跡(昭和58年度・平成元年度)

史跡代官所跡の南に隣接する代官所南地区の調査では、検出した遺構として、自然石を使用した石列と、切り石使用の石列、土坑がある。

自然石を使用した石列は一部積み重ねた部分がみられるが、大部分は一段の石列である。10～20cmの小さな自然石を使用し、長さ3mを測る。切り石使用の石列は、表土から下層70cmで検出し、長さ6mを測る。凝灰岩系の石材を使用し、石列の西側には黄色ブロックを含む黄褐色土が盛り込まされている。土坑は平面形が隅丸方形で、縦65cm横85cm深さ20cmを測り、土坑内から自然石、瓦片が出土している。

出土した遺物は陶磁器が大半で、17世紀初頭から幕末・近代に至る肥前陶磁、地元産陶器が出土している。遺構の性格については、検出した石列が代官所門脇屋とほぼ平行な位置関係にあることや、天保12年(1841)作成の代官所絵図に調査地の部分には米蔵・羽柴が描かれていることから、代官所に関連する建物の遺構と考えられている。(『石見銀山遺跡発掘調査概要1』)

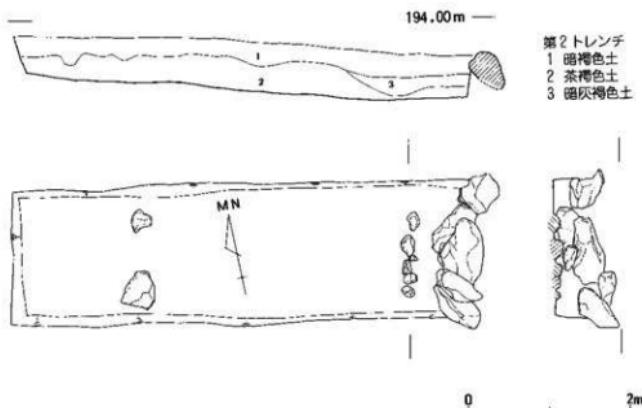
向陣屋跡は、代官所跡から銀山川をはさんだ東に位置し、江戸時代に代官所の上級役人の役宅があったといわれる。この地は近代に小学校や駐車場であった時期があり、墳墓を受けていることも予測されたため、近世の遺構を確認する目的で2ヶ所のトレンチを設定し調査をおこなった。その結果、明確な遺構は確認されなかったが、瓦が数点出土している。瓦はほとんどがいぶし瓦であり、その中に本瓦葺の軒瓦が1点ある。これらの瓦片は、江戸時代の建物が存在したことを予測させ、後世の開発を受けていない地点には、近世の遺構が存在する可能性がある。(『石見銀山遺跡発掘調査概要3』)

(3) 龍源寺間歩四ツ留役所跡（昭和63年度）

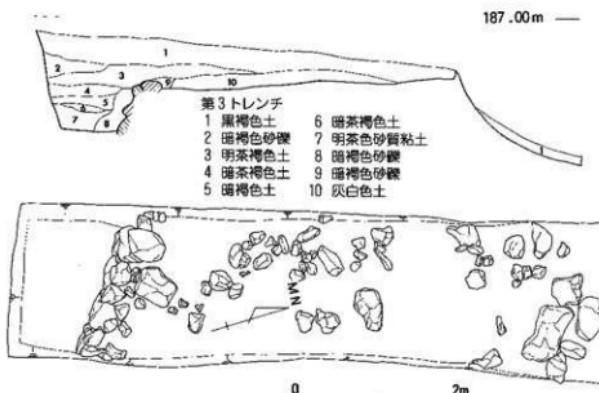
龍源寺間歩前四ツ留役所跡I区は、史跡龍源寺間歩の坑口東側の平坦地である。表土下で明治期に鉱山を經營した藤田組の建物跡を検出し、その40cm下層で礎石列、石列、集石遺構、岩盤を加工した遺構を検出している。

礎石列は南北方向と東西方向のものがあり礎石

間距離は1.8mを測る。石列は自然石を使用した長さ3mのもので、ほぼ1m間隔で平坦な石があり、その間に20cm前後の大きさの石を置いている。集石遺構は、石列の50cm北に1m四方の範囲に石が集中している。これらの遺構の南側に岩盤が露出しているが、その表面を加工した遺構として溜樹状の土坑とピットがある。溜樹状土坑は2基あ



第7図 山吹城下屋敷地区第2トレンチ実測図(1/60)



第8図 山吹城下屋敷地区第3トレンチ実測図(1/60)

り、プランがほぼ正方形のものは70×60cm、長方形のものは90×160cm以上を測る。ピットは円形で径16cm深さ15cmを測る。このほかに岩盤を平坦に加工した上に石を敷き、その間を粘土で充填した平坦面がある。これは中央に70×60cmの方形の石を置き、その周囲に10～50cm大の石が囲むように配置してある。

出土した遺物には、陶磁器を中心と瓦、錢貨、金属製品がある。陶磁器は年代が戦国期から江戸時代、さらに明治期にはいるものがあるが、遺構面に伴うものは、大半は肥前陶磁で18世紀後半代を測るものはないと思われる。金属製品には柄鏡、キセルがある。

検出した建物跡と施設は、遺構と遺物から江戸時代18世紀後半には存在した建物と考えられ、代官所が直営した龍源寺間歩の坑口前に置かれた四ヶ留役所跡と推定される。(『石見銀山遺跡発掘調査概要2』)

(4) 蔵泉寺口番所跡(平成元年度・2年度)

蔵泉寺口番所跡は江戸時代の銀山の入口に設置された口番所で、人と物資の出入りの管理をおこなった。江戸時代初頭には10ヶ所の口番所があり、蔵泉寺口番所は主要な道に置かれた口番所として幕末まで存続したといわれる。調査地は市道に面した北側の口番所推定地と、市道南の旧水田のI・II区である。

口番所跡に隣接する遺構としてII区で検出した石列がある。(第9図)石列は表土から30～50cm下層で検出し、10～40cm大の自然石を幅約40cmの範囲に不規則に置いたものである。調査区内で全長7mを測り、南北方向に延びている。この石列は40～50cm大の石をほぼ1m間隔で置き、その間に小さな石を並べ、さらにその上に10cm前後の石を2～3段に積んでいる。調査区の南ではこの石列とは別の、東西方向の石列を検出している。これは60cm前後の石を南側が一直線に並んで置き、幅約1m並べ、その間に10～30cm大の石を置き、幅約1

mの石列を構築している。

II区の東壁土層は上から旧耕作土、黒褐色土で、その下が疊とからみを含む黑色疊と暗褐色疊である。この4層の暗褐色疊内に石列は遺存している。5層が暗褐色砂質粘土、6層が暗褐色砂疊、9層が暗青灰色粘土層である。暗青灰色粘土層は木片を多く包含していることから、銀山川の氾濫原か河床と考えられる。疊とからみを含む黑色疊と暗褐色疊には磨滅した陶磁器がかなり含まれており、銀山の操業で廃棄されたものが運ばれ整地されたと考えられている。

これらの遺構の性格については、地上に作られた構造物の基礎と考えられ、銀山を囲んだ柵列と推定されている。(『石見銀山遺跡発掘調査概要3』)

市道北側の口番所推定地の調査では、上面が固く継まる整地層の広がりと石列がある。

整地された面は表土から80cm下層で検出し、調査区のほぼ全域に広がりがみられるが、西側に向かってその幅がだいぶ狭くなっている。この面と同じ高さで軟弱な土層が弧を描くように検出され、このあたりから粗く積まれた石列と段差が始まっている。

調査区の南壁の土層層序は、上から耕作土、黒色土、黒色砂疊、暗褐色砂疊、黒褐色砂疊で、整地された面にいたる。この面は黄褐色粘土で整地されていることが土層から観察される。その下層は黒褐色砂疊層となっており、すりやからみを大量に含んでいる。

遺物は陶磁器が大半である。整地された面からはほとんど出土せず、黒色土より下層のすりやからみを包含する砂疊層から、概ね16世紀末～17世紀代の陶磁器が出土している。この砂疊層は、II区と同様に銀山からすりやからみとともに、整地のために運ばれてきた可能性がある。これらの陶磁器には中国磁器と肥前陶器があり、青花の皿・碗、唐津の皿・碗がある。唐津皿の中には絵唐津や胎土目積みの痕跡をもつものがある。

耕作土下層の黒色土からは18～19世紀代の肥前

磁器を中心とした陶磁器が出土し、18世紀後半にみられる広東碗とよばれるものがまとまっている。

遺構と遺物から、この整地された面と石列は、江戸時代に構築されたとみることができるが、その性格については不明である。しかしⅡ区で検出した石列を含めて考へるならば、番所に伴う整地面にもなり、周辺の調査が進めば建物跡が検出される可能性はある。(『石見銀山遺跡発掘調査概要4』)

4 出土遺物

(1) 製鍊関連遺物

鉱山遺跡特有の出土遺物に、鉱石を選鉱する臼、鉱石の選鉱・精錬作業用の道具である金属製品、鉱石を焙解するるつぼなどの土製品がある。

選鉱用の臼は、石見銀山で要石と呼ばれる磨臼が多く出土している。第10図は龍源寺間歩四ツ留役所跡から出土した要石である。鉱石を要石の上で磨石を使って微粉状に粉砕することにより、使用痕が浅くぼむものである。要石はほとんどが安山岩を使用しており、平坦な面がすべて使われる場合が多い。また痕跡が深くぼむものがあり、これは鍛などを使って鉱石を碎く掲き臼として使用されたと考えられる。全国の鉱山遺跡をみると、選鉱用の臼としては圧倒的に回転臼が多いことが明らかにされており、石見銀山は磨臼タイプの臼を顕著にもつ鉱山として知られている。

採鉱の道具であるタガネや、精錬作業に伴って使用される秤の分銅などは、金属製品であることや磨滅するまで使用されるなどの理由により出土例は少ない。

第11図は山吹城下屋敷地区第5トレンチで検出した吹屋跡から出土した金属製品である。1・2はタガネ、3は分銅である。1は断面が偏平なタイプで、現存長7.4cm、幅1.5~1.7cm厚さ0.6cmを測る。2は断面が正方形に近く、現存長7.4cm厚さ1.3cmを測る。いずれも小型であることから採

鉱用のタガネではなく、製鍊の過程で使用されたタガネと考えられる。3は小型の分銅で、全長2.1cm重量14gを測る。1~3は吹屋で使用された道具と考えられる。これらの金属製品のほかには探鉱用のタガネが出土している。

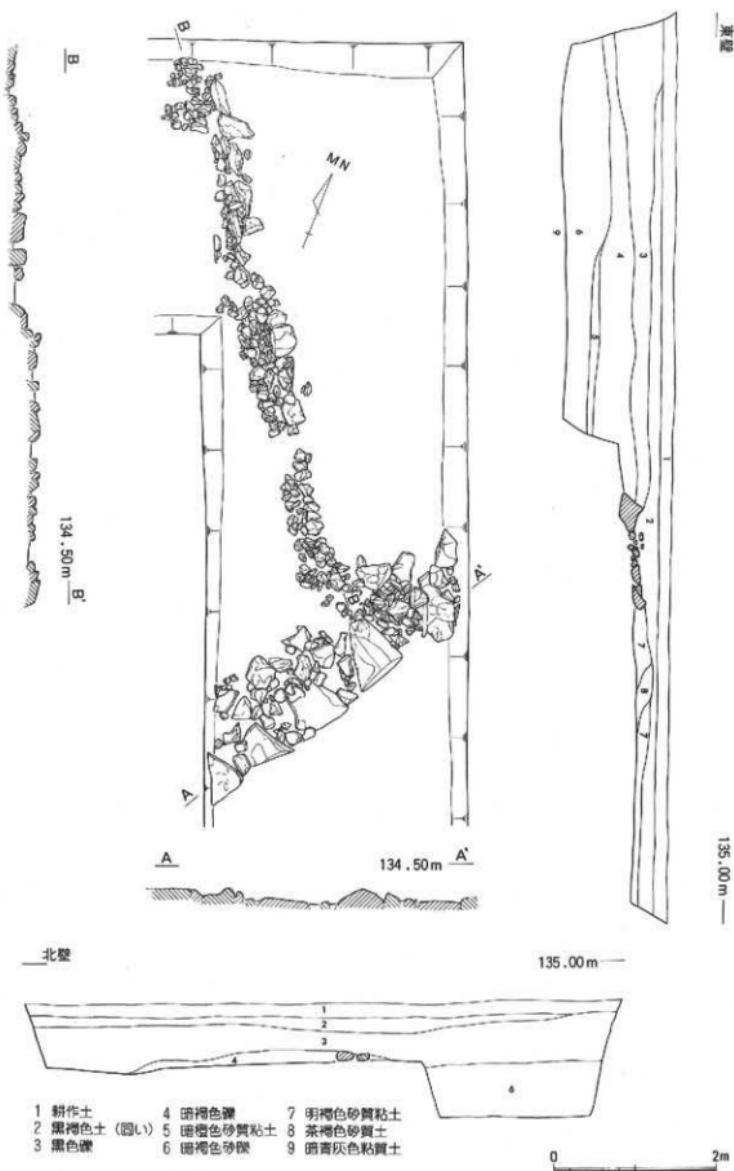
鉱石を焙解するるつぼの出土はほとんどないが、上市場地区の調査では碗形の土師質土器が2点出土しており、内面に金属分が付着していることから、るつぼと考えられている。かわらけは多量に出土しており、すすが付着したものが多いことから灯明皿に使用したと考えられるが、金属分が付着したと推測されるものがある。

(2) 陶磁器

遺物の中で最も多いのが陶磁器である。調査で明らかにされた年代・組成・生産地などについて、次のような様相が指摘できる。まず陶磁器の出土量と石見銀山の開発、最盛期、衰退の時期が概ね一致することである。すなわち、銀の生産量が著しく増加する16世紀末から17世紀前半という最盛期にあたる時期の陶磁器が圧倒的に多く、特に初期の唐津が大量に出土するようになる。これは銀山の人口の増大、唐津の生産の始まり、九州との流通ルートの確立が背景として考えられる。

次に、遺構ごとの陶磁器の出土量、組成という点では十分な検討がされていないが、唐津が入るようになると瀬戸美濃・備前・信楽の量が減り、17世紀前半に伊万里が入ると中国磁器が減少することである。詳細な組成について調査はされていないが、大龍寺谷地区の出土陶磁器の数量を示すと総数237点で、内訳が中國47(19.8%)唐津・唐津系75(31.6%)肥前・肥前系20(8.5%)福岡・上野・高取系11(4.7%)瀬戸美濃系2(0.8%)備前・備前系5(2.1%)不明陶器38(16.0%)不明磁器32(13.5%)となっている。

上市場地区最下層からは、瓦質の擂鉢、土師質土器が出土している。(第12図) 第12図1が8条の擂目をもつ擂鉢で、内外とも黒灰色を呈し、推



第9図 蔵泉寺口番所跡石列実測図 (1/60)

定で底径15.2cmを測るものである。2・3は土師質土器で、2は底径5.5cm、3は推定で口径7.8cm底径4.8cm器高1.8cmを測る。

この層からは、これらの土器と共に陶磁器が出土しておらず、石見銀山遺跡出土陶磁器の年代決定の指標としている唐津焼が出現する16世紀末より遡る可能性がある。銀山の開発が16世紀前半といわれ、またそれ以前の遺跡の存在も当然予測される。

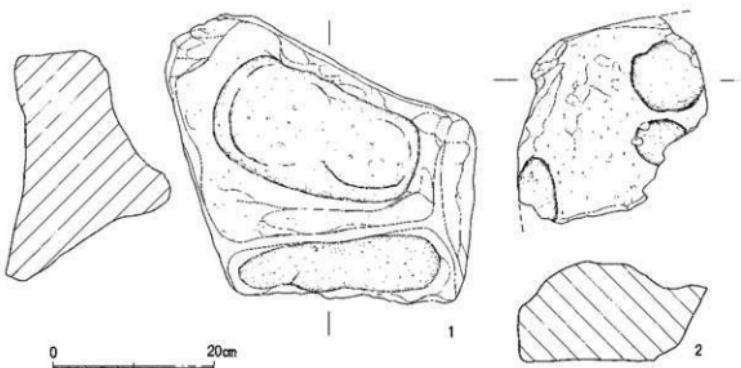
この間の調査で最も年代が古くなる遺物としては大龍寺谷地区から出土した竜泉窯系の青磁の香炉があり、14世紀後半～15世紀代の年代が与えられる。共伴遺物から伝世品と考えられるものである。

5 成果と課題

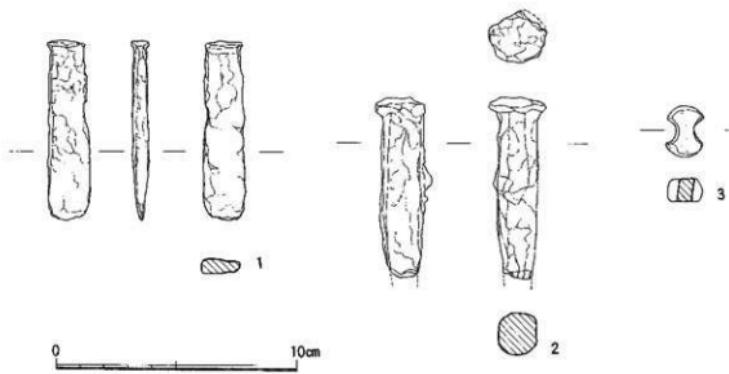
昭和58年度から始まった調査は拠点地点での遺構確認調査として実施されたため、調査面積が限られたことや、下層遺構の調査がおこなわれなかっただことで、それぞれの遺構の性格の解明という点において不十分であった。しかしながら、それぞれの調査地点で遺構がよく保存されていたこと、鉱山遺跡としての石見銀山の特徴が生産遺跡の発掘調査により明らかにされたこと、代官所跡から銀山に至るまでの谷筋の平坦地の遺跡の様相が明らかにされたことなどの点において、成果が得られた。

一連の調査結果から特徴をいくつか挙げてみると、まず遺構面と整地層の問題がある。各調査地点において遺構面が重複しており、整地層が何層も重なり合っている。たとえば藏泉寺口番所跡Ⅱ区の調査では、整地層内に包含する陶磁器の年代から近世初頭と近代初頭に大きな整地がおこなわれていることが確認された。特に近世初頭の整地層は鉱山で廃棄されるずりとからみを大量に含んでいる。このことは近世初頭に銀山支配に大きな転換期があり、それを反映していると推測される。

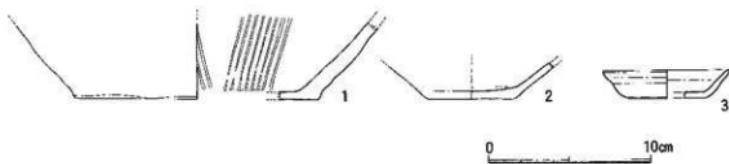
次に岩盤を加工した溝や溜め樹、石垣や石列などの遺構、石を加工した臼や鉢などの遺物が多いことが注目される。鉱山で石を穿つ、砕くという作業をおこなうため、石に対する加工技術が高かったことが背景として考えられる。



第10図 龍源寺間歩四ツ留役所跡出土石実測図（1／6）



第11図 山吹城下屋敷地区第5トレンチ出土金属製品実測図（1／2）



第12図 上市場地区最下層出土土器実測図（1／3）

第4章

石銀千畳敷地区

1 調査の概要

(1) 位置と環境

石銀千畳敷地区は大田市大森町大森字千畳敷南向山イ1621番地他に所在する。石銀は仙ノ山の山頂の北から東にかけての、標高470m前後の地点に広範囲にみられる地名である。石銀は鉛の古名といわれ、地名として「石銀池ノ段」「石銀薬師ノ段」「金生山」などが残る。分布調査の結果、平坦地、坑道、道、墓地、井戸、池、溝などの跡が広範囲に確認され、遺跡の広がりは20haはあると考えられる。

石見銀山の開発は戦国時代から本格的に始まるといわれ、『銀山旧記』によると、大永6年(1526)に博多の豪商神屋寿貞と出雲齋浦の銅山師三島清右衛門が採鉱をはじめ、天文2年(1533)に寿貞が銀精錬の灰吹法を現地に導入するとある。この頃盛んに採鉱されるのが石銀一帯の鉱石で、仙ノ山の頂上近くに存在する福石鉱床が採鉱の対象となつたと考えられている。福石鉱床の鉱石は、自然鉛、輝銀鉱、方鉛鉱、酸化鉄を含み、黄銅鉱、黄鉄鉱はほとんど存在しないという高品位な鉱石である。

石銀の初見史料は、天正9年(1581)の『石見銀山納所高注文』(『毛利家文書』)で、毛利氏支配下の石見銀山の公納額が記載され、その中に「いし金口役」とある。慶長5年(1600)11月の「石見銀山諸役未進付立之事」(『吉岡家文書』)によれば、慶長期に「石金ノ酒役」という税が課せられることから、石銀に酒屋があり鉱山の町が脈わっていたと想像される。また「高野山淨心院過去帳」(『上野家文書』)には石銀に39人分の名が

記されている。石銀本谷・石銀曾根・石銀のひら・石銀小池ノ段などに居住し、ほとんどが16世紀末～17世紀前半の天正から寛永期のものである。

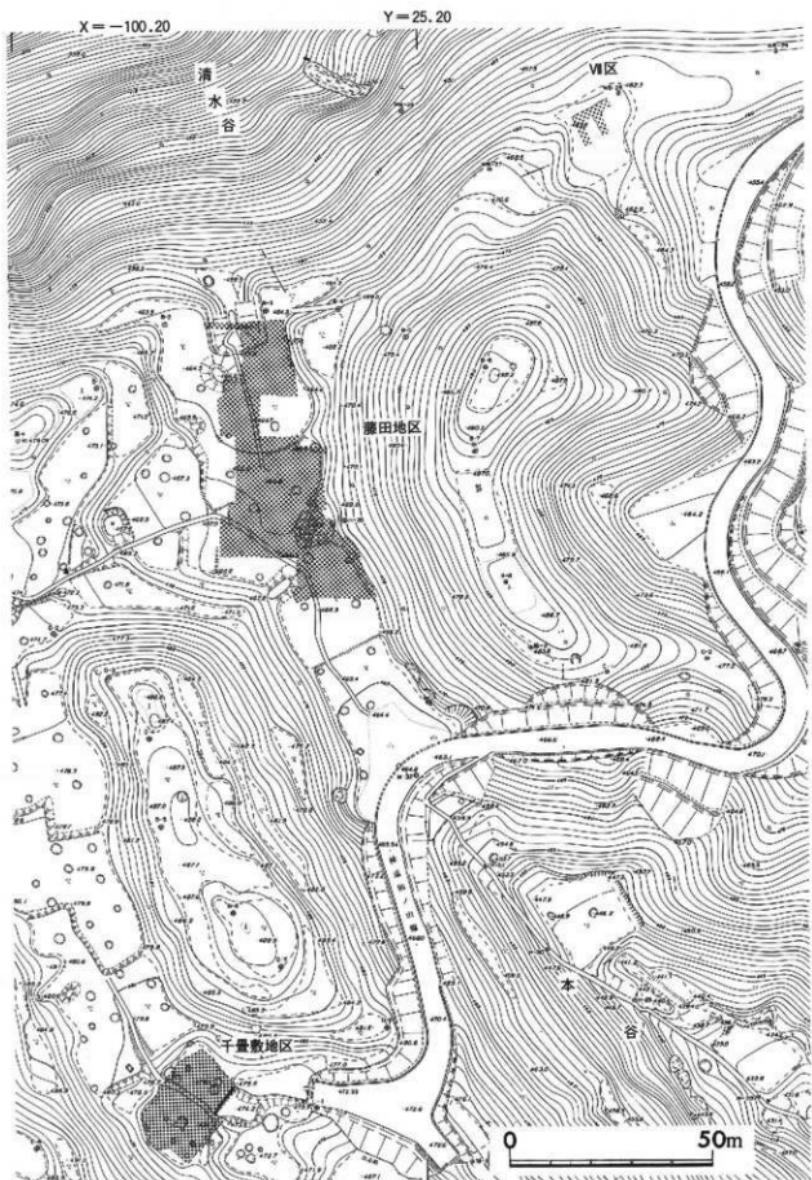
(2) 調査の経過

平成5年度から7年度にかけて、石銀千畳敷地区で調査を実施した。調査地は谷合に位置する平坦地で、この平坦地の中央に旧い道跡が東西方向に存在している。平成5年度は、この道跡から北側の平坦地で調査をおこない調査面積は160m²である。調査の結果、17世紀前半と考えられる吹屋(製錬所)跡を検出した。調査期間は平成6年1月から3月までのうち約2ヶ月を要し、3月末には終了した。

平成6・7年度は、5年度からの継続調査として、道跡とその南側の平坦地290m²を調査対象とした。調査の結果、5年度と同様に吹屋跡と考えられる建物跡を検出した。調査成果として注目されたのは、炉跡が良好な状態で検出されたことである。7年度は炉跡とその周辺部分50m²について調査区を拡張、吹屋の全体像の把握に努めた。調査期間は6年度は平成6年10月から12月までの3ヶ月間を、7年度は平成8年3月の1ヶ月間を要した。

石銀地区では分布調査により広範囲に遺跡の存在が確認されていたが、石銀地区を含めた石見銀山遺跡の全体像をつかむことは從来から大きな課題であった。

そのため平成5年度から発掘調査等の基礎資料となる縮尺500分の1の地形測量図の作成を始め、遺跡の調査と保存保護に備えることにした。



第13図 千畳敷地区・藤田地区調査区配置図

(3) 調査の概要

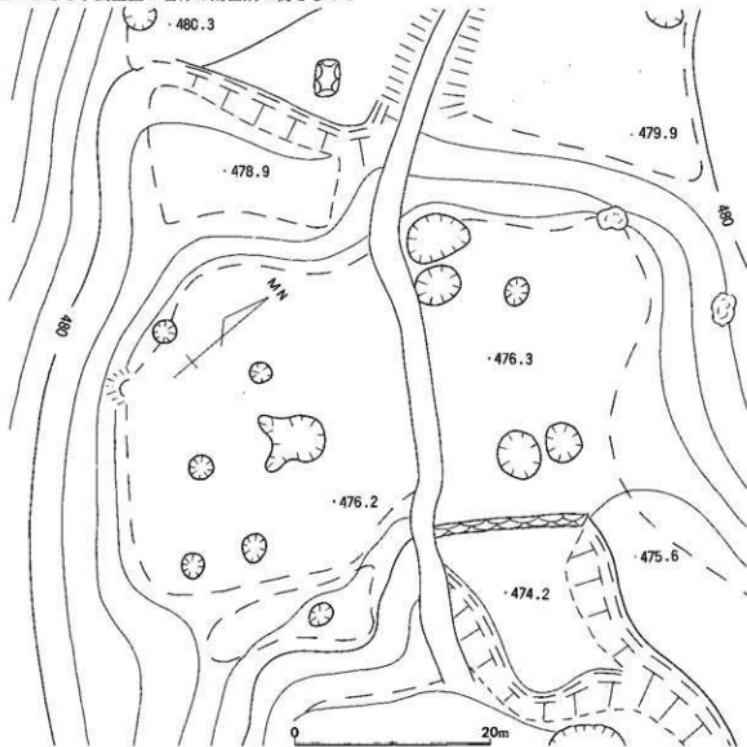
石銀千畳敷地区は、石銀藤田地区から100m南の谷合に位置する調査区である。(第13図) 谷中央の遺跡の両側にある平坦地500m²の調査をおこなった。

調査区の現況は竹林であり、道跡と直径1~2mのくぼ地が11ヶ所あり、東には石垣が存在していた。西側は一段高い平坦地となり、くぼ地や石積みの井戸跡が確認された。南側の斜面裾には、露頭掘り跡がある。

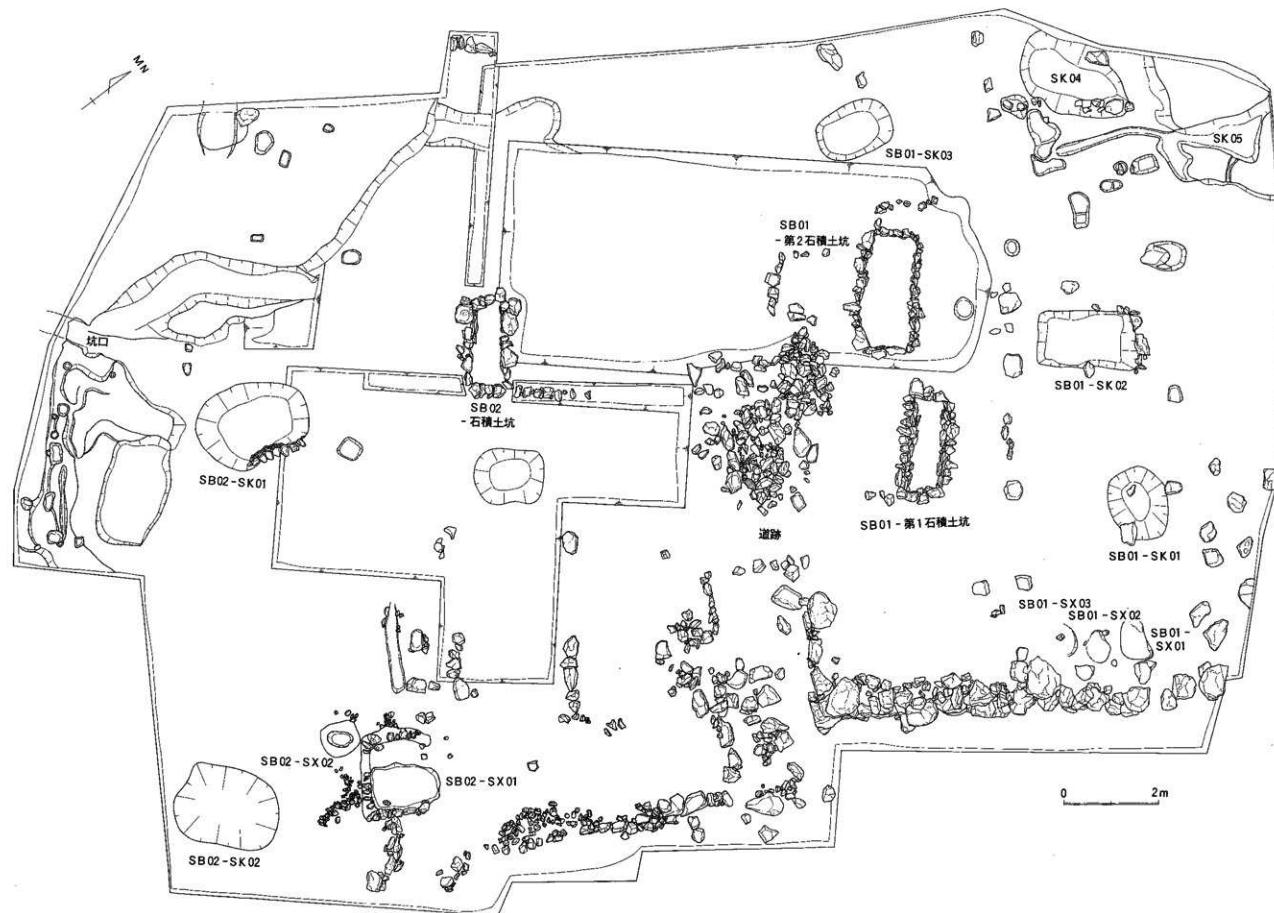
調査は任意に5m四方の調査区を設定し、南北方向の杭を南から1~5、東西方向の杭を西からA~Dとし、調査区の名称は南西隅の杭をもって

A 1区のように呼称することにした。

検出した遺構に、東西方向に走る道跡とその両側の建物跡がある。北側の建物跡は礎石列がのこり、建物内部に土坑、石積土坑、炉跡、ピットなどの遺構がある。調査はこの建物の構造と内部施設を明らかにすること目的に、この遺構面のみの調査とした。南側の建物跡は北側のものと同様に、礎石、石列を検出し、建物の内部には土坑、石積土坑、炉跡、ピットなどの遺構がある。また建物内部の下層で土間、土坑、炉跡を確認した。また調査区の南斜面裾では坑口を検出している。



第14図 千畳敷地区調査前地形測量図 (1/250)



第15図 千佛敷地区造構配置図

2 造構

(1) 道跡（第16図）

調査区のほぼ中央で検出した、東西方向に走る幅1.6～1.8mの道跡である。調査地と東側平坦地とを結ぶ部分は傾斜しており、その部分で階段状となる石列を3段検出している。この石列の周囲から比較的大きな石をいくつか検出したことから、これらの石は検出した石列とともに石段を構築していたものと推測される。この傾斜部分で検出した道の方向と平坦地の中で検出した道の方向が少しずれることや、道の石敷きに高低差があることなどから、新旧の二つの道が重複して検出されたものと考えられる。上層の道跡は幅1.6m前後を割り、道の両側の端には大きな石で石列をつくることで道を区画し、この間に礫が敷かれている。石敷きの中には要石、鞍臼が一緒に埋設され、礫と共に陶磁器なども敷かれている。下層の道跡は傾斜部分では幅1.8m前後を測る。SB01の石垣と南側で検出した石列により道を区画している。

(2) SB01（第15図）

SB01は道跡の北側で検出した礎石建物跡で、内部に石積土坑、炉跡、土坑などの造構がある。南北7m以上を測る石垣によって造成された平坦地に位置し、建物の敷地は道に面して間口7間奥行4間以上になる。建物の基礎は礎石で、石垣に平行な南北方向の礎石列と敷地の中央に東西の礎石列がある。南北方向のものは長さ4mを測り、礎石間距離は1.3m前後となる。東西方向のものは礎石は直線になるものの、礎石間距離は不規則である。これらの礎石列の方向と第1石積土坑、炉跡SX01～03、土坑SK02は平行な位置関係にあり、SB01の内部施設か、あるいは付属施設と考えられる。建物の規模については、造構の配置から間口5間奥行4間以上になる可能性があり、SK04・05については建物の屋外と推測される。SB01は土面から出土した陶磁

器の年代から、17世紀前半と考えられる。

第1石積土坑の西に位置する第2石積造構については、高低差があることから、第1石積土坑以前の造構と考えられる。

第1石積土坑（第17図）

内法で長辺1.8m短辺0.5m深さ0.7mを測る長方形の石積土坑である。3～5段に凝灰岩系の自然石を積み、隙間に黄褐色粘土で充填している。底面は黄褐色粘土で固く締まっている。土坑内は暗褐色砂層が全体に堆積し、比重過鉛後に廃棄されるゆりかすと考えられる。ゆりかすの堆積と石積にみられる粘土の充填から、水を溜める施設と考えられる。ゆりかすの堆積層から陶磁器と銭貨が出土している。

第2石積土坑（第18図）

第1石積土坑の西で検出した、内法で長辺2.3m短辺0.9～1.0m深さ0.8mを測る長方形の石積土坑である。4～5段に凝灰岩系の自然石を積み、隙間に黄褐色粘土で充填している。土坑内はゆりかすの暗褐色砂層が堆積している。土坑内の東側の石積の近くで、底面に打ち込まれた杭を1本検出している。ゆりかすの堆積層からほぼ完形の肥前系陶器の碗（第29図-9）が出土している。年代は1620～50年代が与えられるものである。第1石積土坑と同様に、水を溜める施設と考えられる。

SX01・02・03（第19図）

SX01の石垣上の礎石に沿って、3基の炉跡を検出している。SX01はプランは梢円形を呈し、長径90cm短径50cmを測る。内部は炭化物・焼土を含む黒褐色土が深さ5cmで堆積している。炉の西側が被熱により赤変して固く締まり、この部分に接して10cm前後の3個の石を検出している。SX02・03は復原すると直径60cm前後の円形になり、内部には炭化物と焼土を含む黒褐色土が堆積しているが、半分以上が壊れている。SX01～03は炉跡と考えられるが、遺存状態が悪いため、詳しい構造は不明である。いずれも礎石列



第16図 千畳敷地区道路実測図 (1/60)

には接していることから、建物の壁に接して構築された炉と推測される。

S K 0 1 (第20図)

平面形は梢円形を呈し、長径1.5m短径1.3m深さ0.7mを測る。土坑の接して2個の平坦な石があるが、いずれも土坑に伴うものではなく、建物の礫石と考えられる。また土坑の底面で埋設された石を検出している。土坑内の土層は1層が黒褐色土、2層が黄褐色粘質土である。2層から陶磁器の小片とかわらけが3点出土している。かわらけはいずれもすすの付着と二次焼成の痕跡があることから、灯明皿と考えられる。(第29図1~3)遺構の性格については不明である。

S K 0 2 (第21図)

プランは長方形を呈し、長辺1.9~2.1m短辺1.2m深さ0.35~0.4mを測る。土坑の北辺上端には石列がある。土坑内の土層は、1層がゆりかすの暗褐色砂質土、2層が暗茶褐色粘土のブロックを含むゆりかすの暗褐色砂質土である。3層の暗

茶褐色粘土は粘性が強く、土坑底面と壁面に付着するように堆積している。

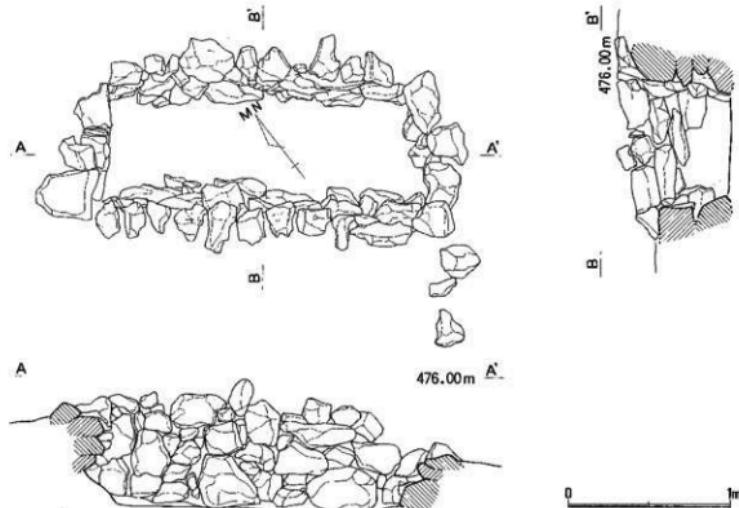
出土した遺物には、陶磁器・錢貨がある。陶磁器はいずれも小片で、中国磁器、肥前陶磁、かわらけがある。錢貨は鈎化が進んだ無文錢である。

S K 0 2 は堆積している土層から、水を溜める施設と考えられる。

S K 0 3・0 4・0 5 (第15図・第22図)

S K 0 3 は平面形が梢円形を呈し、長径1.6m短径1.2m深さ0.7mを測る。土坑内の土層は暗褐色粘質土で、壁面はすべて黄褐色粘質土で貼られている。土坑から出土した遺物として、陶磁器、硯がある。(第29図5、11)陶磁器は瀬戸美濃系志野の菊皿である。土坑は粘土貼りであることから、水を溜める施設と推定される。

S K 0 4 は S B 0 1 の西側、調査区の西端で検出した不整形の土坑である。土坑内はほとんど礫が堆積していることが確認された。S K 0 5 は S K 0 4 の北側に位置する、岩盤を掘削した不整形



第17図 千疊敷地区 S B 0 1 内第1石積土坑実測図 (1/30)

の土坑である。鉱脈を探査したと推定される溝状の痕跡があることから、探鉱のために掘られた土坑と考えられる。SK 04・05からは遺物は出土していない。

(3) SB 02 (第15図)

SB 02は遺跡の南で検出した建物跡である。部分的に礫石と石列を検出しているので建物の規模を復原することは難しい。現存する礫石が2mの間隔で並ぶものがあり、それらを含めた建物の敷地は道に面して間口8間奥行5間以上となっている。建物内の施設と考えられる遺構は、礫石との位置関係から石積土坑、炉跡SX 01・02である。SB 02の年代については、出土した陶磁器の年代からSB 01と同様に17世紀前半と考えられる。

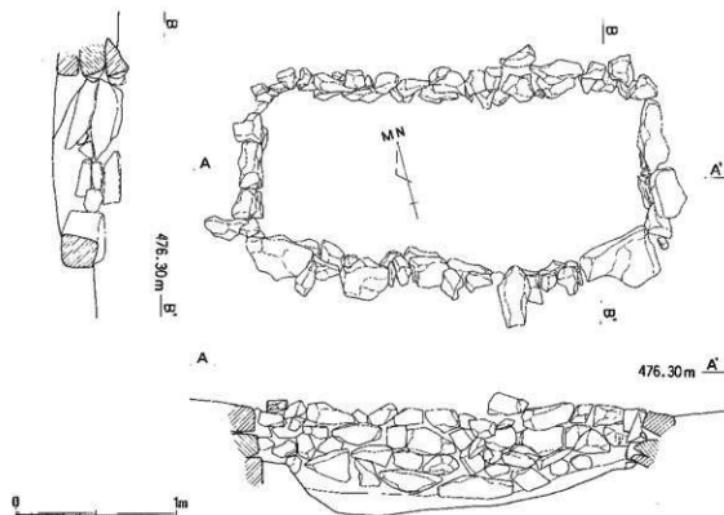
下層の遺構面を確認する為にSB 02の土間を掘り下げ、20cm下層の土間面で土坑と壊れた炉跡を検出した。

石積土坑(第23図)

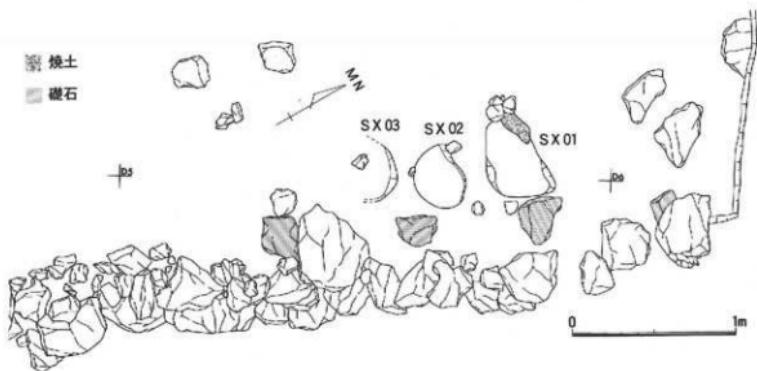
内法で長辺2.0m短辺0.6m深さ0.5mを測る長方形の石積土坑である。凝灰岩系の自然石を3~4段に積んだもので、石の隙間に粘土が充填され、土坑底面には粘土が貼られている。内部にはゆりかすと考えられる茶褐色砂層が堆積している。この土坑北西の石壁上段には要石があり、石積への転用か土坑と共に使用されたと考えられる。

SX 01 (第24図)

平面形が隅丸方形の炉跡で、長辺が1.5m短辺が1.0mを測る。炉跡の形と一致しないが、粘土を充填して築かれた石列が周囲に廻っている。炉内の土層は、2層が黒褐色砂質粘土で、焼土ブロック、炭を包含し、この層から羽口片、土製品の破片、からみ、陶磁器が出土している。南北方向の土層を観察すると3・4層の下面が炉底になり、赤橙色から赤茶色に被熱変色し、一部には金属分が付着している。また、被熱の範囲がほぼ1m四方に広がることが確認され、炉本体として使用さ



第18図 千量敷地区SB 01内第2石積土坑実測図(1/30)



第19図 千畳敷地区SB 01内SX 01・02・03実測図(1/30)

れたのはこの部分と考えられる。周辺を走る石列については、炉構築以前に存在した施設の可能性がある。

炉跡の性格については、規模が大きいことが指摘できるものの、製錬工程のどの炉にあたるか確定できないのが現状である。年代については、炉内や周囲の作業面から出土した陶磁器の年代から、17世紀前半とされる。

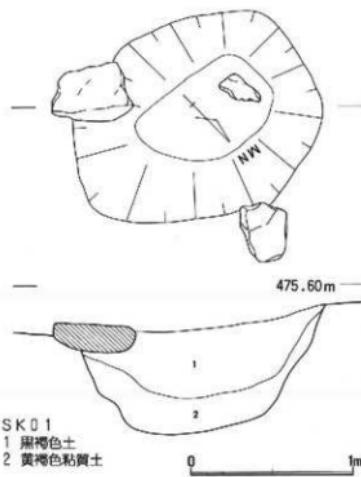
SX 02 (第25図)

SX 01 の南に隣接して位置し、平面形は径90cmのほぼ円形を呈している。炉内埋土は粒子が微小な茶褐色砂層で二次的な堆積と考えられる。炉底部は黄褐色粘土が一面に貼られているが、被熱の痕跡は観察されないので、炉底の粘土の一部が削平をうけた可能性がある。年代は1号炉と同様に17世紀前半とされる。

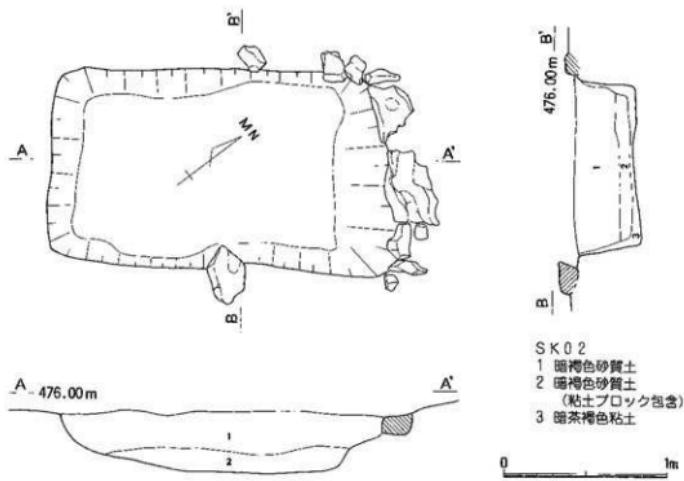
SK 01・02 (第15図、第26図)

SK 01 は坑口の北で検出した、平面形が梢円形を呈する土坑で、長径2.4m短径1.5m深さ1.4mを測る。東側の壁には石積みが築かれている。SK 01 の埋土は、ほとんどが選鉱ずりと考えられる礫が堆積し、土坑底面は平坦となっている。

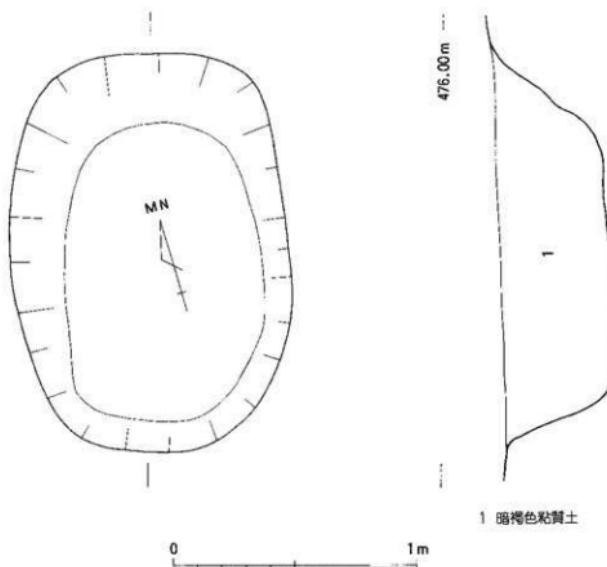
SK 02 は SX 01・02 の南で検出した平面形が梢円形を呈する土坑で、長径2.2m短径1.4m



第20図 千畳敷地区SB 01内SK 01実測図(1/30)



第21図 千疊敷地区SB01内SK02実測図 (1/30)



第22図 千疊敷地区SB01内SK03実測図 (1/20)

深さ1.2mを測る。全面が粘土貼りで、土坑底面には鉄・マンガン分の堆積が観察された。土坑内からは陶磁器が出土している。この土坑は水を溜めた施設と考えられる。

(4) 坑道跡（第27図）

長方形に近い台形の坑口である。上辺が0.6m下辺が0.45m、高さは復原すると1.05mを測る。坑道は奥に向かって左に曲がりながら斜坑となっている。坑道内の観察から長期間の採鉱がおこなわれたとは考えられず、探査坑道の可能性がある。坑口前の土間からは陶磁器がいくつか出土しているが、その中にほぼ完形の肥前磁器の染付皿があり、坑道が稼行した時期の指標となる。（第29図10）この皿の年代は概ね1690～1730年代と考えられる。

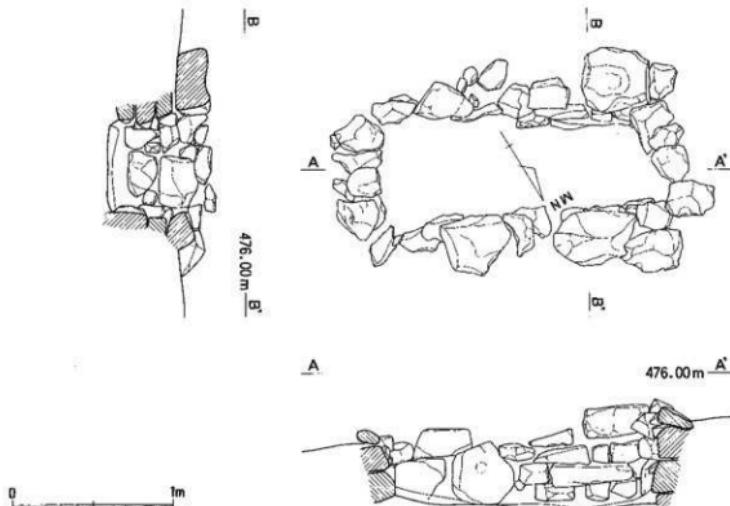
坑道跡の北で、鉱脈を露頭掘りで採掘した跡と考えられる岩盤を掘削した溝状遺構を検出した。幅0.7～1.2m深さ0.7m前後を測り、溝は坑口の下

部でひ押しとなり岩盤内に入っていく。坑道跡と同じ鉱脈が採掘されたと考えられ、溝の埋土からは16世紀後半代の陶磁器が出土している。

この露頭掘りの跡は、初めて検出した戦国期に遡ると考えられる採鉱の遺構である。当時の採鉱は谷筋などにみられる鉱脈を露頭掘りし、その後現地で精錬作業がおこなうためと造成がおこなわれ、吹屋が建てられると想像できる。

(5) 岩盤を加工した遺構（第28図）

坑道跡の東側で、岩盤を加工した平坦面に穿たれた溝・ピット・土坑を検出した。ピットはほぼ1m間隔で東西方向に5基が並び、平面形は円形と方形のものがあり、深さは20～40cmを測る。このほかにもピットが穿たれており、これらは構造物の柱穴になると推測される。このピットの並びと重複するように幅15～20cm深さ5cm前後の溝が穿たれている。この平坦面の北側60cm下方に、長辺2.2m、短辺1.4mを測る土坑が加工されており、



第23図 千疊敷地区SB 02内石積土坑実測図(1/30)

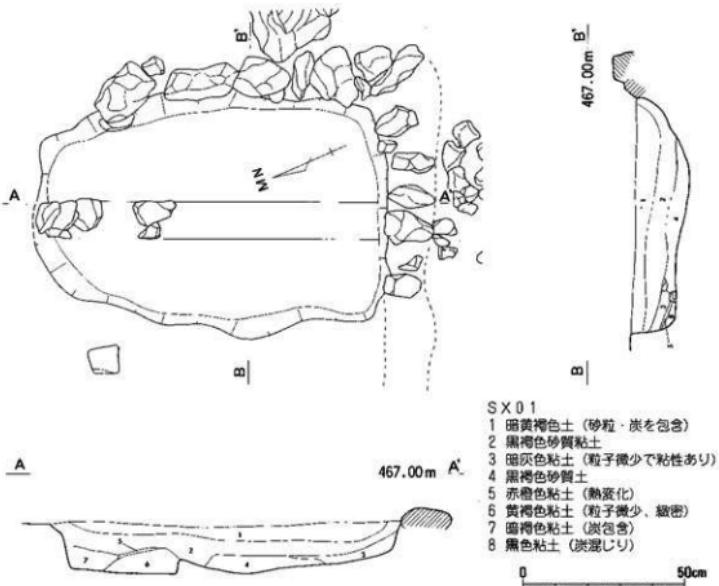
プランは隅丸方形を呈している。この土坑の北側底部は削平を受けたものと考えられる。

3 遺物

出土した遺物のうち図化したものは、SB 01とSB 02の遺構面とその整地層、並びに遺構面と上層の遺物包含層からの出土である。

第29図1～3はSB 01内SK 01から出土した土師質土器である。1～3とも明瞭な底部をもつ皿で、回転糸切痕をもつ。底部から口縁にかけて1、3はほぼまっすぐに、2はやや外湾気味に立ち上がる。1は推定で口径9.2cm器高2.4cm、2は推定で口径10.0cm器高2.5cm、3は口径9.8cm器高2.5cmである。4は見込みに龍文を描く青花皿で、推定で口径13.4cm器高2.6cmを測る。5はSB 01内SK 03から出土した瀬戸美濃系志野の灰

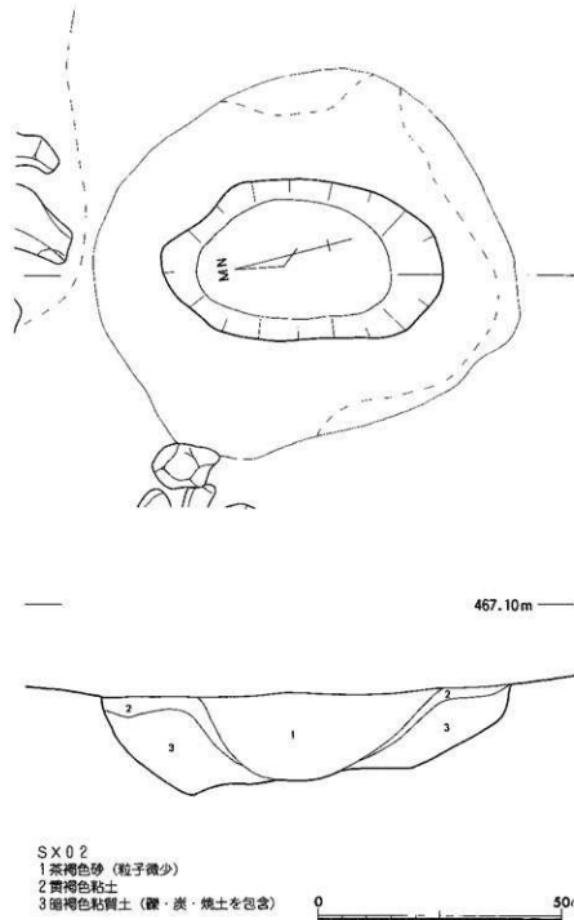
釉菊皿で、底径4.5cmである。6はSB 02の西側の岩盤に掘り込まれた土坑内から出土した青花酒杯で、口径7.0cmのものである。外面に馬と円形文様を描く。7は唐津皿で、底径3.6cmを測る。8は肥前磁器皿で口径14.0cm器高3.0cmで、内面に草花文を描く型打ち成形のものである。9はSB 01内第2石積土坑から出土した肥前系陶器碗で、口径11.3cm器高7.3cmである。高台疊付以外は内外とも明茶褐色に施釉されている。10は坑口前の土間面から出土した肥前磁器染付皿で、口径13.2cm器高2.8cmを測る。内面は松竹梅、外面は唐草文が描かれ「大明年製」の裏銘がある。11はSB 01内SK 03から出土した覗の破片である。12・13はSB 02内SX 01から出土した羽口の先端である。12・13とも断面方形で先端に金属分が付着している。12は一辺5cm前後、送風孔の径が15mm、13は一辺5cm前後、送風孔の径が18mmを測



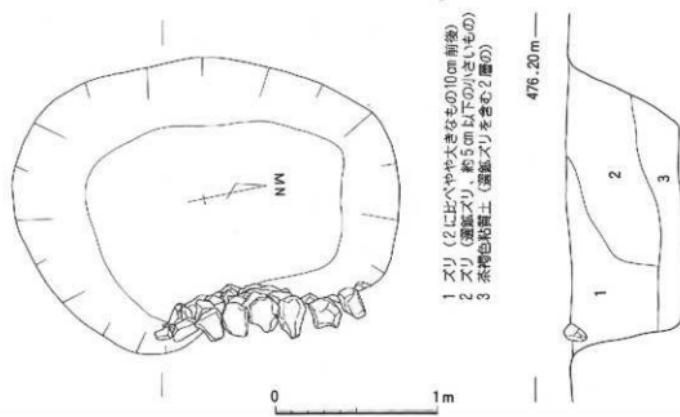
第24図 千畳敷地区SB 02内SX 01実測図 (1/15)

る。14はS B 0 2の整地層で出土した青花碗で底径5.5cmを測り、見込みには果物と二重界線を描く。15は青花皿で推定で口径11.0cm器高2.7cmである。16は青花酒杯で底径2.8cmで、高台内面に「福」の字がある。17はS B 0 2の南、下層で検出した露頭掘り跡の溝状遺構から出土した青花碁

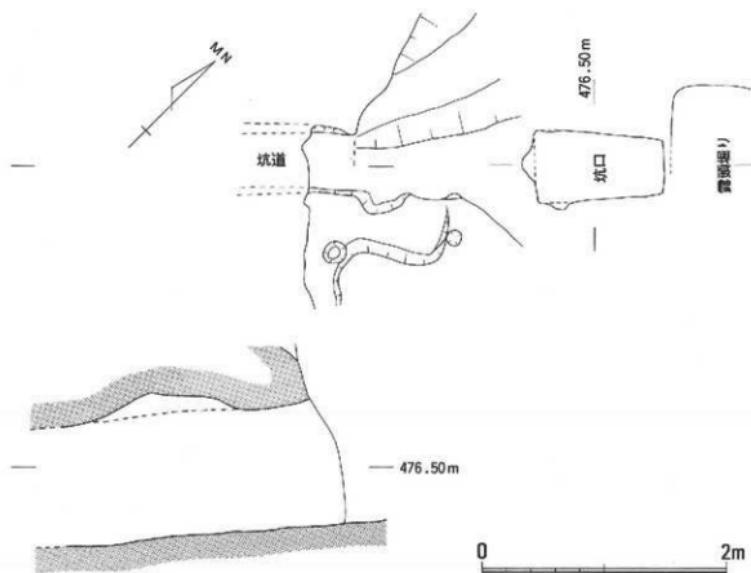
筒底の皿で口径11.0cm器高2.9cmで、見込みの釉を輪状にかき取っている。18は青花碁筒底の皿で底径4.0cmを測る。19は削り出し高台の皿で口径11.0cm器高3.0cmのもので、見込みの釉を輪状にかき取っている。20は瀬戸美濃系の鉄釉をかけた天目茶碗で、推定で口径12.6cmのものである。21は美濃の



第25図 千疊敷地区 S B 0 2 内 S X 0 2 実測図 (1/10)



第26図 千畳敷地区SB 02内SK 01実測図 (1/30)

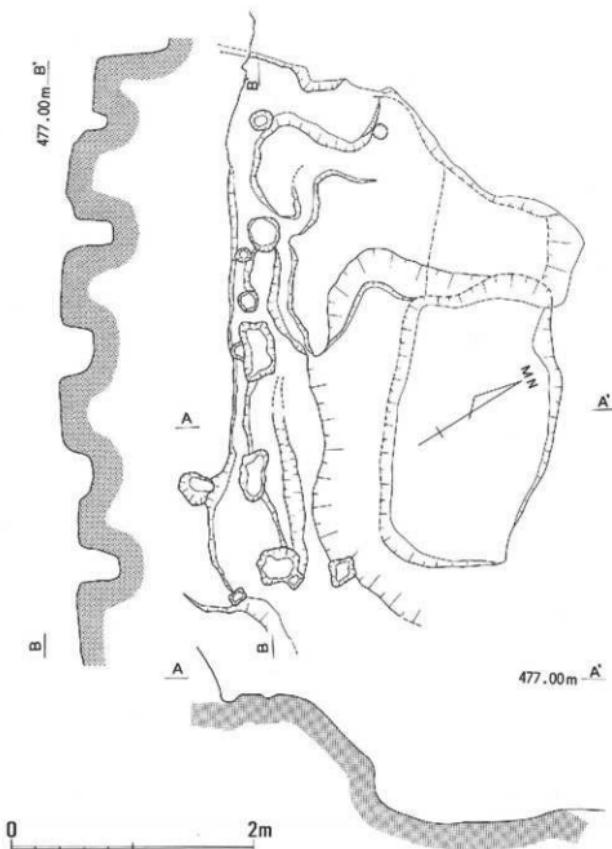


第27図 千畳敷地区坑道実測図 (1/40)

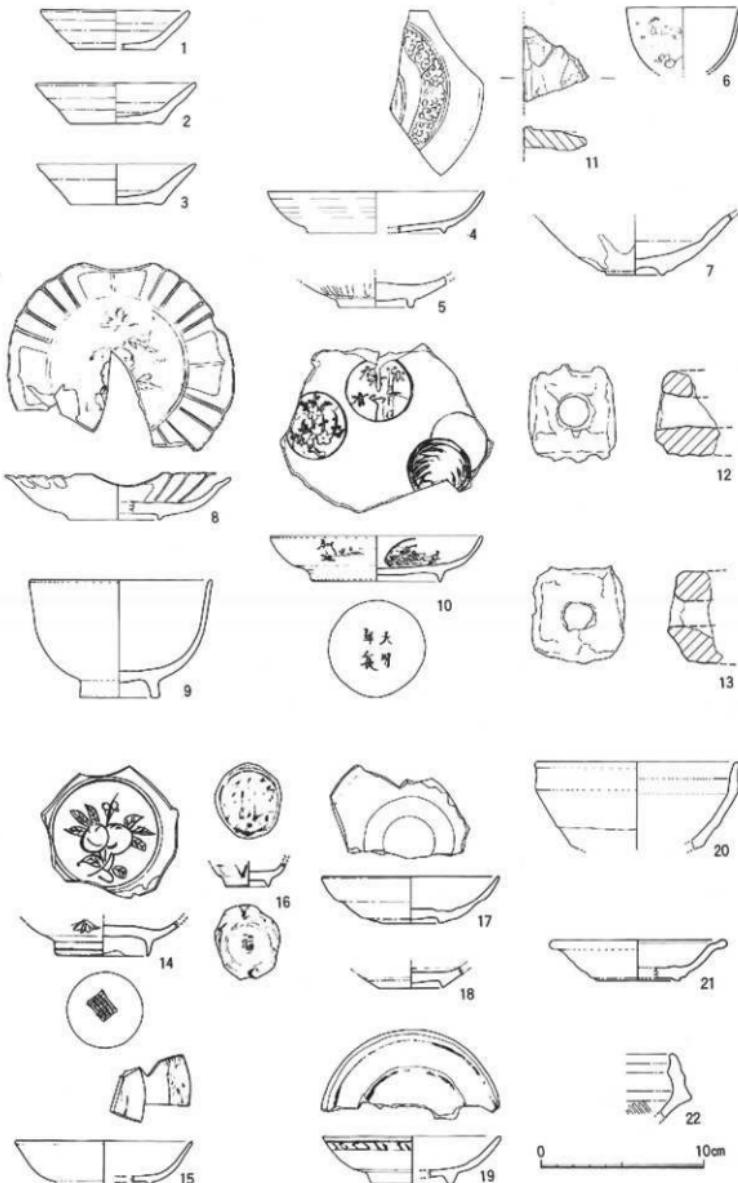
折線皿で口径11.0cm器高2.5cm、22は備前擂鉢の口縁である。

第30図1は備前系の大形の平鉢で、推定で口径33.0cmのもので、口縁端部を内側につまみあげるよう形作っている。2～4は備前擂鉢で、いずれも口縁部外面に凹線が廻るものである。推定で2は口径33.0cm、3は口径28.0cm、4は口径27.6cmを測る。4はSB02の整地層から出土してい

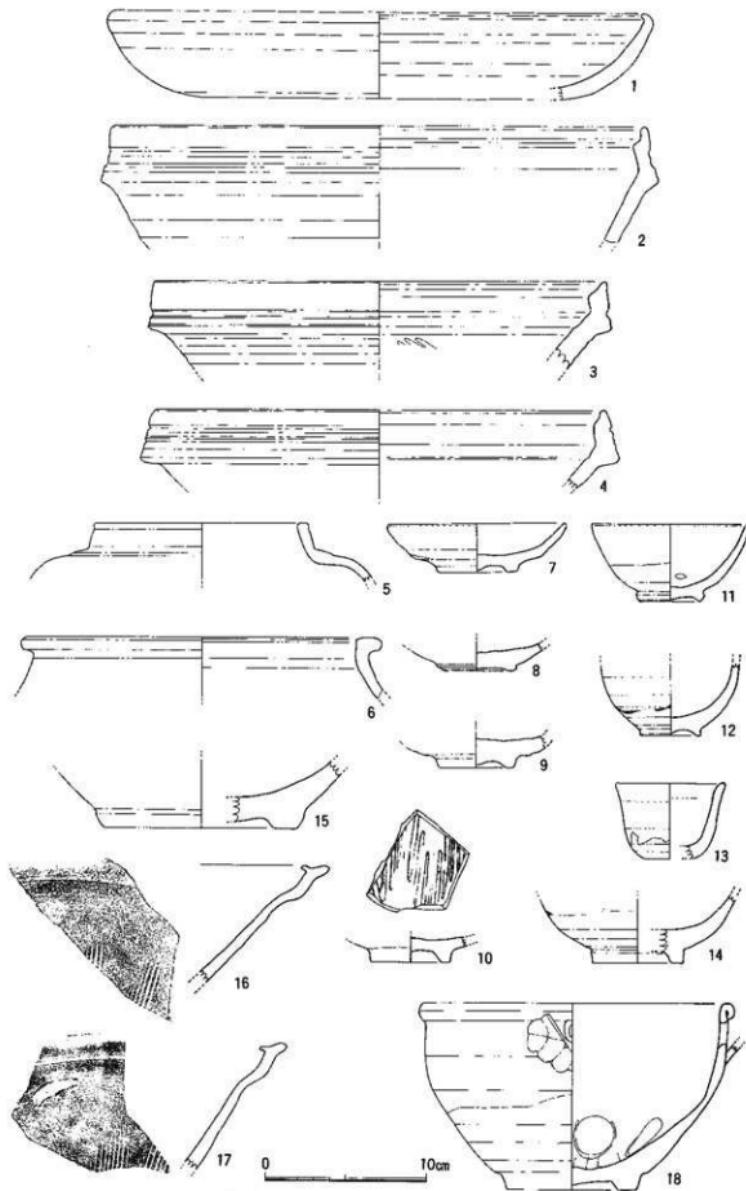
る。5は地元産陶器の壺と考えられるもので、推定で口径13.2cmを測る。6～18は肥前陶器である。6は壺の口縁で、推定で口径22.3cmのものである。7は見込に胎土目当の痕跡をもつ皿で口径12.0cm器高3.0cmを測る。8は見込に砂目当の痕跡のある皿で底径5.0cmを測る。9は見込に胎土目当の痕跡のある碗で、暗緑色の釉がかかり、底径4.7cmを測る。10はSB01の整地層から出土し



第28図 千疊敷地区岩盤加工遺構実測図 (1/40)



第29図 千量敷地区出土遺物実測図(1) (1/3)



第30図 千疊敷地区出土遺物実測図(2) (1/3)

た鉄絵の皿で底径5.0cmのもの、11・12は碗で11はSB01内SK03周辺の遺構面から出土し、口径9.8cm器高4.8cm、12はSB01の整地層から出土し、底径3.7cmである。13は小杯で推定で口径6.8cmを測り、底部は回転糸切痕が未調整である。14は薬灰釉の碗と思われるもので、底径5.6cmのものである。15は擂鉢の底部で推定で底径12.0cmのものである。16・17は擂鉢で、いずれも口縁を内側に折り返して突帯状となり、条痕はかなり磨滅している。18はSB02内SK02から出土した片口鉢で、口径19.0cm器高11.5cmのもので、口縁は玉縁で折り返した跡が明瞭に残る。体部下半はろくろ削りで、内面に釉のかからない横円形の跡が4個残る。

図31図1～6は肥前磁器である。1・3・4は皿で口唇が外反しないもので、文様は菊をあらわした草花文で、1は口径13.2cm器高4.0cm、3は口径13.2cm器高3.6cm、4は底径5.4cmでほぼ同一規格品であろう。2はSB02の遺構面から出土した染付皿で口径13.0cm器高13.3cmを測る。5は染付碗で体部から口縁にかけてゆるやかに内湾するもので、文様は網目文、底径4.0cmである。6は染付碗で体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がるものの、草花文をあらわしたものである。推定で口径6.0cmを測る。7～13は土師質土器である。7は口径6.6cmを測る。8～13はほとんどが明瞭な底部をもつものであるが、12のように底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反するものがある。8は口径7.4cm器高1.9cm、9は口径7.6cm器高2.2cm、10は口径8.2cm器高1.5cm、11は口径9.2cm器高2.1cm、12は口径11.2cm器高2.2cm、13は口径11.4cm器高2.1cmのものである。10・11の底部は回転糸切痕が未調整である。これらのかわらけは、内外面にすすの付着や油痕がみられるものと、二次焼成をうけ全体が黒色を呈するものがあり、いずれも灯明皿として使用されたと考えられる。14は地元産と考えられる淡橙色を呈する陶器で、鍋状の器形になるのか

もしれない。15～17は、土師質土器で坩堝になるものである。15は手づくねで成形され、口縁部が内傾し内面に金属分の付着が認められる。16・17は口縁端部が厚くなり内傾している。18は小柄で象嵌があり、現存長9.6cmを測る。19はキセルの雁首、20は砥石である。

このほか千疊敷地区から出土した遺物に、要石・鞍臼・砥石・碁石などの石製品、つるはし・釘などの鉄製品、中国銭・寛永通宝・無文銭などの銭貨がある。また製錬とともに廃棄されるずり・ゆりかす・からみなどは大量に出土している。

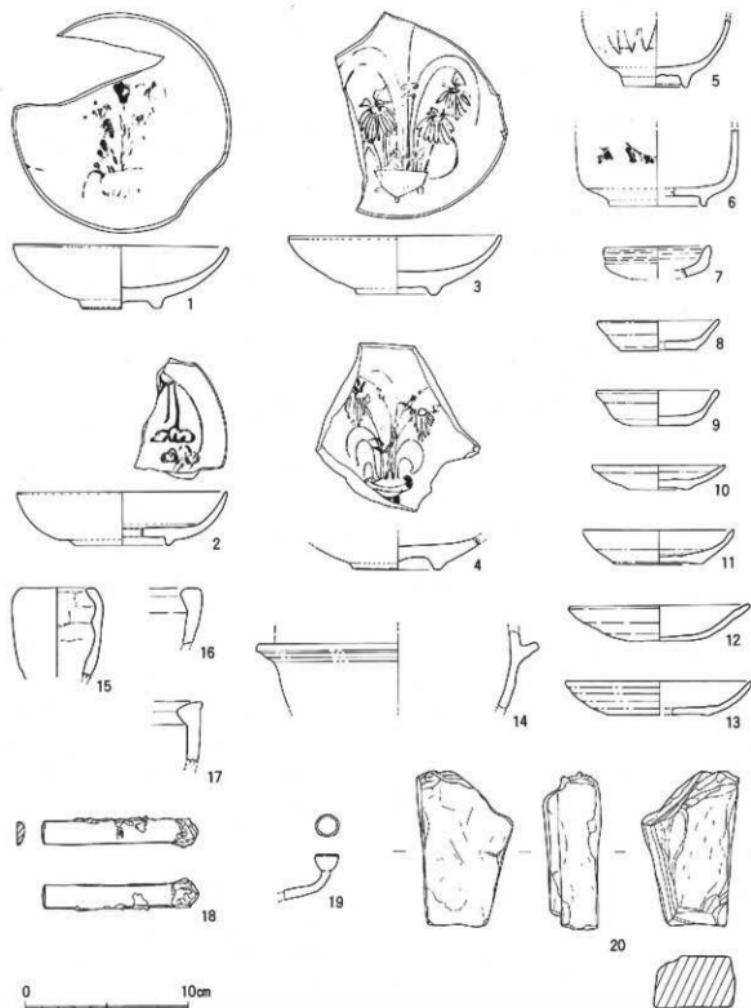
4 成果

石銀千疊敷地区の調査成果として以下のことがあげられる。建物の性格は、於紅ヶ谷と石銀を結ぶ道の両側に位置した吹屋跡と考えられる。

遺跡の年代は、出土した陶磁器などの年代から17世紀前半とと考えられ、吹屋の内部に選鉱から精錬までをおこなう施設があり、建物の構造は礎石建物であることが特徴といえる。また吹屋に隣接する遺構のほかに、露頭掘りの跡や坑道跡が検出され、採鉱関連遺構が検出されたのも大きな成果である。

調査の結果、石見銀山の最盛期である17世紀前半で石銀地域に吹屋が存在することが明らかになった。このことは採鉱の場所に隣接して吹屋があり、そこで選鉱から精錬までを行っていた、ということになる。

これまで石見銀山の採鉱・選鉱・精錬については具体的な場所や作業内容が未解明であり、今回の調査成果は石見銀山の鉱山としての実態を知る上で大きな意義があった。そして吹屋が存在する平坦地が石垣を築き大規模に造成され、それと同時に道路が敷設されていること、また国内外の陶磁器が大量に出土したことなどからは、石銀地域に鉱山町が存在したと考えることができる。



第31図 千量敷地区出土遺物実測図(3)(1/3)

第5章

石銀藤田地区

1 調査の経過と概要

(1) 調査の経過

藤田地区的調査は、島根県・大田市教育委員会の共同調査として平成8～10年度にかけて調査をおこなった。

平成8年度調査

平成8年6月4日に開催された第1回発掘調査委員会に提示した調査計画に基づいて6月21日調査に着手し、藤田地区的南側から調査を行なっている。

7月17日、18日に第1回目の発掘調査指導会を行い、奈良国立文化財研究所の松村室長、村上主任研究員から指導を受ける。指導内容は、一つのテラス、建物内部の施設の把握。炉跡の形態変化の検討であった。この指導を受け調査区を拡張し吹屋建物の全容を解明することとした。その結果、東斜面において溝、土坑を検出した。

第2回調査指導会は文化庁の小池調査官より調査方法について8月21日から23日にかけて指導を受ける。羽口、からみ、ゆりかすの出土状況に注意が必要であり、炉跡は下部構造についても状況により調査する。建物跡の遺構配置をつかむようすることといった、鉱山遺跡として調査する際の留意点について指導をうける。

9月3日には、世界遺産コーディネーターのヘンリー・クリア氏の視察が行なわれた。

9月18日、19日には、妙見山麓遺跡調査会の神崎勝氏から指導を受ける。遺跡全体の残存状況が良く、採鉱から冶金までの工程がわかる。炉跡は、どの段階のものなのか検討する必要があり、下部

構造を断ち割により調査すべきである。下層の古い段階の遺構面の状況の確認が必要である。との指導を受ける。

10月3・4日に第2回発掘調査委員会の指導を受ける。内容は、吹屋・坑道等の時期・性格の究明と、16世紀代の遺構の確認をするということであった。

10月19日に広島県立美術館の村上主任学芸員より、出土陶磁器について指導を受ける。藤田地区で出土した陶磁器の時期は、17～18世紀で17世紀初頭のものが多くみられる。陶磁器の組成は、広瀬町富田川河床遺跡と同様で、同じような町が展開していたと考えられる。千疊敷地区に比べて藤田地区の方が新しい時期の遺物が多く見られるようである。

11月25～27日に奈良国立文化財研究所松村室長、村上主任研究官、(株)大館分析技術センター大瀧部長より遺跡の調査と科学分析の指導を受ける。発掘調査では坑道と建物跡の関係をつかむこと、道路と水路の関係を把握することに重点を置く。科学分析は基礎データを蓄積するため、ずり、ゆりかす、粘土から行なうほうが良い。分析方法は、螢光X線定性分析、定量分析、品位分析、EPM Aなどがあり、破壊分析を行なう。

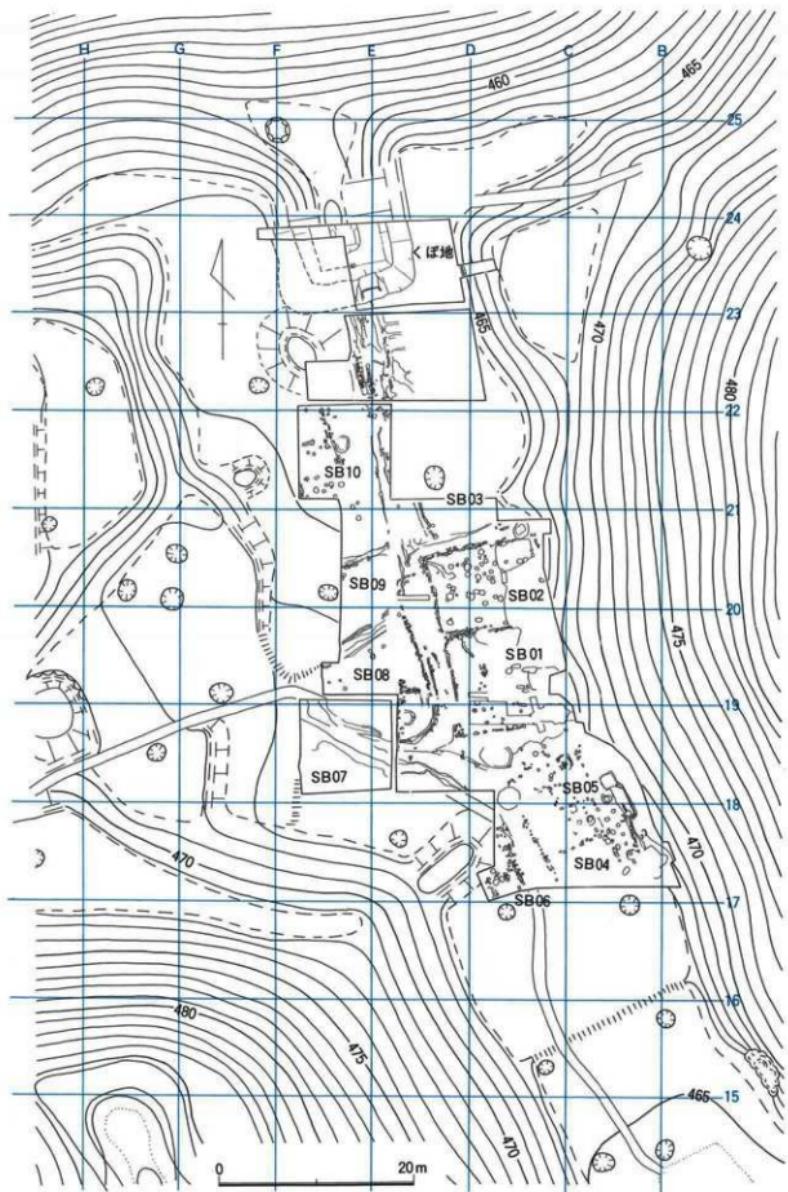
11月23日に現地説明会を行ない、12月27日に調査を終了する。

平成9年度調査

平成9年2月13日、14日に第3回発掘調査委員会が開かれる。

平成9年度の調査は、5月26日に着手する。

6月4日に島根大学田中義昭教授より発掘調査



第32図 藤田地区調査区・建物跡配置図（1/500）

の指導を受ける。

6月16・17日に開催の第4回発掘調査委員会での指導を受け、道跡のトレンチを掘り下げて谷が造成されていった様子をつかみ、坑道の採掘状況を知るため、土層の堆積状況を調べることにした。

8月8日坑口前トレンチより鉄鍋が出土する。その後の調査で鉄鍋が出土した地点の下に石敷の構造物があり、現位置からの出土であることが確認された。

8月11日、D18区において検出した炉跡（S B 0 6 内 S X 0 1）の切取り作業を行なう。

8月20日に奈良国立文化財研究所松村室長の調査指導により、建物跡の間口、奥行きを確認すること、坑口前の下層建物跡を面的に調査することとした。建物跡で残りの良いものは、今後石銀地区の町、建物の様子を考える上で重要な資料となる。

8月28日東京芸術大学斎藤教授が現地訪問、建物の構造については、鉱山町であることを考慮すべきであるとの指導を受ける。

10月17日に大森小学校の児童全員が足立で石銀まで歩き、現場で発掘体験の学習を行なう。

11月6・7日に第5回発掘調査委員会を開かれ、9年度の調査結果について報告する。

11月22日に小雨が降る中で現地説明会を開き、S B 0 1、0 2付近を残し埋め戻しを行ない、12月25日に調査を終了する。

平成10年度調査

平成10年5月13・14日に第6回発掘調査委員会を開催し、戦国時代の遺構面を検出するための調査を行なうこととなった。

5月19日より平成10年度の発掘調査を開始する。

6月17・18日に、科学調査について村上主任研究官の指導会を開き、現場の調査も指導を受ける。金属製品は、可能な限り保存処理を行なっていく必要があるとの指導を受ける。18日に京都大学小葉田淳名誉教授により現地指導を受ける。

10月26日奈良国立文化財研究所松村室長より調

査指導を受ける。

11月6日第7回発掘調査委員会で10年度の調査結果について報告する。

- 11月29日現地説明会を開く。

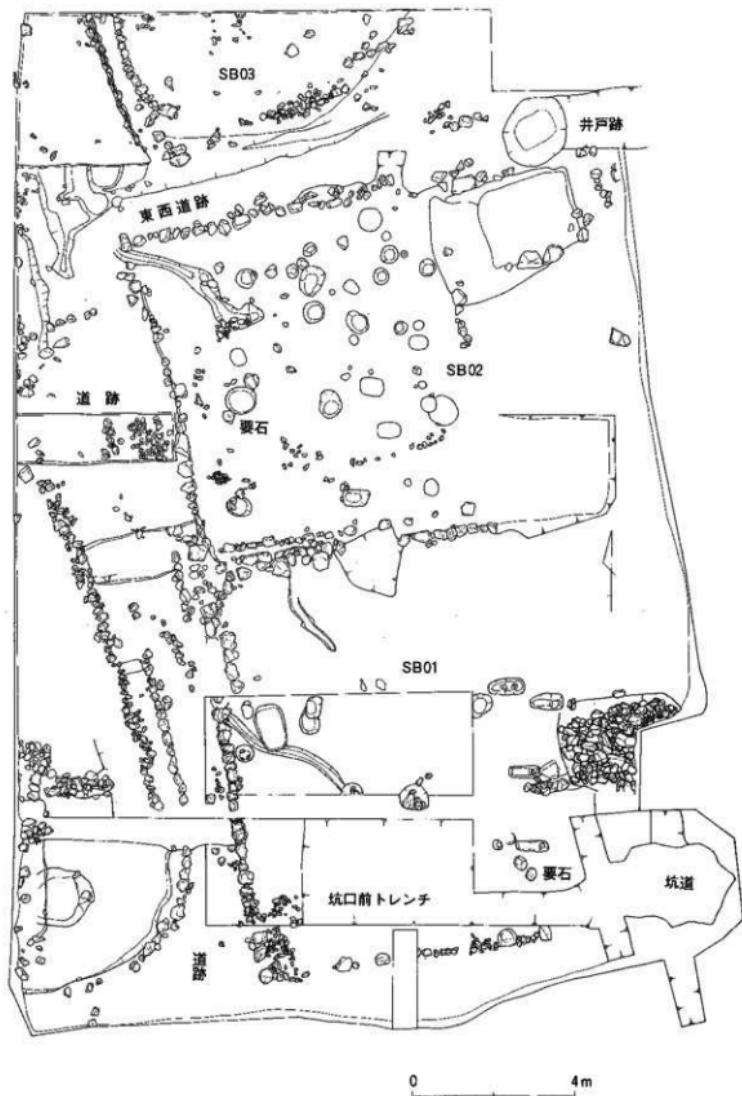
12月15日に建物跡の石列に保存処理の薬剤を塗布し、10年度調査を終了する。

(2) 調査の概要

藤田地区の調査面積は1,260m²である。調査地は、仙ノ山の頂上から東側に下った谷部である。谷の底の幅20mを割り南北方向に細長い場所である。南側には本谷が、北側には清水谷が続いている。現在の道がそれらの谷筋から藤田地区の中へ伸びており、調査区の中ほどで分岐し西側へ続いている。この地点で道が交差しており、当時の町の中でも中心的な場所と考えられるため、調査区を設定した。調査区は南から緩やかに傾斜して高くなりS B 0 5の地点が最高所で、北側へ向けては徐々に低くなる。千畳敷地区は、尾根を隔てて南側の場所となる。

調査の結果、調査区の南側では現在の林道から北へ延びる幅2~3mの道を検出している。この道は谷の中央をほぼ南北に走る。平成8年度の調査では、礎石建物跡・掘立柱建物跡、道跡、露頭掘り跡、炉跡、土壤などの遺構を検出している。炉跡の存在、出土したカラミや羽口などの遺物から、建物については吹屋(製錬所)と考えられる。道跡は幅2m前後で、表面に疊やズリが敷きつめられた様子が確認された。道跡の西には幅0.3~1.5mの溝を伴っている。調査区東の丘陵斜面では、表土を除去すると岩盤が検出された。ここでは、建物跡と関連すると推定される溝跡やピットが岩盤に穿たれていることが確認され、建物が斜面まで広がっていたと考えられる。またこの岩盤には幾筋かの鉱脈が確認され、鉱脈の部分が採鉱された痕跡がある。

9年度は道の西側の建物跡とその中の炉跡について調査を行っている。道の両端には建物と区画



第33図 藤田地区SB01・02・03遺構配置図(1/120)

するための石列が並べられている。平成8年度の調査で、トレンチにより建物跡の中に炉跡が3基存在することが確認されており、その炉跡を検出し、形態・構造を明らかにするために調査を行った。

調査区の中央部で検出した建物跡（SB01・02）は、残存状況が良く何回も建て替えが行なわれたことが確認された。SB01の東側には坑道が掘られている。仙ノ山では東西方向に蛇脈が走っており、その脈を追うように東向きに坑道が掘られている。平成9年度の調査でこの部分にトレンチを設定し、坑道と建物の関係をつかもうとした。その結果、江戸時代以前の時期から掘られていたり、坑道が埋められた後に掘り直された状態が確認された。下層の礎石建物跡からは、柱材が礎石に乗り、そこに木舞と土壁が取り付いた状態で検出された。この建物には木製品が良く残っており、下駄、漆塗、屋根材が出土している。下層建物跡のさらに50cm下から、鉄鍋が置かれた状態で出土した。鉄鍋の内部に残る灰状の土の分析から、銀精錬の灰吹き法に使用されたものと考えられている。平成10年度は、SB01の下層の様子を面的に確認するため一部を掘り下げた。その結果、3面まで遺構面を確認した。それぞれの面は黄色粘土により床面を作っており、選鉱や精錬の遺構を確認している。SB02は、建物の構造と内部の炉跡の様子を調べるために平成10年も調査を行なった。調査の結果、道路側の石列と建物床面の時期が異なっていることが判明した。また、SB02の北側でSB03を検出している。

SB01の道を挟んで西側でもSB08～10の建物跡が並んでいる。これらの建物の北側では、平成8年度の調査で幅14mの窪地状の遺構を検出しておらず、この窪地には幅2mの大きな溝が検出されている。

平成9年度の調査では、藤田地区から北東に100m場所で仮称Ⅷ区として調査を行ない、掘立柱建物跡の柱穴を確認している。

2 遺構と遺物

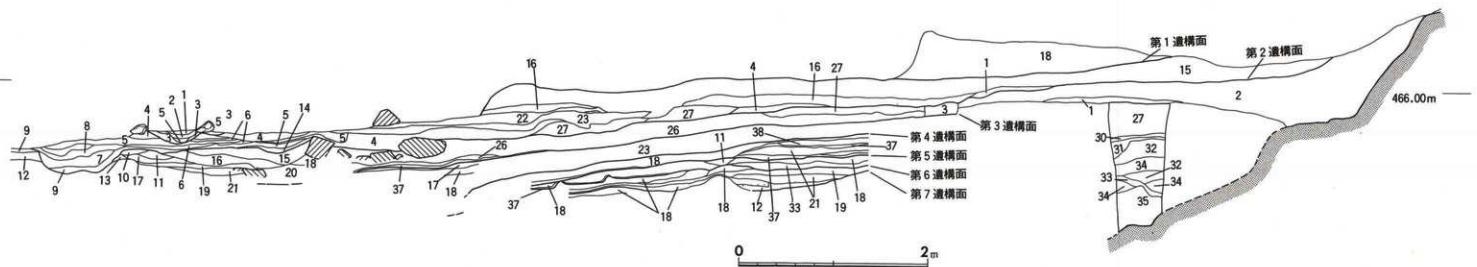
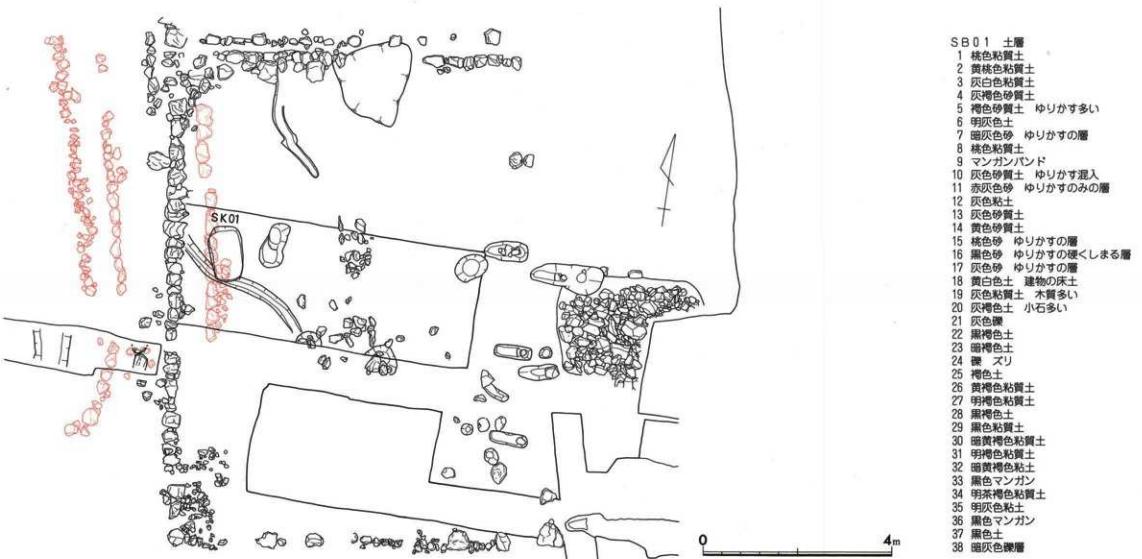
(1) SB01

SB01

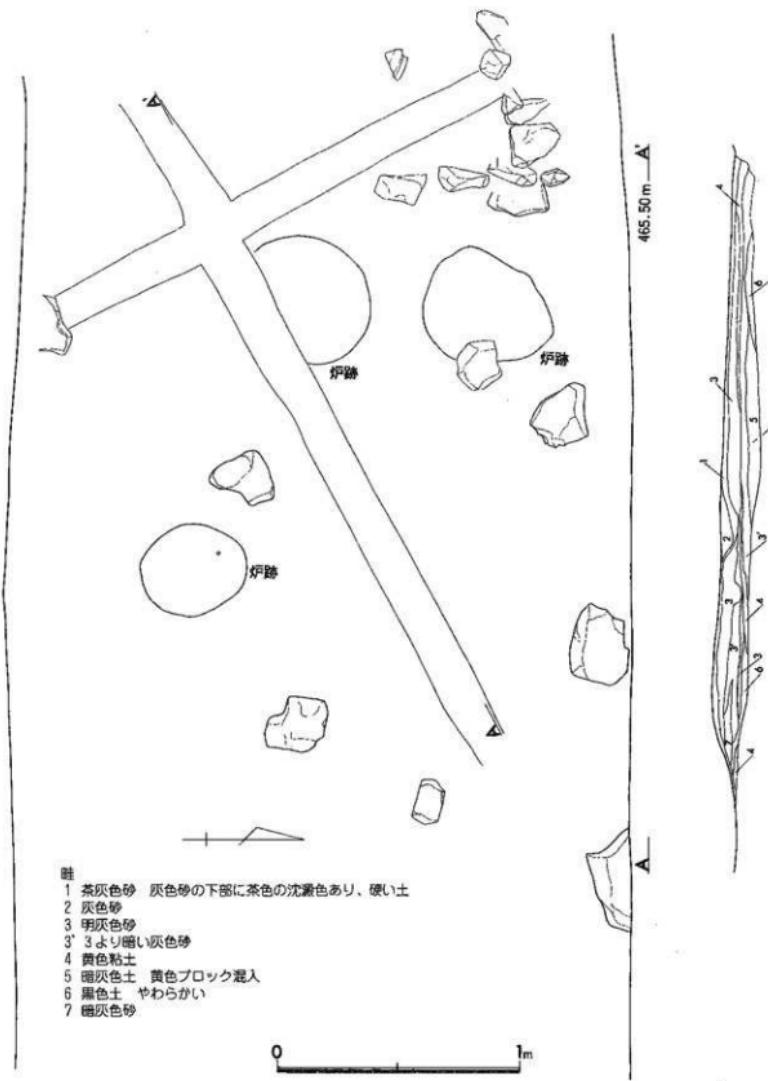
南北方向に延びる道路の東側に、石列により区画された建物跡が位置する。南側からSB01、02、03と並んでおり、SB01とSB02の間は石垣により区画され、SB02とSB03の間は道を挟んでSB03の方が一段と低くなっている。建物の前に位置する遺跡は南から北へ向けて緩やかに傾斜しており、道路の西側に溝が掘られている。SB01の南側の一段高い場所にはSB05が位置している。

SB01は、表土を20～30cm除去したところで、石列・整地層を検出した。SB02との間には約30～60cmの高さで石が積まれ、明確な段が造成されている。建物には、土層断面とトレンチ内の観察から合計8の遺構面が認められた。

第1遺構面で検出しているのは、道路と建物を区画する石列、柱穴と建物跡中央の集石と溝である。石列は、南北の残存長5.5mで、石の大きさ30～50cmとやおおぶりのものである。建物の奥側に布団状のピット2（P1、P2）を検出している。石列長軸と柱穴2つの方向性が一致することから同時期と思われ一軒の建物と考えられる。柱間距離は2mである。P1は長軸0.9m、短軸0.4mで東側が直径0.25m、深さ0.5mを測る。P2は長軸1.35m、短軸0.45m、深さ0.5mを測る。建物内には礎石、柱穴は確認出来ず、溝と集石を検出している。溝は長さ2.2mで弧状に湾曲する形である。集石は、長辺1.4m、短辺0.7mの範囲である。直接溝と集石は接していないものの、水を使用する選鉱作業に関わるものと思われる。建物の東側には、2.1×3.1mの落ち込みがあり、中に10～50cmの大きさの石が詰まっている。石を取り除いて掘り下げて調査していないため不明な点もあるが、すぐ横に坑口があいており、建物敷地を造成する際に坑口を塞いだものと思われる。



第34図 藤田地区SB01実測図



第35図 藤田地区 S B 0 1 第3 遺構面実測図 (1/20)

第2遺構面では、遺跡に面した石列と奥行側の礎石列、奥側の柱穴列を確認している。石列の間口は10.5m、奥行き7.5mを測る。石列の石の大きさは、第一遺構面の石と同様のものであり、石の並べ方は石列長軸に対し、石の長軸を直交するように置かれている。石列は道の傾斜と同様に南から北へ向け下がっている。比高差は、0.6mである。奥側の柱間距離は、1.8~2.2mを測る。建物内部の施設として、溝、土坑が検出された。溝は、幅0.25m、長さ3.3m、深さ0.1mを測り、建物の中央から北西方向へと斜めに石列につながっている。中央部と石列側の比高差は、0.15mである。建物の中央部に石組状の遺構があり、溝と関係のある施設と思われる。溝を切るように土壤が位置している。長方形で長辺1.15m、短辺0.7mを測り、中にゆりかすが堆積していることから選鉱施設と考えられた。

第3遺構面は、第2遺構面と同様に5.0m×6.0mの範囲を掘り下げて遺構面を確認している。道との境の石列は、遺跡の断ち割レンチ内で石2つがあり、高さと位置、床面の黄色粘土がみられることから、第2遺構面の石列より西側に寄った位置から検出している。第3遺構面の石列は全体を検出していないため建物区画の大きさは不明である。第2遺構面を構築する黄褐色粘質土を除去すると、3×2mの範囲に茶灰色砂が分布する範囲があり、掘り下げたところ黒色土と黄色粘土の互層が厚さ15cmで堆積していた。茶灰色の砂の層は特に硬く締まっており、素灰状の土の下は黄色粘土の土間面で、ここに炉跡が3基が掘り込まれていた。SX08、SX09は並んでおり直径が0.55mで、炭と灰が混入する黒色土が入っている。SX10は直径45cmを測り、覆土は黑色土で鉄砲の玉と思われる土製品（第82図-12）が出土している。床面には礎石があり、1~3と4~5の柱間は1mである。それぞれの列の間は1.3mを測る。第3遺構面では建物の奥側においても、SX06、07（第38図）の炉跡を検出している。SX

06は、円形で直径24cm、深さ5cmを測る。覆土は黄褐色土、下部に黒褐色土が堆積している。黒褐色土は重量が無く、骨片状の白色粒子を含んでいる。SX07は、北側の一部が欠けているが、下部構造として西側に黄色粘土が貼られている。直径30cm、深さ4cmを測る。覆土は黒褐色土、黄灰色土の順に堆積しており、中から吹子の羽口（39図-6）と土道具（7）が出土している。黄灰色土は、極めてきめの細かい土である。SX07が下部に堆積する灰状の土から灰吹き炉と考えられSX06は、炉内のからみ等を搔きだしたもののが堆積したものと思われる。

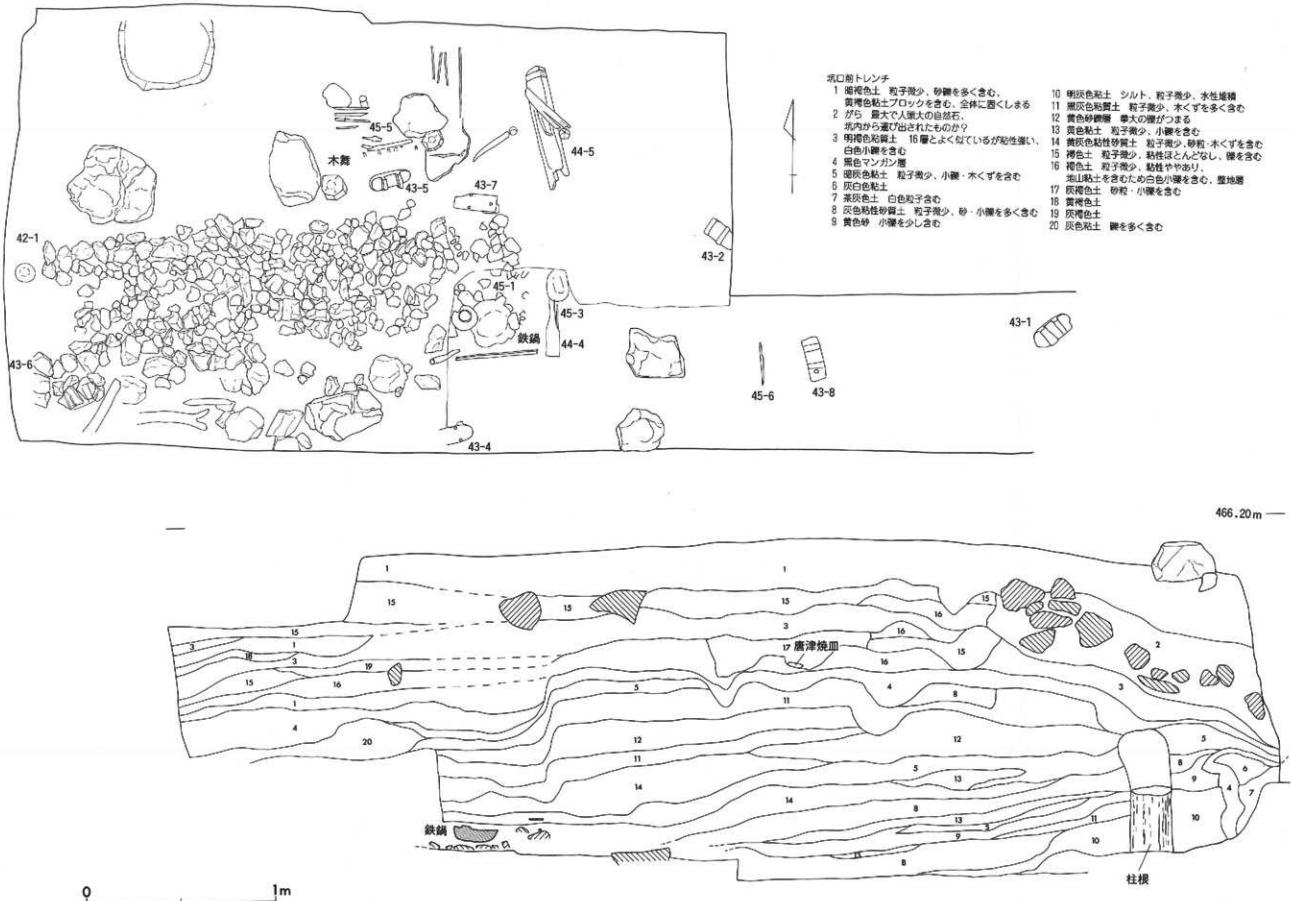
坑口前レンチ

S B 0 1 の南側、坑口前に設定したレンチは、当初は坑道の採掘と建物の前後関係をつかむために掘ったものである。

坑道は古い時期から掘られていたものと思われ、建物床面の何回かの建て替えにより盛り土がされ、坑道も埋められたようである。ある程度埋まった後に再度坑道の掘り直しを行なったようであり上層の建物の床面から流れ込む土（2層）がある。この土層の中には拳大から人頭大の石が多く含まれている。

坑道の入り口付近は幅1.4mで、溝状に掘り込まれている。溝の中は人頭大かそれ以上の大きさの石で埋められており、深さは確認出来ない。溝状に掘り込まれた部分の壁には直径20cmほどの木の丸太を立てた四ツ留状の構造物があったと思われる。

仙ノ山の銀の鉱脈は東西方向に存在していることから、この溝は鉱脈を追いながら掘った跡と思われる。坑道の入り口の岩盤に脈が走っておりこの脈を掘り進んだものと考えられた。坑道は、床面を確認出来ないが東に向けて下っており、肉眼では10mまでは確認できそれ以上奥に続いている。また、入り口付近から小さな穴が斜め上方にも延びており、鉱脈を追って掘り込んだものと思われる。



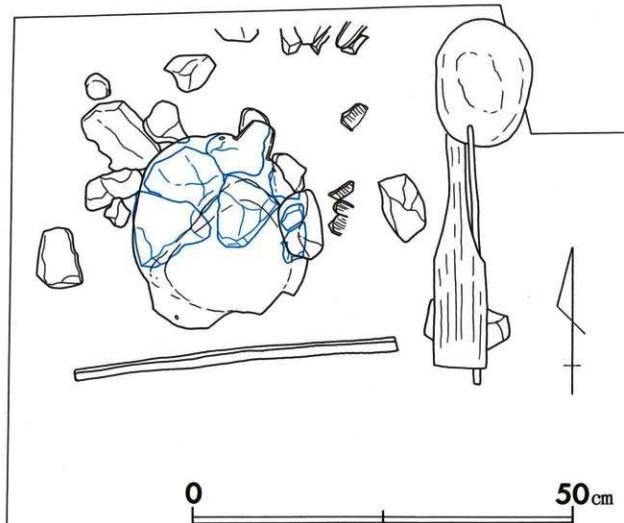
第36図 藤田地区坑口前トレンチ実測図 (1/20)

第一遺構面の建物跡は、褐色土を床面としており、その下層の黒色マンガン層までは唐津焼を含んでいる。

第7遺構面の礫石建物跡は黄色砂疊層を床面としている。礫石は東西に並ぶ3基の礫石を検出している。柱間は90cmで、中央の礫石横には柱がずれて床に突き刺さった状態であり、東側の礫石には柱材が乗ったままの状態であった。東側の礫石の横からは長さ65cmの柱材(第44図5)が出土している。中央の礫石と東側の礫石、東側の礫石から北側へ土壁が土圧で押し潰された状態であった。中央の礫石と東側の間は、小指大の径の竹が直立しており、それぞれの竹を聚ぐ棒状の木も検出している。木舞の土壁が残るもので、東側の礫石

でし字状に壁が残っている。礫石列の南側には礫石1基を確認しているが、その間に幅90cmの石敷がみられた。この石敷は、西側へ向けて傾斜しており、西側が25cm低くなっている。建物の床面上には、黒灰色粘質土が堆積しており、削ぎ板の屋根材や繊維質の腐食した有機質のものを多く含む土である。この土の中に、下駄、漆塗椀、横櫛などの木製品を含んでいる。トレチの北壁セクションに係る場所で柱材が出土している。これと対になる柱材が90cm離れた場所から出土している。

第7遺構面を厚さ30cmの白色粘土で埋めて建物の床面が作られており、そこに炭の入った炉跡が確認されている。一辺50cmの方形の炉跡であり、床・壁とともに粘土で作られている。炉跡の周間に



第37図 藤田地区鉄鎌出土状況実測図 (1/5)

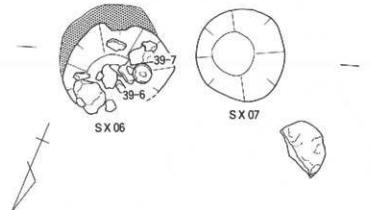
粘土を盛り土手状にしている。深さ10cmの中には炭のみが堆積している。第7遺構面も西側へ向けて傾斜して低くなっている。

この第7遺構面の建物跡床面より50cm下から鉄鍋が出土している。第8遺構面の床面の40cm四方をやや高くし拳大の石を敷いている。この高まりの周囲には木を打ち込み、また2方向に板が置かれ回っている。この建物の床面は黄色粘砂質土で坑口へ向け高くなっている。鉄鍋は片口が北東方向を向き、その口の方へ向け傾いた状態で出土している。建物が壊れ、この鉄鍋が埋まる際に傾いたものと思われる。鍋の内部に入っている灰状の土をCTスキャンにより調査したところ、上下2層に分かれることが観察され、堆積は水平ではなく片口側が低い状態であった。鍋の東側には、鉄製の火箸（第45図-3）が一本置かれて、その先

端にはアワビ殻が置かれていた。鉄鍋が使用された遺構面では礫石も確認しているが、トレンチ内のため関連は不明である。石が敷かれた床面からは別個体の鉄鍋の足が1脚出土している。鉄鍋は遺構面（床面）の現位置に置かれた状態のものが、そのまま埋まったと考えられる。

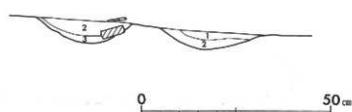
S B 0 1 出土遺物（第39図～45図）

第39図1～5、8～23は第1遺構面から出土したものである。1～3、5、8～14は肥前系唐津の製品である。2はぐい呑みで、口径7.6cm、器高3.5cmを測る。内面に胎土目を残しており、17世紀前半の時期である。5は皿で、外側の高台部を除いて鉄軸を施し、内面の見込では蛇ノ目に軸を剥ぎ取っている。口縁部が波状に押圧されており、口径13cm、器高4.0cmを測る。時期は18世紀前半である。8、9は陶器碗で外面にかけられた黄



S X 0 6 . 0 7
1 黒褐色土 白色ブロック混入
2 黒褐色土 淡を多く含む フカフカの土
骨片状の白色粒子を含む
3 黄灰色土 きめの細かい土

465.900m —



第38図 藤田地区炉跡実測図（1/10）

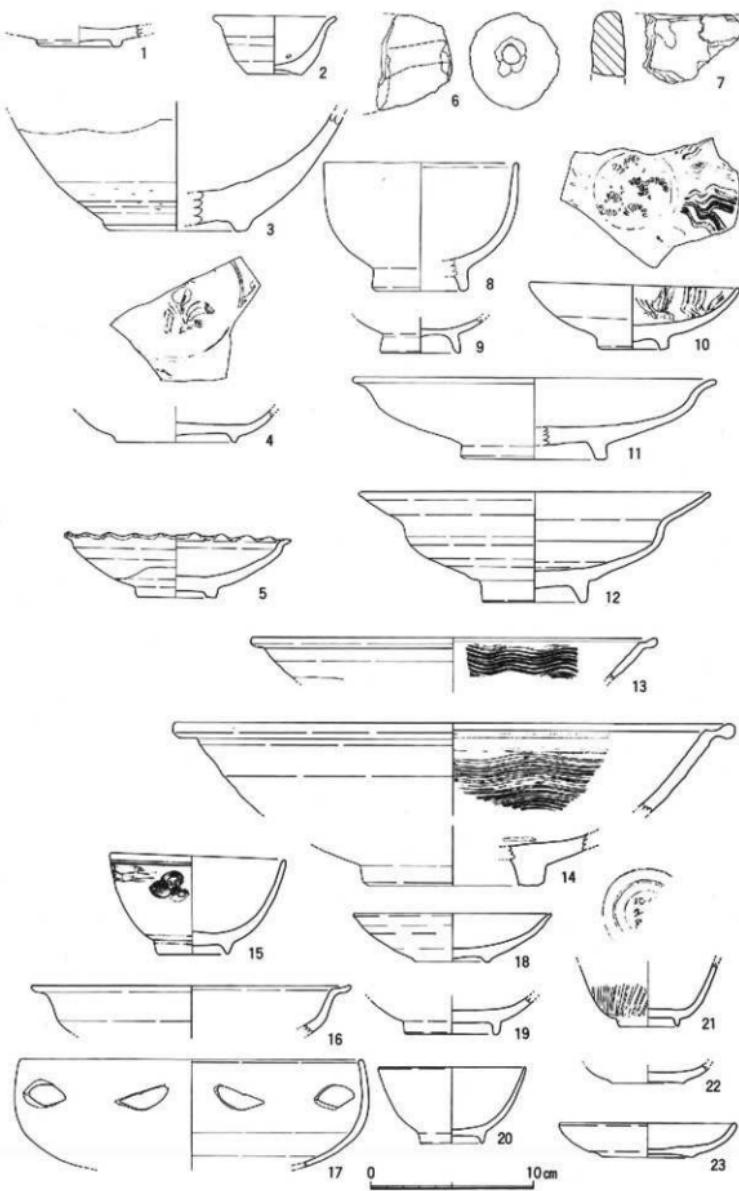
肌色の釉が高台の内面にもかかる。8は口径12.0cm、器高8.0cmを測る。時期は、17世紀後葉である。10は皿で、黒色の内面に白色釉を刷毛目で施し、波状文を描くもので、象嵌により花文を表現している。口径12.8cm、器高4.0cmを測る。時期は17世紀である。11は皿で内外面に黄肌色の釉をかける。釉が部分的に剥げている。12は、見込の綠色釉を蛇ノ目に搔き取る皿である。口径21.6cm、器高6.8cmを測る。13、14は刷毛目により白色釉で波状文を表現する鉢で、口縁部が屈曲し、端部が肥厚する。14は大型で復元口径34.4cm、器高10.0cmを測る。時期は、17世紀後半から18世紀前半である。15は伊万里の磁器碗で外面に草花を表している。口径10.8cm、器高6.2cmを測る。17は外面に緑色の釉がかかる鉢で体部に透しが施される。18は肥前系磁器伊万里皿で内面に花文を表現している。19は肥前系磁器伊万里碗で外面下部に團線、内面見込に二重の團線と花文を描いている。20は肥前系磁器伊万里小碗で極めて薄手の作りである。21は磁器の小碗であり、体部外面に細かな凹線が斜めに削り込まれている。底部外面の團線の中に「□□□化年製」と描かれている。22、23は土師器皿で底部外面に回転糸切り痕を残す回転台使用の在地製のものである。

第40図1～15は第2造構面出土の遺物である。1は備前系陶器の瓶の口縁部と思われる、口径が3.6cmと極めて細長いものである。5は備前系陶器小瓶の体部である。2は肥前系陶器鉢で内面に砂目当痕が残る。3も鉢で内外面に緑色の釉がかかる。6は唐津皿で黒色の釉の上に白色釉を刷毛目で施し、象嵌により花文を表現している。8は三足の付く香炉で全体的に釉が剥げ落ちている。口径14.6cm、器高9.2cmを測る。9は肥前系磁器碗で白色の釉に口縁部内外面に鉄釉がかかる。高台に砂目当痕が残る。口径は11.2cm、器高5.9cmを測る。時期は17世紀前半である。10は肥前系磁器皿である。底部に砂目当痕が付着している。内面の見込を蛇ノ目に釉を剥ぎ取っている。11、

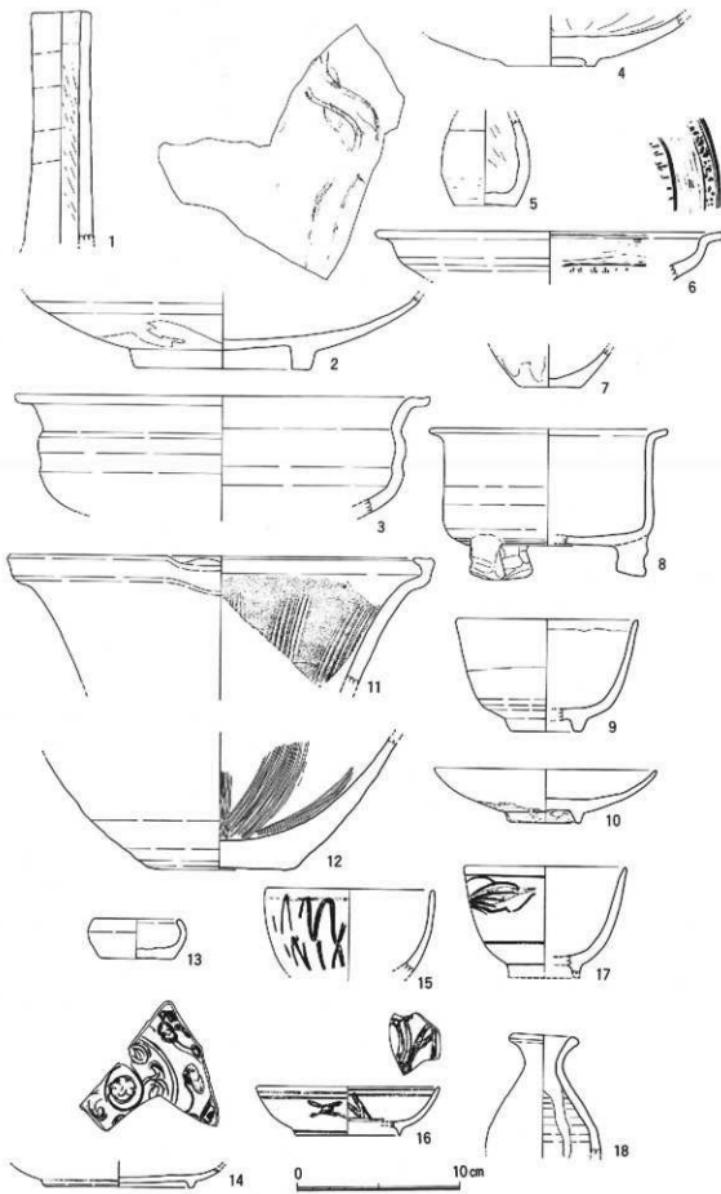
12は唐津擣鉢である。14、15は肥前系磁器碗で、15は外面に網代模様が付くことから、時期は18世紀と考えられる。13は土師器皿で、底部外面に糸切り痕を残し、口縁部が内湾する形態である。

第40図16～18は第3造構面から出土している。16、17は中国製磁器青花皿である。16は口径11.2cm、器高3.0cmを測る。高台の先端が細くなっている。18は肥前系陶器の唐津小瓶である。これらの時期は、16世紀末から17世紀初頭にかけてである。第39図6、7は、第3造構面から検出したSX07から出土したものである。6は、断面が円形を呈する羽口の先端部分であり、外面に熔着がみられる。直径5.5cm、穴の径1.3cmを測る。7は土道具で片面のみ被熱により変色している。

第41～45図は、坑口前トレンチから出土した遺物である。第41図-1～13は、肥前系陶器・唐津の製品である。2、3は碗で緑色の釉がかかる。2は口径10.4cm、器高7.0cmを測る。3は、口径12.0cm、器高6.8cmを測る。4はぐい呑で、口径7.5cm、器高4.7cmを測る。5は皿で、深緑色の釉がかかる。平坦な底部から口縁部に向て直立気味に立ち上がる。6は高台の付かない小皿で、底部に回転糸切り痕が残る。7は朝鮮唐津徳利の頸部で外面に白色の薬灰釉がかかる。8も同じ徳利の底部で、内面に叩きの痕跡が残り、外面に白色の薬灰釉がかかる。10も徳利の底部である。9は朝鮮唐津耳付花生の脚部で、白渦色の薬灰釉と鉄釉を掛け分けている。外面上半に沈線をその下に斜めの格子文を入れる。内面に叩きの跡が残る。11は小瓶の体部で外面に黒色釉が掛かる。これらの時期は17世紀前半である。1は鉢で口縁端部が内側に向け屈曲し薄緑色の釉がかかる。口径28.8cm、器高12.9cmを測る。12は瓶の口縁部である。13は鉢で内外面に黄白色の釉がかかる。14は肥前系陶器擣鉢の口縁部で片口部分である。15、16は肥前系磁器碗である。17は、肥前系陶器・陶胎染め付け碗であり、灰色の地色に草花文が描かれている。口径9.6cm、器高7.0cmを測る。時期は、18



第39図 藤田地区S B 0 1・坑口前トレンチ出土遺物実測図(1)(1/3)



第40図 藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(2)(1/3)

世紀である。18は、土道具・ねこで、残存長10.8cm、高さ6.2cm、厚さ1.5cmを測る。長辺方向がやや内湾しており、炉の径に合わせたものと思われる。湾曲する内側は被熱により灰色に変色しており、部分的に熔着がみられる部分がある。

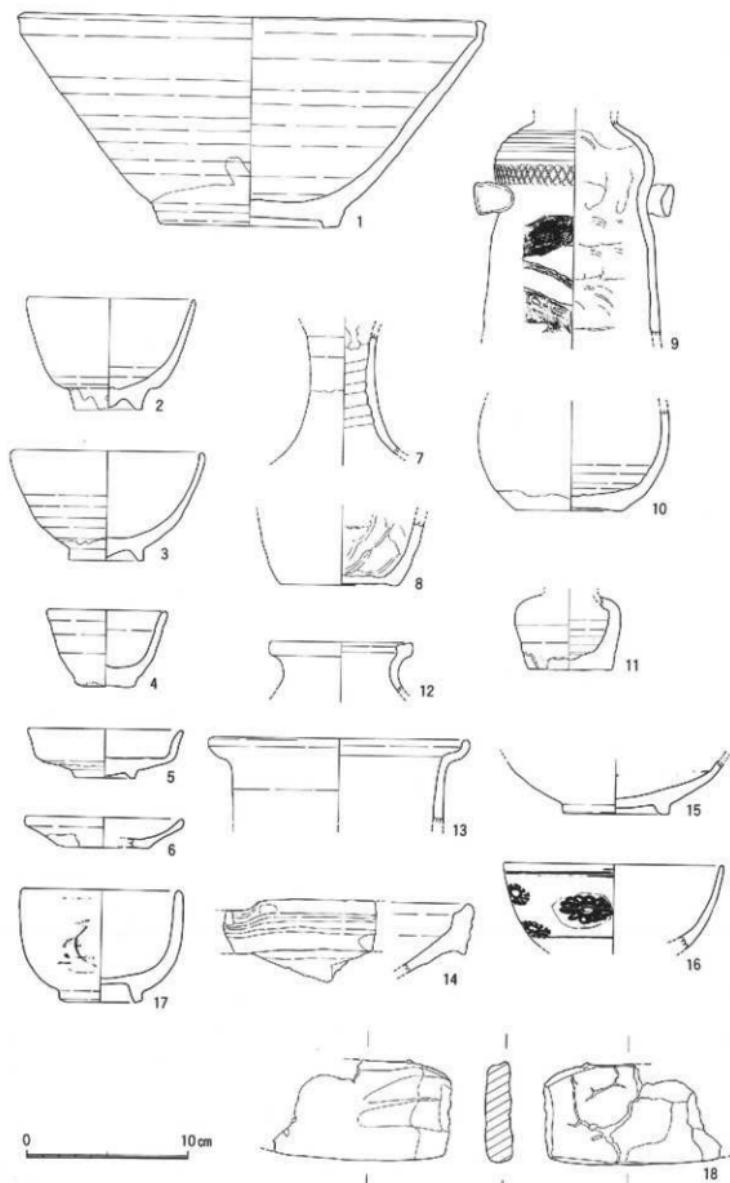
第42図1、3～6は、肥前系陶器・唐津の製品である。1は蓋で、灰色の釉に鉄粒をかけ文様としている。3は壺の口縁部で灰白色の釉がかかる。4～6は皿で、4は胎土が茶色で緑色の釉がかかる。5は口縁部が外反し、灰色の釉がかかり、胎土目当て痕が残る。6は口縁部が内湾し、灰色の釉がかかり、胎土目当て痕が残る。これらは時期は17世紀前半である。2の鉢は、瓦質の焼成で、外面は黒色に炭化物が付着している。体部に突帯が廻り、羽釜状を呈している。

7～12は漆塗木製椀である。7は口径13.8cm、器高3.8cmと高さの低い椀で内外面とも朱色の漆が塗られ、高台は細く作られている。8も内外面に朱色の漆を塗る椀である。9も内外面に黒色の漆を塗る椀である。推定口径13.4cm、器高5.9cmを測る。10～12は、内面に朱色、外面に黒色の漆が塗られている。10は口径13.9cm、器高6.9cmを測る。10は底部付近の器壁が厚く作られている。12は、外面の黒色の漆の上に朱色の漆で文様が描かれている。

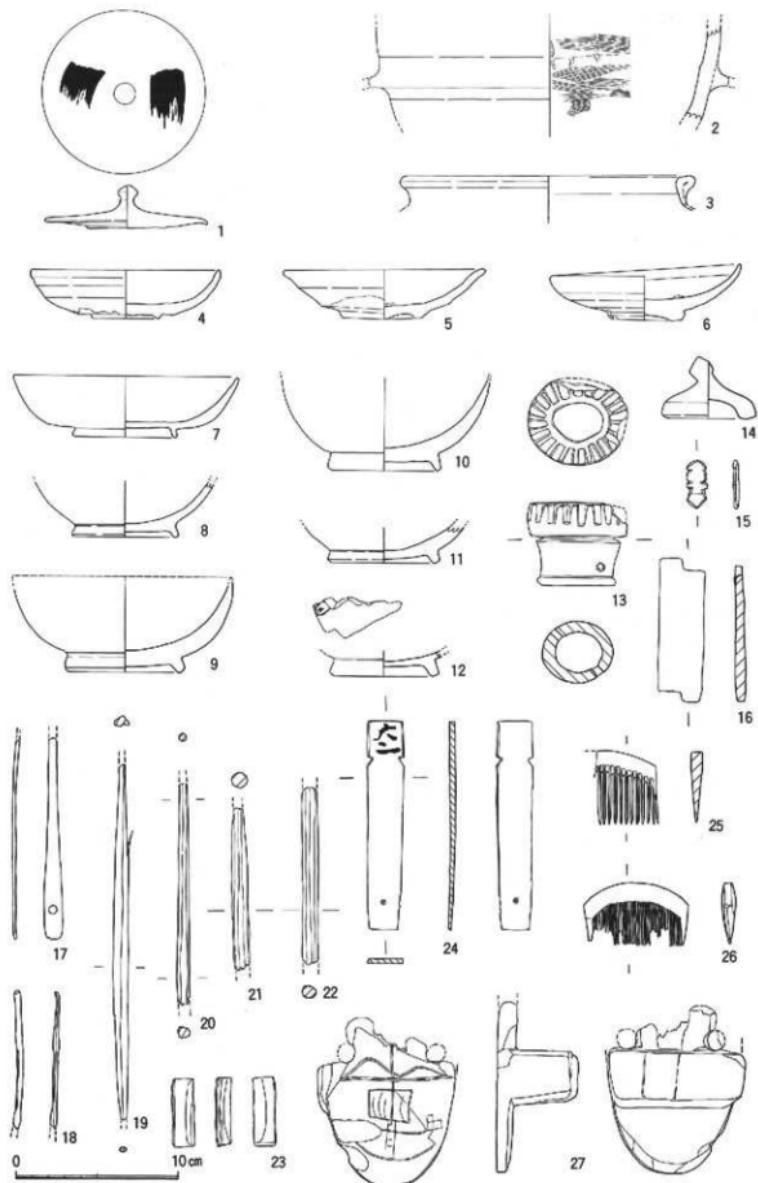
13は傘の軸受けと思われ、断面は楕円形を呈し、上部に幅0.5cm、深さ1.2cmの切り込みが2箇所削られている。外面中ほどに沈線状の掘り込みがあり、下部は削り出しにより縁が厚く作られ、下半近くに対角に2つの穴が穿けられる。14は、蓋状のものでつまみが宝珠状に作られる。15は、五輪塔か塔場に似せて作られたもので、上部が朱色に塗られる。16は箱物の側板と思われる。17は扇の骨である。18は、先端が耳搔き状に削られている。長さ8.5cmを測る。19～22は箸で断面の径は太い部分が1.0cm、細い部分で0.4cmを測る。いずれも両端が欠損している。24は付け札と思われ、幅2.3cm、長さ13.0cmで上部に二ヶ所切り込みがあり、

下部に径0.3cmの穴が穿けられる。上部に「六二」の墨書きがあり、下部にも墨の痕跡がみられ赤外線により観察したところ、文字は確認されなかった。

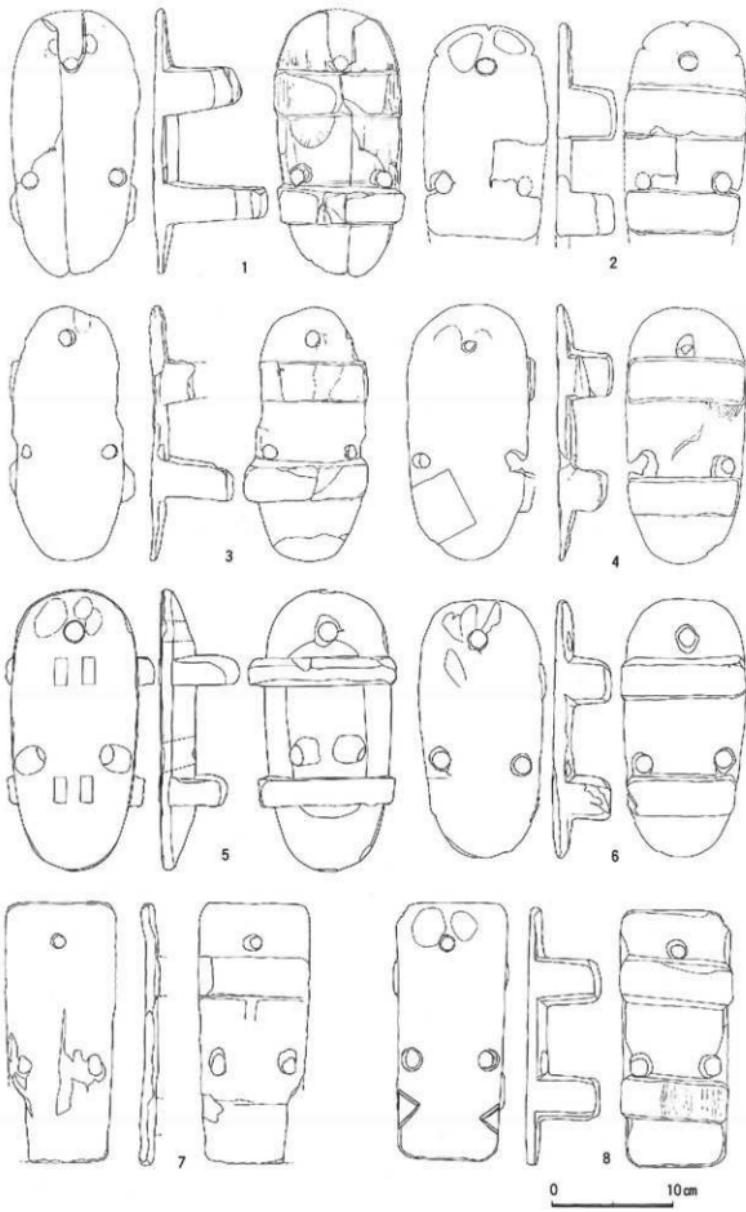
25は横櫛で半分が欠損している。櫛の歯が11本残っている。26は横櫛の完形品で長さ6.6cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmを測り、櫛の歯が細かく作られている。27は木製の連齒下駄のかかとがあたる部分で横緒穴2穴が残っている。台の形状から丸下駄である。台のかかとがあたる部分には、山と船の絵が彫り込まれている。山は大小2つが並んでおり、手前に帆掛け船が進行方向に風を受けている様子が表現されている。マストから梯子が架けられ、船尾に向けて綱が張られている。歯は使用により磨滅している。第43図1は一本製の連齒下駄で台長21.5cm、台幅10.2cm、歯高が前で5.0cm、後で7.5cmと前がかなり磨滅している。2も一本製の連齒下駄で、台長17.4cm、台幅10.0cm、歯高が前で3.8cm、後3.6cmを測る。台部の爪先に親指、人指指の跡が残っており、右足用と思われる。3も一本製の連齒下駄である。残存状況は悪いものである。台長21.0cm、台幅9.0cm、歯高が前で2.2cm、後で5.5cmである。4も一本製の連齒下駄で台長21.0cm、台幅9.8cm、歯高が前で3.3cm、後2.5cmである。台前部には、親指、人指指の跡が残っており右足用である。6も一本製の連齒下駄で台長21.2cm、台幅10.0cm、歯高が前で3.3cm、後で3.0cmである。台前部には親指の跡が残っており、右足用と思われる。5は差齒下駄の右足用と思われる。台長23cm、台幅10.5cm、台厚2.8cm、歯高が前で3.6cm、後で2.6cmである。台部幅より歯の幅が広くなるものである。それぞれの歯は、2.2cm×1.0cmのぼぞ穴が2つずつ開けられている露卯である。前緒穴は爪先がほぼ垂直に開き、横緒穴は内側前部にかなり傾斜している。台前部には、親指、人指指、中指の跡があり盛んでいる。台部の断面は、台形になっている。歯は使用によりかなり磨滅しており、角が丸くなっている。4も一本製の連齒下駄である。7は、一本製の連齒角下



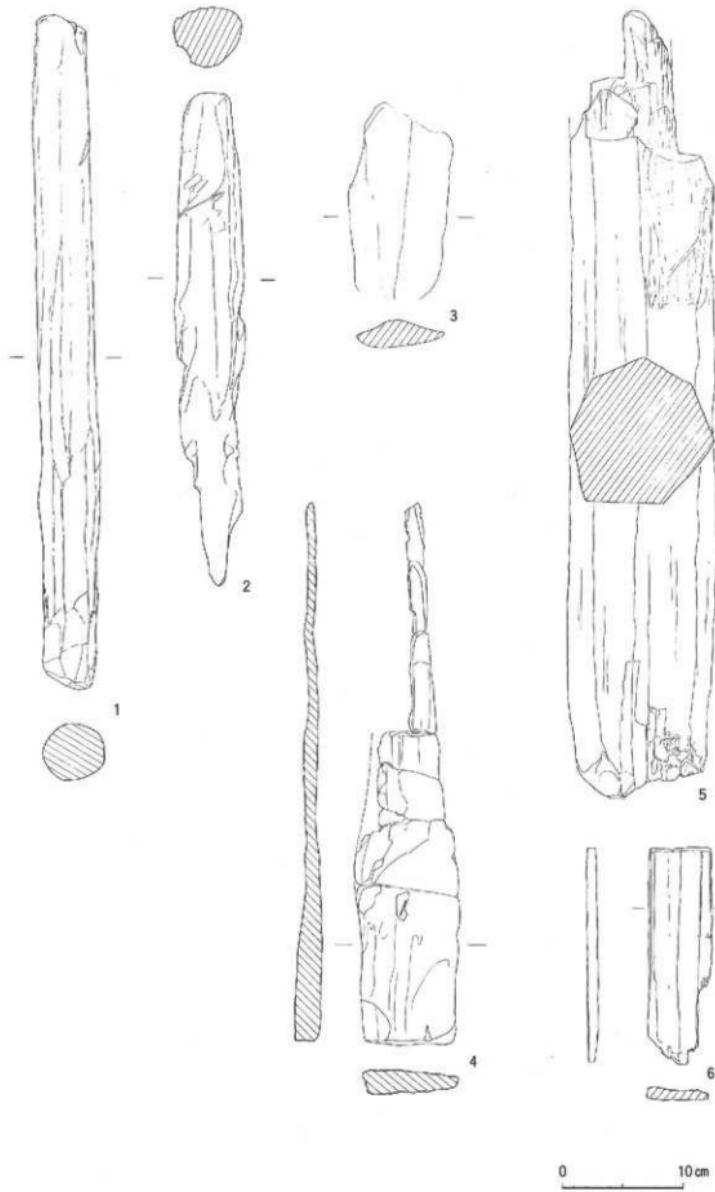
第41図 藤田地区 S B 0 1・坑口前トレンチ出土遺物実測図(3)(1/3)



第42図 藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(4)(1/3)



第43図 藤田地区SB 01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(5)(1/4)



第44図 藤田地区SB01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(6)(1/4)

駄である。歯は、残存状態が悪くほとんど残っていない。台長21.5cm、台幅9.0cmを測る。8も一本製の連歯角下駄で台長21.0cm、台幅9.1cm、齒高が前で4.6cm、後で4.8cmである。台部のかかとの両側には「L」字状の彫り込みがある。

第44図1は建築材と思われる棒状のもので、直径5.0cmを測る。4は、坑口前トレントで鉄鍋の横から出土したものである。部分的に欠損しているもののヘラ状のものである。5は柱材で両端が欠損しており、断面が不正七角形を呈しており、断面の幅11.0cmを測る。建物跡から出土した他の柱材の断面も同様で、ほぼ正方形の材の角を削ぐ用に加工するために断面が不正形になるものと思われる。一方に長さ5.0cm、幅2.5cmのはぞ穴が開けられている。

第45図1は鉄鍋で、外面下部と内面には土が付着したままである。鉄鍋は片口の付くもので、口縁には弦を付ける穴のあいた吊耳部分が片口の両サイドに付き、反対側に一箇所の合計3箇所が付くと思われる。鍋の径は23cm、片口を含めた長さ29cmである。X線写真的観察によると、底部に3箇所足の付くもので、足の高さ2.2cm、足を含む高さは14.0cmである。鍋の厚みは0.3~0.4cmであり、底部中央が腐食により部分的に欠けている。

広瀬町富田川河床遺跡において同形態の鍋が出土しており、時期は16世紀代とされている。2は1と別固体の鉄鍋の足であり、長さ5.2cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。3は火箸の完形品で長さ33cm、断面の径0.3~0.6cmを測り、先端へむけて徐々に細くなっている。5はツルハシで、刃部の摩耗が少ないと見られる。長さ11.7cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測り若干の反りがある。6は刀子であり、長さ22.8cm、刃部の長さ13.4cm、刃部の幅1.3cm、茎の幅0.9cmを測る。X線による観察では目印穴は確認されていない。7は鉄釘で、長さ11.4cmを測るやや長めのものである。頭部が折れ曲っていないことから、未使用と思われる。側部には成形時の敲打痕が残

る。8も鉄釘で途中で屈曲している。9も鉄釘で、長さ5.6cmを測る。10は鉄砲の引き金部分と思われる。先端に丸みがあり、指の当たる部分は湾曲がある。11は銅製の留め金具と思われ、長さ3.5cmを測る。12~14はキセルの煙管部分である。

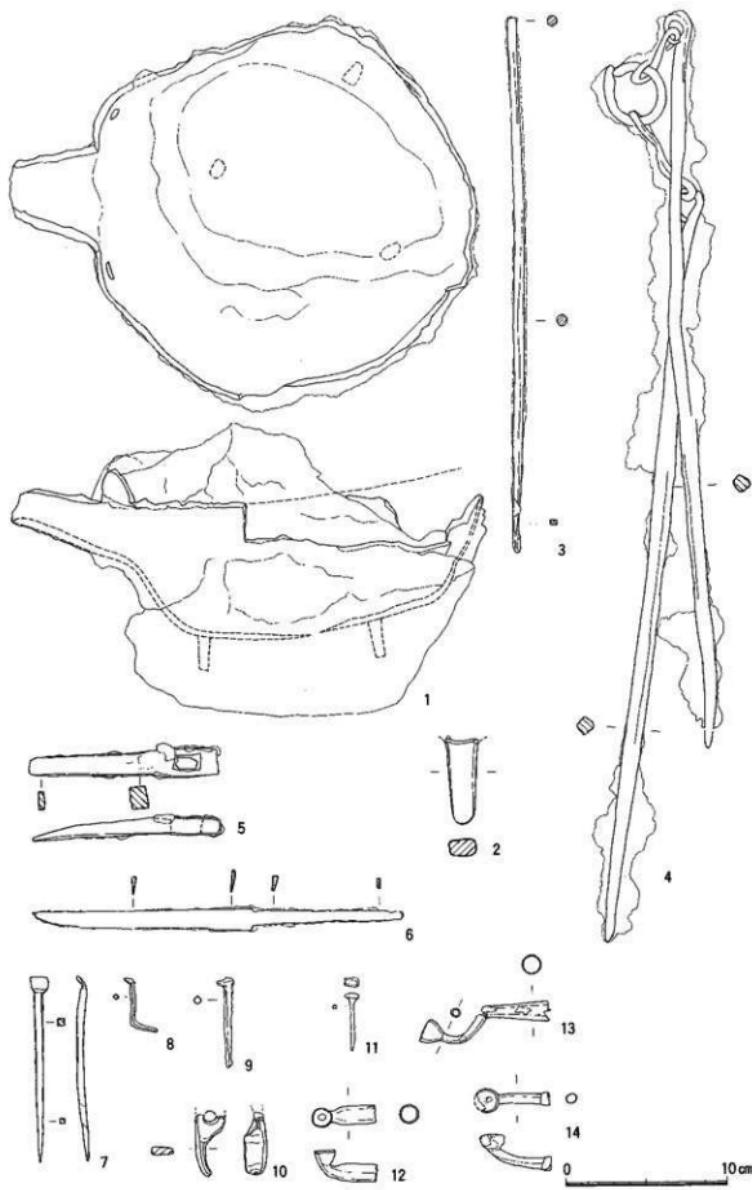
(2) SB02

SB02(第46図)

D20・E21・E20・21グリッドに所在し、SB01の北隣の一段低い場所に位置する。掘り下げは表土より行き、表土下、褐色土を30cm程度除去したところで遺跡と石列を検出した。この石列は、遺跡の東縁にはほぼ一直線に構築され、また遺跡の面よりも浮いた状態であったため、SB01と同様に遺跡と建物とを区画するとともに、建物の間口側の礎石列と推定、SB02とした。しかし、表土から石列の検出面に至るまでは竹根等の影響を受けており、石列に伴う土間面は検出されなかった。石列を残し、その東側をさらに掘り下げていったところ、石列の検出面より30cmの深さで黄色粘土の面を検出。グリッド毎の上層観察用の鞋を残しながら黄色粘土の面で掘り広げたところ、礎石、柱穴を検出し、この黄色粘土の面を土間面と確認した。

検出された土間面は遺跡よりも20cmほど低くなるため、鞋を除去し土間面を広げた後に、道路に近い部分の土間面を再度精査したところ、石列下にも土間面が広がっていることを確認、その面上では礎石も確認した。また、遺跡についてもトレントを3カ所設定し、掘り下げたところ、土間面が石列の下から道路方向にかけて広がることを確認した。結果として、建物が上げられたことにより、高低差が生じていると判断された。

SB01とSB02との関係は、以下のように考えられる。SB01で道路に面し、最も上層の石列(以下、第1石列)を第1面とすれば、同一直線上で道の縁に配されているSB02の石列は、同じく第1面の構築となる。また、SB01に伴



第45図 藤田地区SB 01・坑口前トレンチ出土遺物実測図(7) (1/3)

う石垣は、上面に礎石を配している。この礎石に伴う面上に第1石列が築かれているため、礎石と石垣は第1石列よりも古く第2面にあたる。SB 0 2の土間面は、SB 0 1の石垣と礎石と共に構築されたことが、SB 0 2南側の礎石列との関係から明らかであるため、SB 0 2の土間面はSB 0 1の第2面に伴うとみることができよう。

石垣からSB 0 1第1石列にかけての部分は若干、弧を描いており、一見、石垣とSB 0 1第1石列が伴うように看取されたが、第1石列の北端が途切れていることなどから時期差があるものと推定される。

SB 0 2の区画をなす石列は南、北辺で確認した。石列内には礎石となる石が確認でき、その間に部分的に小石を配している状況が窺えた。特に遺存状況が良好であった箇所は、南辺石列の建物西南隅で、この部分には壁の存在が推定される。

逆に、遺存状況の良くない箇所は、北辺石列の東側にかけてであった。礎石は明確に認められるが、一部石列が2列になるなど、規則性が認められない石を検出した。2列になる箇所においては土間面の粘土とは異なる粒子の細かい砂質土などが確認され、溝状となる可能性が考えられた。しかし、断ち割りや掘り下げを行っていないため、詳細は不明である。この北辺の石列と東西方向の道跡との関係については、道の上面がかなりの深さで竹根の影響を受けていたため、石列の検出時に認められた土間面とは全く違う土の部分を道と判断したものである。石列は建物に伴うものであって、検出している道跡とは時期差があることが予想される。そして検出時の道跡の上面が、道として機能した面であるのかは判断しがたい。

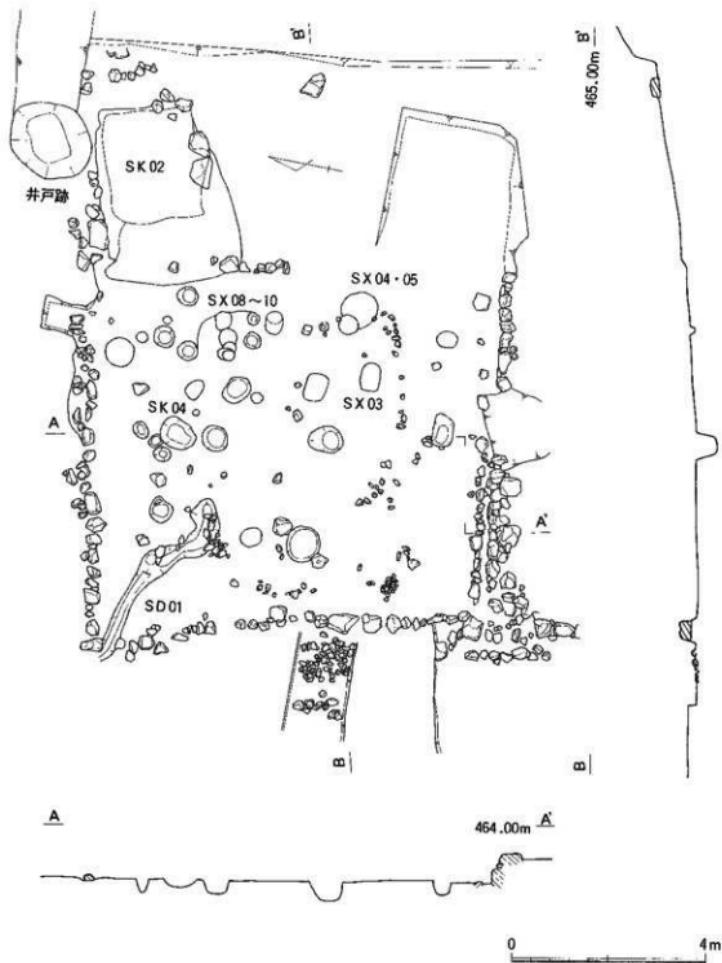
建物の東辺では中央や北寄りに1.5m程の長さで石列が確認されたものの、南側部分においては石列が確認されず、この石列が建物の区画となるのかは不明である。建物西辺と南辺の礎石列より測った間口幅は約8m、奥行きは約6.5mである。また、礎石列の上面と土間面からみたSB 0

2の土間は、山側である東側がやや高まり、谷側の西にかけて傾斜している。これはSB 0 1と共に通している特徴もある。

SB 0 2では、礎石の区画よりも奥側北寄りの箇所に黄色粘土を伴う土坑(SK 0 2)とそれに近接して井戸跡を検出した。SK 0 2の上面には白色粒を混入する褐色の粘土質土にわずかながら覆われていたため、土坑を埋め、建物の土間として利用された可能性がある。この褐色土上面では礎石の可能性がある石をSK 0 2より南へ2m程のところで検出した。また、SK 0 2の南脇には精錬作業において火除けに用いられる粘土板が出土しており、この部分も建物の土間として利用されたと考えることができよう。しかしながら、さらに南側の部分では、黄色または褐色粘土質土や礎石が認められず、ズリの堆積のみが確認されたため、建物としての土地利用がどの範囲まで及んでいたのか、断定は困難である。井戸跡はその位置関係から建物やSK 0 2に付随する可能性が高い。

土間面には礎石の他に、柱穴、炉跡、溝跡等を確認した。柱穴は、建物中央を南北方向に約2m間隔で1列3穴、建物北側には東西方向に2ないしは3列7穴、南側に1列2穴検出した。北側の柱穴は近接して掘り込まれているため同時期でない可能性を残す。また、礎石と柱穴が対応するため、これらを併用していたとも考えられる。他に土間面には埋置されているかのようにみられる要石を、建物中央付近の道跡より約1mの場所に1個確認した。出土遺物は、掘り下げた褐色土中と土間面上で、17世紀代から18世紀中頃までの陶磁器が出土している。

炭化物が充填されていたり、被熱が認められた土坑は建物内に合計13基認められた。しかし、数基は土間面が薄く剥離した箇所で検出されたことから、すべてが同時期に構築されてはいない。集中的に確認された箇所は建物東側で、このうちSX 0 3～0 5及びSX 0 8～1 0について掘り下げを行った。

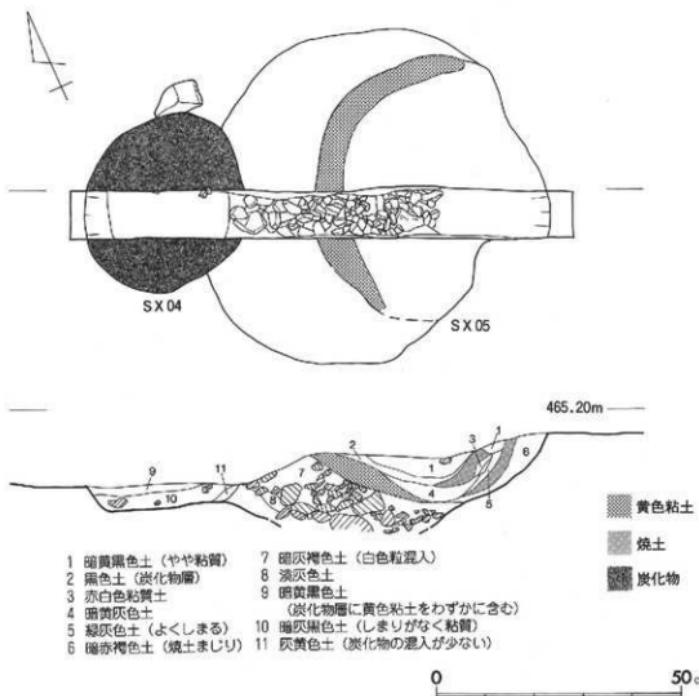


第46図 藤田地区 SB02 実測図 (1/100)

S X 0 3 は、建物南東に位置し、S X 0 4 + 0 5 より約80cm西に位置する。平面形は50×30cmの隅の丸い方形、断面形は逆台形、検出面からの深さ15cmを測り、埋土は炭化物を混入する暗褐色土、褐色土で、中層より下層にかけて3~5cmの大レキを混入する。埋土中にカラミが若干混入する。

S X 0 4 (第47図) は建物南東に位置する。S X 0 5 と重複関係にあり、S X 0 5 の掘り形の一部を切る形で築かれ、平面形はいびつな円形、検出面からの深さ5cm、断面は台形を呈す。埋土は炭化物層のみで、カラミをまばらに混入している。

S X 0 5 (第47図) は土間面を直径60cmの円形に掘りくぼめ、1~5cm大のレキを埋置、黄色粘土を最大5cm程の厚さで土坑の西半分に充填した後、その上に炭化物の混じる暗黄灰色土、炭化物層、焼土が認められた。これらの土層は剥離しやすく、掘り下げの段階で明瞭に分離された。被熱している箇所は粘土が充填されなかった側において認められ、部分的に堅く焼け締まり緑灰色を呈する。また、炭化物層の間に焼土層が認められた。遺物は、陶磁器と鉄器の小片がレキ層に混入される形で出土した。



第47図 藤田地区SB 02内SX 04+05実測図(1/10)

S X 08～10（第48図）は、S X 04、05よりも4m程北の土間面上に構築されていた。5基の重複関係が認められ、先後関係において古く位置づけられる順にS X 08, 09a, 09b, 10a, 10bとした。

S X 08は直徑35cm程のいびつな円形の掘り形で、断面形は半円に近い緩やかな「V」字形を呈し、検出面からの深さ約15cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色土、以下炭化物層に黄色粘土層を挟んで下層はやや粘質の暗黄褐色土である。黄色粘土の充填は認められず、被熱部位は北側の半分程度で焼けしまはれない。遺物は出土していない。

S X 09aは平面形が直徑40cmの円形、断面形は緩やかな半円形を呈し、検出面からの深さ15cmを測る。埋土は上層が褐色系の土、中～下層には炭化物層が認められ、粘土混入有無や、炭片の大小などによって分層された。また、被熱部位は東側に認められた。遺物は出土していない。

S X 09bは、平面形が直徑25cmの円形、断面形は「U」字形に近い半円形で、検出面からの深さ約10cmである。埋土は灰黄褐色土、暗灰褐色土の2層で、被熱部位は認められなかった。遺物は出土していない。

S X 10aは平面形が直徑25cmの円形、断面形は半円形、検出面からの深さ7cm程度で、埋土はやや粘質の暗黄褐色土と粘土、焼土などを含む暗灰色土。被熱部位は東側に認められた。遺物は出土していない。

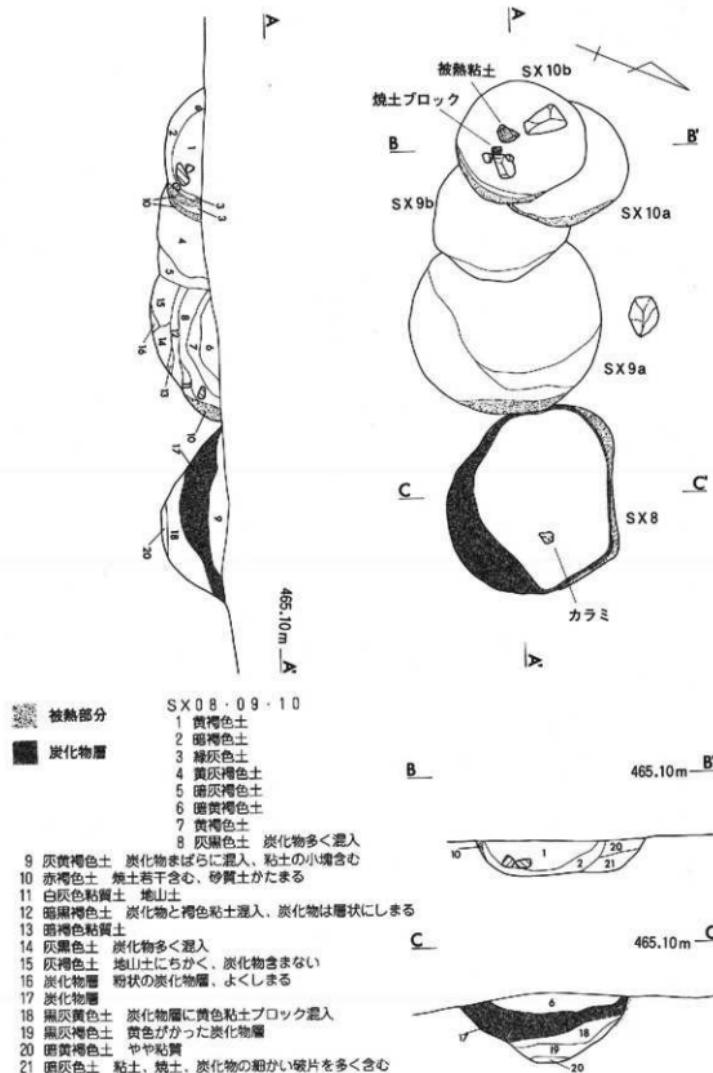
S X 10bは平面形が直徑25cmの円形、断面形が「U」字に近い半円形、検出面からの深さ約7cmであった。被熱部位は東側で、5基のうち最もよく被熱しており、堅く焼け締まる緑灰色土が確認された。黄褐色土と暗褐色土が埋土のほとんどであるが、1～5cm大のレキが混入しており、流入した土と判断した。埋土よりカラミが数点出土している。

これらの遺構の性格として、被熱が認められることや炭化物が充填されていることにより、精錬

に関する遺構と判断される。さらに、いくつかの形態に分類が可能である。ひとつはS X 04、05のように、被熱や粘土の充填がみられる炉と、近接して炭化物を埋土とする小規模な円形の土坑が伴う形態がある。掘り下げを行っていないが建物内北側に粘土貼りの炉と炭化物の小土坑の1組、建物西側のS D 01と要石との間に同じく1組が確認された。S B 01にも同様な形態をとるS X 06、07が検出されている。次に、S X 03の例で、炭化物等が入る土坑で単独で築かれている形態がある。そして、S X 08～10の例で、小径で炭化物の土坑を伴わず、重複して築かれる土坑の形態がある。S X 08～10では径の大小や、断面形の形態によってさらに細かな分類も可能と思われる。こうした形態の違いは、精錬の工程や作業の内容によるものとも考えることができよう。

炭化物や被熱の認められず、ゆりかすの堆積がある土坑では、井戸跡横に位置するS K 02と、土間面に穿たれたS K 04の2基について掘り下げを行った。

S K 02（第49図）は、上面で黄褐色土と桃灰色砂質土及び黄色粘土が重複しているように看取されたものの、断ち割りの結果、一つの遺構になることが判明した。最上層には、土坑を埋めた整地土と見られる白色粒を混入する褐色土が堆積、その下層に桃灰色砂質土が土坑の掘り形よりも西側に0.8m×1.6mの範囲で、5cmの厚さで堆積していた。黄色粘土はこの桃灰色砂質土より下層であり、土坑の内部側面に貼られ、土坑の機能に関係するとみられた。黄色粘土の内法を掘り形とすると、 $2.1 \times 1.7\text{m}$ の方形の土坑となる。埋土は前述の2層よりも下で、橙色粘土、ズリを混入する桃灰色疊層、黄褐色土が堆積し、その下層に人頭大のレキがまばらに見られ、以下はやや粘質の暗黄褐色土が堆積していた。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは80cm程である。掘り形の北西隅に1、南側中央に2つ、礎石となりうる石があり、このうち南側の石は掘り形に覆い



第48図 藤田地区SB02内SX07・08・09・10実測図(1/10)

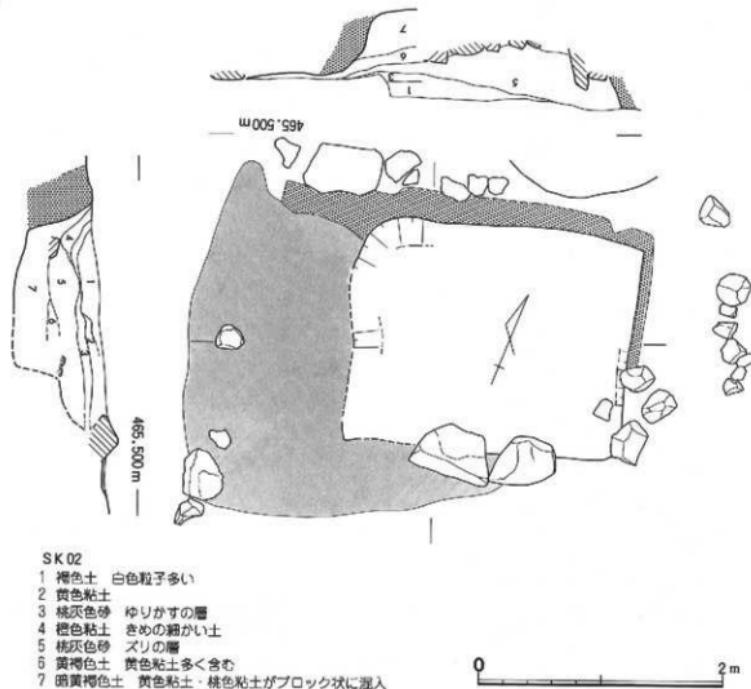
被さるように置かれていた。遺構の性格としては、比重運鉱用の土坑である可能性が高い。

SK 04 (第50図)は、中央の北に並ぶ柱穴のうち最も北の柱穴の北脇に位置し、平面形は長辺約75cm、幅60cm程の「D」字形で、断面は半円形、検出面からの深さ15cmを測る。埋土は砂質土により、底面に10cm大のレキが数個混入していた。遺構の性格としては、埋土が砂質であることから考えれば、比重運鉱に関する施設の可能性があるといえるが、積極的な根拠とはならない。

建物内では他に溝(第52図)を検出した。SD 01は建物北西隅に位置し、建物内から、道の側溝につながる。平面形は「し」字形に近い形状で、

建物内の溝の始まる部位が丸く屈曲している。断面形は概ね半円形で、埋土は赤褐色砂質土、黄褐色砂質土、検出面からの深さは最大で25cm、底面は建物外側にかけて緩やかに傾斜している。断面の観察で、溝上面を黄色粘土によって被覆されている状況が確認された。これは溝が暗渠として使用されたか、あるいは土間を嵩上げし、建物を造り替えるときに、埋められたもののいずれかと判断された。遺物は出土していないが、溝の始まる箇所の上面から底面にかけて、5~10cm大の扁平なレキが覆っていた。

遺構の性格として、砂質土の堆積がみられるここと、道の側溝に取り付くこと等から、排水の施設



第49図 藤田地区SB 02内SK 02実測図(1/40)

と考えられる。その際、比重選鉱用の排水であれば、建物内に水を貯める施設が必要で、可能性として土間面を穿つものではなく、土間面よりも上に構築された形態が想定される。

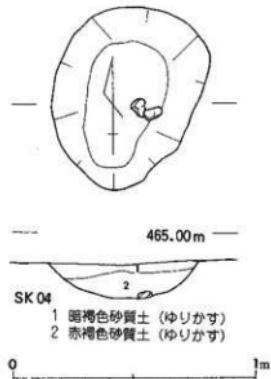
建物北東に位置する井戸跡（第51図）は平面形は上面が $2.6 \times 2.1\text{m}$ の楕円形、掘り形より70cm下がったところで $1.5 \times 1\text{m}$ の長方形を呈する。上層は擾乱土のため検出時より凹んでおり、掘り下げた埋土は上層が褐色砂礫、以下小石を混入する褐色土、黄色粘質土等が堆積、断面形は長方形をなす。検出面より2m程掘り下げ、以下は未掘である。遺物は埋土上層より鐵貨、陶磁器などが出土した。

S B 0 2 の調査の目的となった事項の一つに、建物として1軒を掘り上げ、構造と建物内の遺構の配置を推定し、建物利用の具体的な様相を明らかにすることがあげられていた。しかし、掘り広げた第2面では既に、土間面の部分的な剥離によって下層の炉跡が検出されており、同時期の炉跡を推定することが困難であった。しかし、井戸跡・溝跡・土坑・炉跡が検出されたことから、一つの建物において、選鉱から精錬までの一連の作業を行っていた可能性が高い。

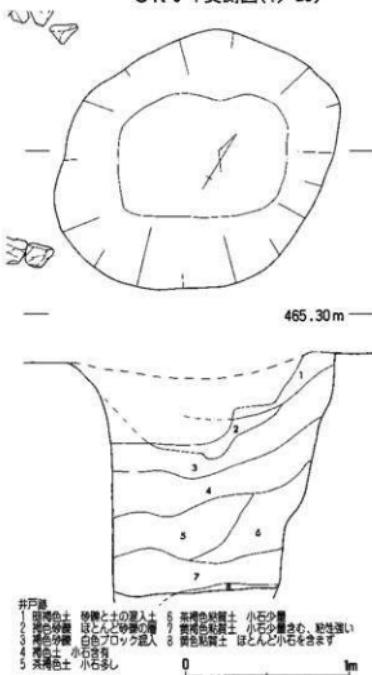
礎石・柱穴については、上下層の重複の可能性があるために、柱間数なども不明な点も多い。その中で、注意されたのは、南西隅の部分に柱穴のない場所が認められたことである。炉跡や土坑も存在しておらず、地面を穿たない施設の存在も考えられるものの、選鉱から精錬までの作業を行う上で必要な空間か、あるいは居住等に関連した空間とも想定される。

道跡

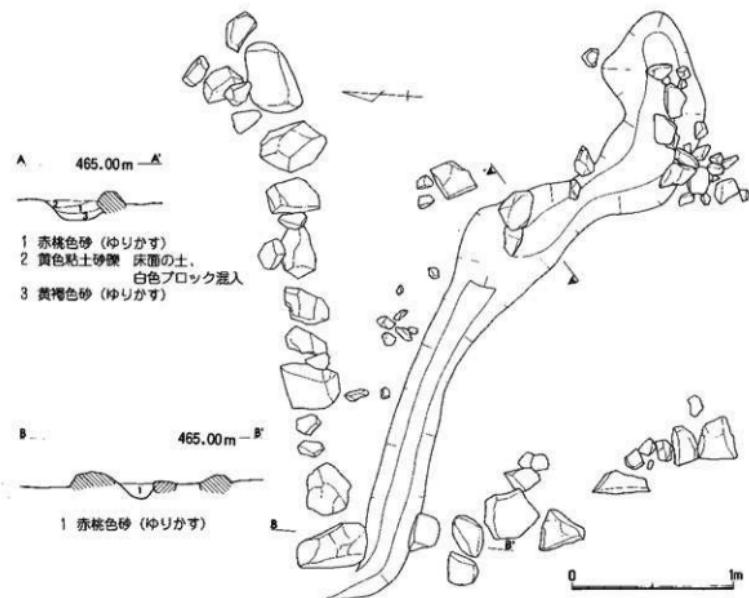
道跡は、調査区を設けた平坦地の中央をほぼ南北方向に通り、途中に分岐や合流する箇所がある。東側の建物跡や西側の溝跡と、石列によって区切られていたものとみられる。その表面には砂利や小石が敷かれていた。土層断面の観察から、道跡がほぼ同位置で何度も造り替えていった状況



第50図 藤田地区 S B 0 2 内
SK 0 4 実測図(1/20)



第51図 藤田地区井戸跡実測図(1/30)



第52図 藤田地区SB 02 内溝跡実測図(1/30)

を確認した。SB 01において複数の造構面が確認されたように、建物の建て替えに合わせて道や溝も造り替えられたと推測できる。ここでは、便宜的にSB 01第1造構面に伴う道跡を「下層道跡」とし、その上層を「上層道跡」「中層道跡」として説明する。

「上層道跡」は、幅が0.6~0.7m。F 20グリッドを東西に横断し、E 20グリッド北西隅で北へ折れ、E 21グリッドの途中まで確認した。明褐色土層の上に、砂利や小砾を敷いて造られている。F 20グリッドでは、道跡両側に石列が認められず、なだらかな傾斜がつく格好であった。

E 20グリッド西側では、「上層道跡」と同レベルで、下層の溝跡の上に石が寄せ集められていた。それらの石にまじって、石造物・石製品の破片や陶磁器片がみられた。

幅1.8~2.0mの「中層道跡」は、幅約0.3mの溝跡を西側に伴う。E 19グリッドで、西へ続く道跡が分かれるあたりから始まる。E 21グリッドの途中から下層道跡」と重複している。

「下層道跡」は、「上層・中層道跡」が造られた明褐色土層を除去した後、暗赤色粘質土層の上面で検出した。幅は1.8~2.0m、E 19グリッドからF 22グリッド東半までおよそ33mの長さになる。途中E 21グリッド内で、ほぼ直角に折れて東へ向かう道跡が分岐する。道跡西側に、石列で区切られた溝跡が存在する。

「下層道跡」から分岐後東へ向かう「東西道跡」は、幅約1.0m。淡黄白色土の上面に造られており、SB 02の北側を通っている。SB 03に面する道跡北側は、整形されて法面となっている。

S B 0 2 出土遺物（第53図）

S B 0 2 の範囲からは、唐津焼も含めて肥前系の碗・皿類が多く出土している。他に陶器鉢・甕や、中国製青花皿・土師器の小皿などもみられる。大半が遺物包含層である明褐色土からの出土だが、5・15・18は建物跡遺構面を精査中に出土した。また11は、建物跡土間に掘り込まれたピットからの出土遺物である。

1は肥前系の陶胎染付碗で、吳須の発色は薄く、不明瞭である。2～4・9・10は肥前系陶器碗である。2は外面に草花文が描かれている。3・9・10は、高台疊付を除き全面に施釉され、黄灰色を呈する。5・6・19は肥前系陶器皿である。5は見込の釉を蛇の目状に剥いだもので、高台から高台内にかけて無釉である。19は見込と高台疊付に砂目積みの痕跡が残る。7は瀬戸美濃系の小壺底部で、底径は2.4cm。体部外外面に黒褐色の鉄釉がかかる。

11～17は伊万里焼の磁器である。11は、外反する口縁部を持つ小壺である。外面に草文が描かれる。12の外面には二重網目文が描かれ、高台内には崩れた鉢がある。13は高台内に「大明成化年製」と描かれた稜花皿である。14・16・17は皿で、いずれも見込に装飾が施されている。16の高台疊付は幅が広く、内側に向かって傾斜している。17の口縁部には鉄錆が塗られている。15の碗は、高台内が無釉のものである。

20～22は肥前系の陶器鉢・甕である。20・21は共に外外面とも施釉される。22の内面には、全体に1単位10条以上の播磨目が施されている。

18は中國製染付磁器皿である。外面に描かれているのは唐草文であろうか。高台周辺には砂が熔着している。23～26は土師器の小皿である。いずれも底部には回転糸切り痕が残り、体部が直線的に開くものである。27は「土道具」と呼ばれた精鍊道具の一種で、素焼きの土製品である。厚さは約2.1cmになる。

遺物包含層から出土した遺物の時期は、17世紀

から18世紀前半にかけてと幅がある。点数が少ないが、建物跡遺構面精査中の出土遺物も、ほぼ同じ時期におさまるものであると思われる。

上層道跡出土遺物（第54図）

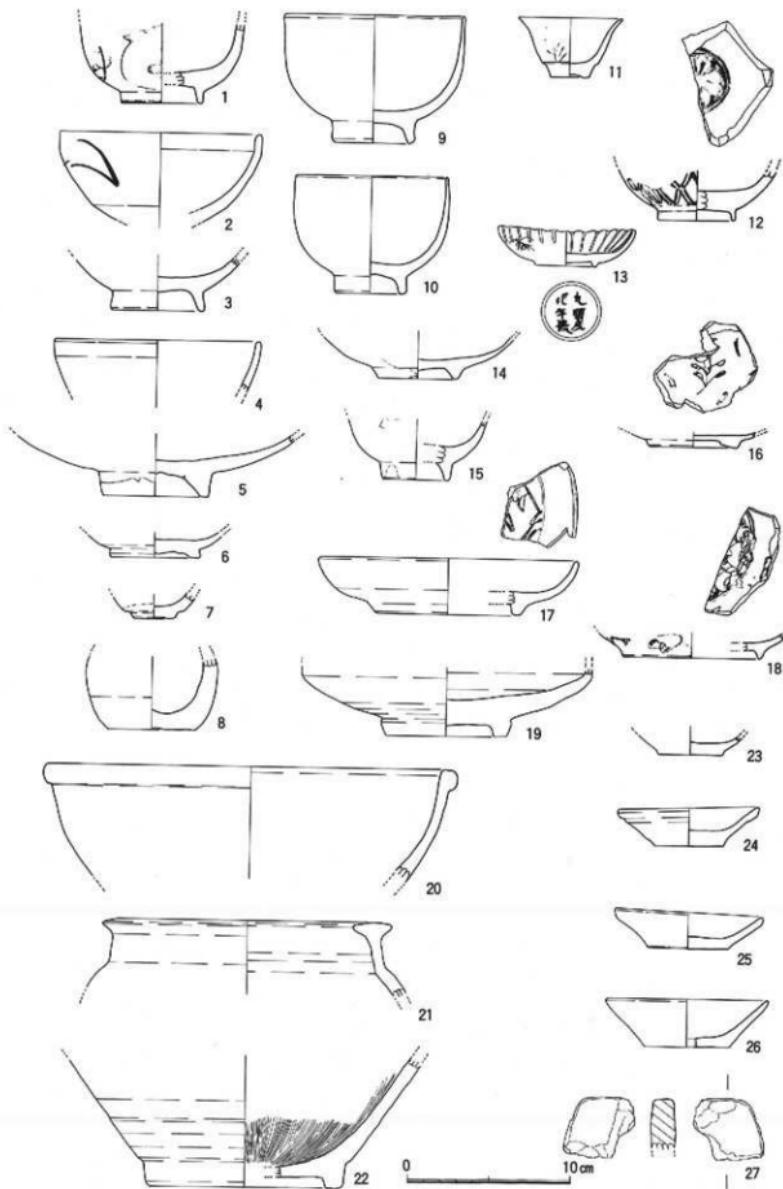
上層道跡の出土遺物は、第54図1～6である。1・2は、E20グリッド西側で下層の溝跡の上に寄せ集められていた石にまじって出土した、肥前系陶器鉢である。1と2とは胎土や釉の具合がほぼ同じなので、同種のものが2個体あったと推測される。削り出し高台を持ち、見込に4箇所目積痕跡がある。3～6は伊万里焼の磁器である。3は徳利または瓶の底部で、底はえぐり込まれている。5・6は、砂利や小礫を敷いて造られた道の上面から出土した。5の体部外外面にはコンニャク判による文様が數箇所に施されている。高台内には4文字の字句が記されており、だいぶ崩れているが「大明年製」ではないかと思われる。6の碗は、高台内が無釉のものである。

中層道跡出土遺物（第54図）

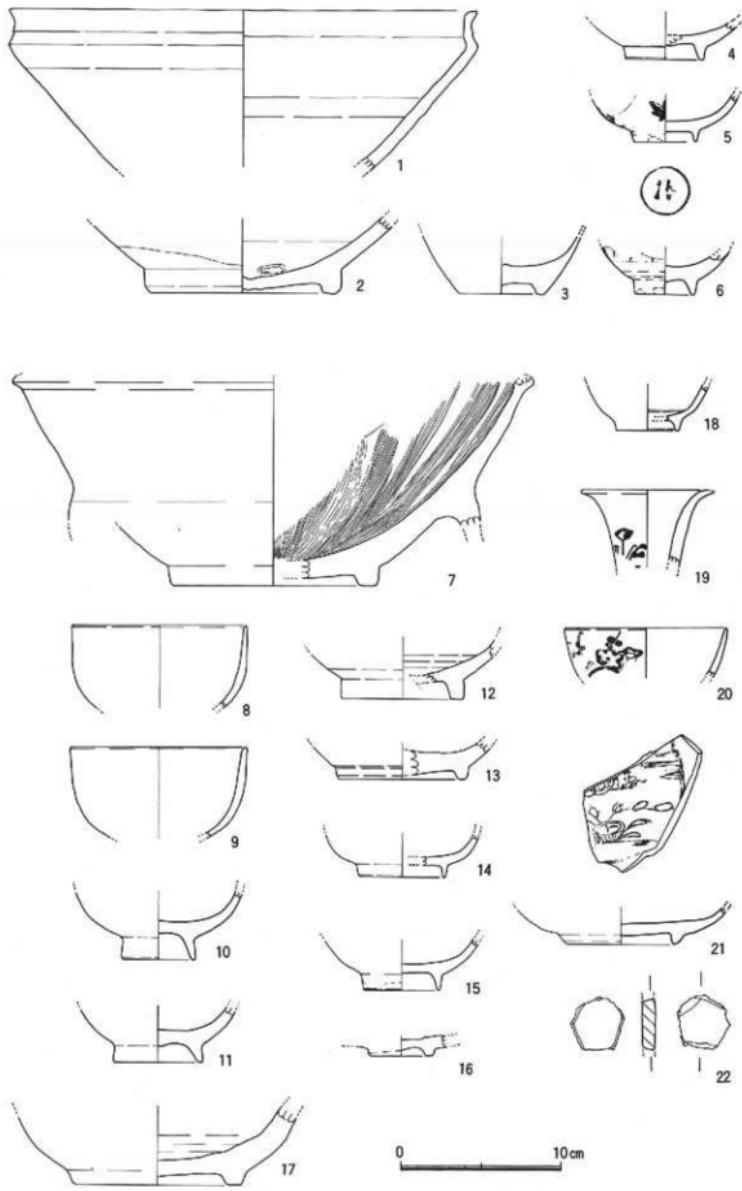
中層道跡からの出土遺物は、第54図7～22である。8～17は肥前系陶器、18～21は肥前系磁器である。

7は体部中程から脚が下方へ伸びる形状の擂鉢で、推定口径は約31cmになる。1単位9条の擂目が、見込中央から口縁へ向けて施されている。防長系の製品の可能性がある。8～11は肥前系陶器碗である。どれも色調は黄灰色を呈し、高台疊付を除いて全面に施釉される。8・9の体部はまっすぐ上がっている。10は焼成の具合が良くなかったのであろうか、釉がとんでいる部分がみられる。12は露胎で、高台は削り出される。14・15も黄灰色を呈するものである。16は皿の底部で、見込中央は一段低くなり、脇には砂目積痕跡が残る。17は甕あるいは壺の底部であり、内面と高台疊付から高台内は無釉である。

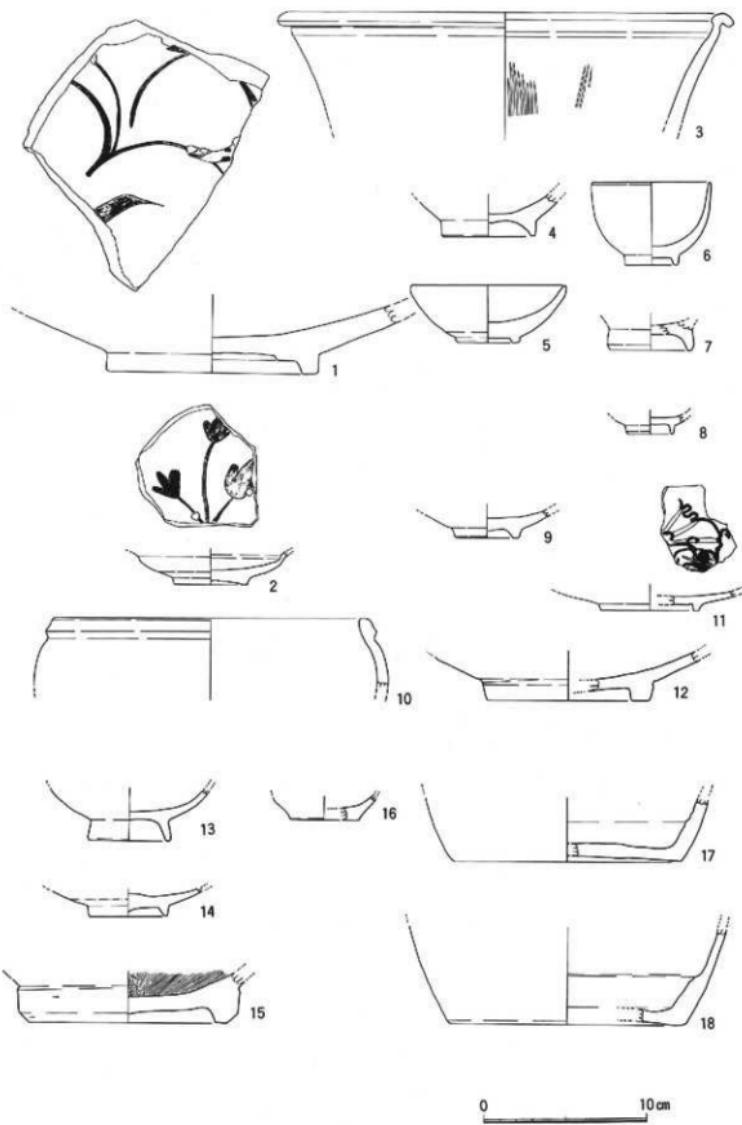
18～20は碗である。18の見込には2条の罫線が施される。19は甕の口縁部から頸部にあたり、内面中程まで施釉される。20の外表面には梅花文が描



第53図 藤田地区 S B 0 2 出土遺物実測図 (1/3)



第54図 藤田地区 S B 0 2 上層中層・道路出土遺物実測図 (1/3)



第55図 藤田地区 S B 0 2 下層・東西道跡出土遺物実測図 (1/3)

かれている。21は底径6.6cmの皿で、見込に草花文が描かれている。22は肥前系磁器を打ち欠いて作られたものとみられる。

下層道跡出土遺物（第55図）

下層道跡からの出土遺物は、第55図1～12である。1～7・9～10・12は肥前系陶器、8・11は肥前系磁器である。

1は底径13.2cmと大型の皿で、施釉された内面に草花文が描かれている。2は唐津焼鉄絵皿で、口縁部は外反するようである。見込に胎土目積の痕跡が3箇所残る。3は内面に7～8条の摺り目が見られる摺鉢である。口縁部は屈曲し、体部は直線的に立ち上がる。口縁部近くにのみ施釉される。4・7は中層道跡などからも出土している黄灰色の碗である。5の皿には、見込と高台付近に胎土目積の痕跡が残る。9の見込には砂目積の痕跡が残っている。10は口縁部がやや内傾し、内外面に施釉される。12は内面のみ施釉される。11では、見込中央から放射状に釉がとんでいる。

東西道跡出土遺物（第55図）

東西道跡からの出土遺物は、第55図13～18である。16が土師器の小皿であるほかは、いずれも肥前系陶器である。13は黄灰色を呈する碗である。

14は見込の釉が蛇の目状に剥がれている。15は底

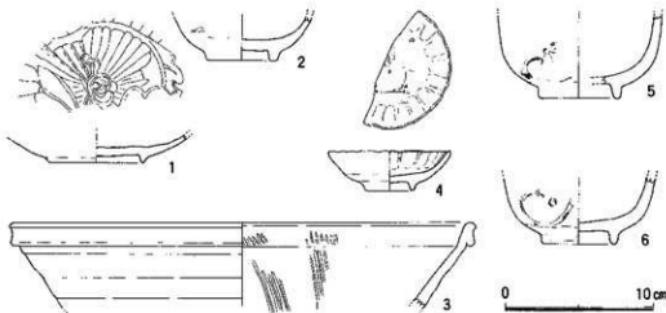
径12.2cmを測り、高台は削り出される。内面には密に摺目が施される。16は底径4.2cm、底部に回転糸切り痕が残る。17・18は壺あるいは壺の底部片である。ともに胎土は密で褐色を呈し、底部中央はやや内側にくぼむ。

各道跡から出土した遺物の時期であるが、17世紀初頭から18世紀前半にかけてと幅がある。また出土遺物からは、各道跡の時期差を明確に見てとることはできなかった。

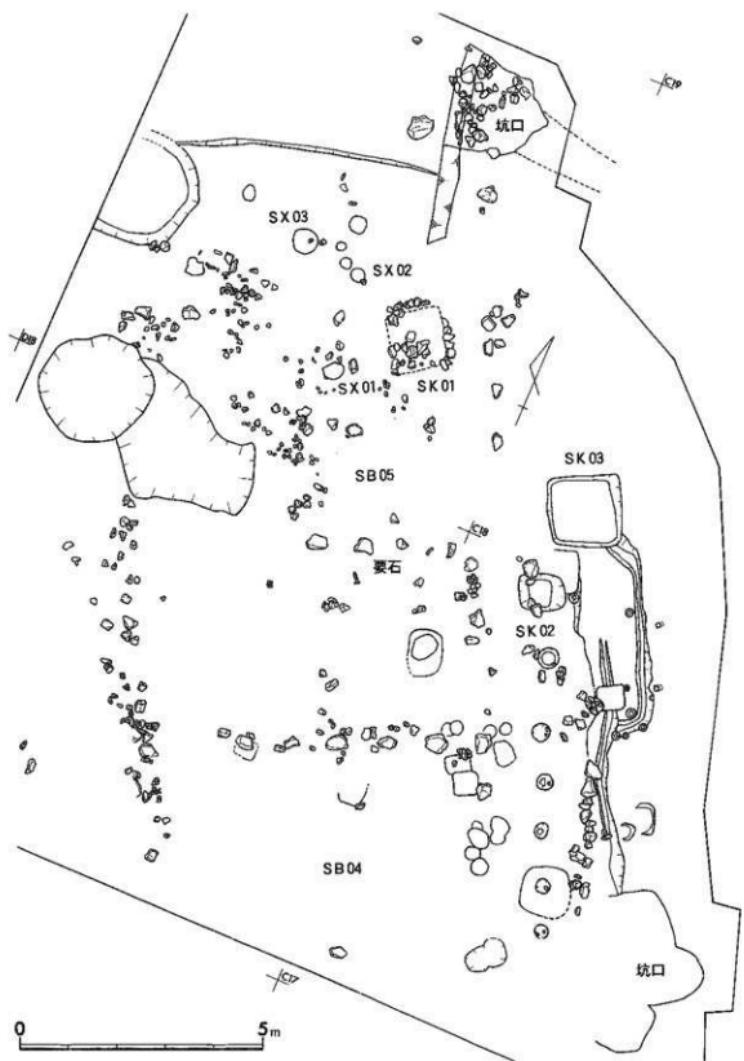
S B 0 3・井戸跡出土遺物（第56図）

S B 0 3からの出土遺物は4～6、井戸跡からの出土遺物は1～3である。

4は肥前系の磁器後花皿で、口縁部に鉄錆が塗られている。高台径は2.8cmで、見込には細い華線で文様が描かれている。5・6は肥前系の陶胎染付碗である。1は肥前系磁器皿で、内面に型打成形による陽刻文様が施されている。2は肥前系の磁器碗で、豊付を除いて全体に施釉されている。3は肥前系の陶器摺鉢である。内面には1単位5条から7条の摺目が入れられている。



第56図 藤田地区S B 0 3 井戸跡出土遺物実測図 (1/3)



第57図 藤田地区SB04・05実測図(1/100)

(3) SB04・SB05

SB04

南北方向に延びる遺跡に面して、礎石建物跡SB04がある。礎石列は東西方向に7m南北方向に1mを測り、礎石間距離は東西方向のものがほぼ1m間隔で7基並んでいる。遺跡に近い礎石列をみると礎石間距離が2mを測るところがあるが、本来は礎石は1m間隔であったと考えられる。

SB04は建物の南東全体が搅乱を受けており、礎石列に沿った部分で土間が検出された。この残存する土間の部分では、礎石に近接する位置や礎石と重なりあった位置で、方形の粘土が貼られた炉跡と推測される遺構を検出している。これは黄色粘土が貼られ炭化物を内部に含むもの、被熱して赤褐色に変色しているものがある。この炉跡は切り合っているものや礎石との位置関係からほぼ同じ場所に炉が構築されたこと、建物の壁に近い位置に炉が位置している。そのほかの建物内部施設については不明である。SB04の礎石列と並行に柱穴が並ぶ。(第58図)P1~P5の柱穴間距離は礎石列と同様に1m前後を測る。この二つの建物の新旧の関係については、掘立柱建物跡が古くなると考えられる。

SB04の搅乱土中や柱穴から、羽口や鐵治津とも観察されるスラグや鉄製品が出土しているため、鐵冶を行った建物の可能性も想定されるが、今後の検討課題である。

SB05

SB05は表土から20cm前後下層で土間面を検出した。この土間は黄褐色粘質土の整地によって造られたと考えられるが、後世の削平で土間が壊され、土間の整地層に含まれる大小の礎が露出している状況であった。建物の構造は礎石建物と推測される礎石の一部が土間面で検出されているが、礎石列にはならないため、建物の規模と構造については不明である。

SB05内の北側に炉跡と推定される遺構が集中している。この炉跡が集中する範囲については、

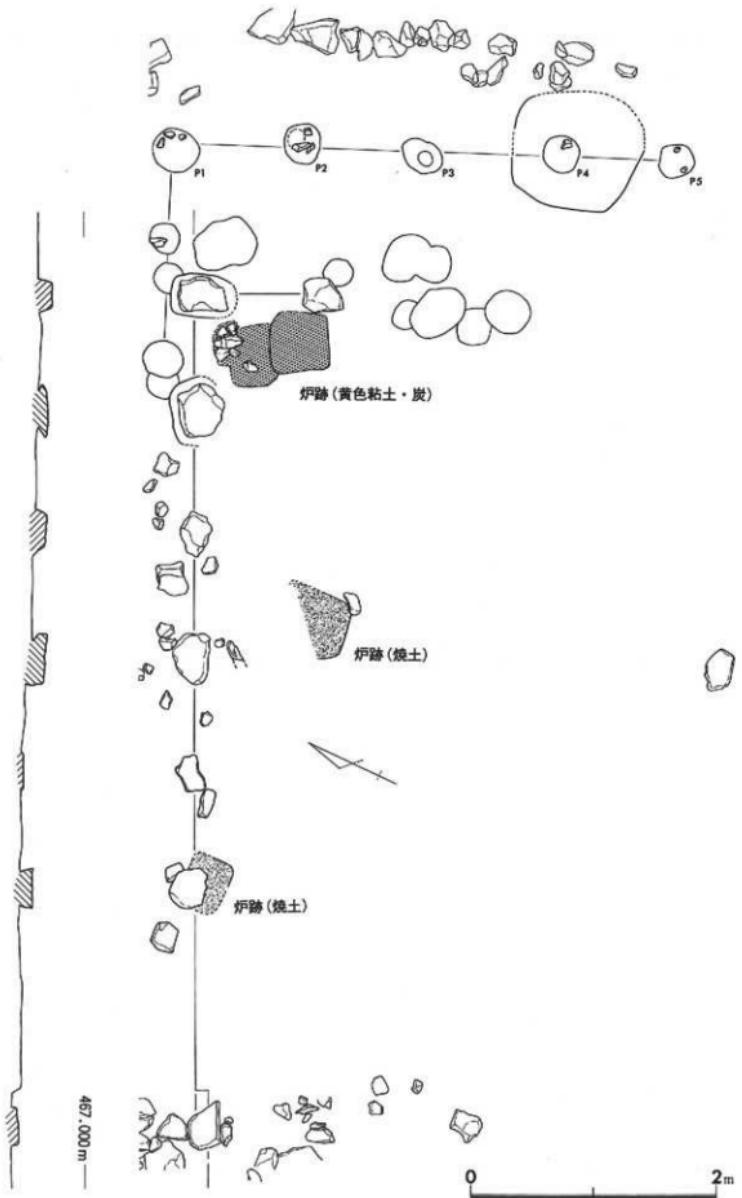
礎石などになる平坦な石やピットが土間面で検出されている。また土坑が建物の内部と建物の東側斜面裾で検出している。炉跡の存在、出土したカラミや羽口などの遺物から、建物の性格は吹屋と考えられる。

SB05の北側では炉跡群を検出している。これらの炉跡は、ほとんどが炉本体上部が削平を受けたものと観察され、また炉が同じ位置で造り替えられたことによる切り合いがあり、遺存状況は良好ではない。検出した炉跡は、土間にくぼみ粘土を貼り炉を築いている地床タイプの炉と考えられ、炉底部の粘土貼りのみが残存しているもの、粘土貼りはみられず炭化物と思われる黒色土が円形に堆積しているものなどがみられる。炉の平面形については、SB04内で検出した炉は平面が方形のものであるが、SB05内で検出した炉はすべて円形である。

炉築造に使用される粘土については、土間の粘土が小謫を含んでいる地山粘土で築成しているのに対し、炉に用いられる粘土は混入物のない精製した粘土を使用しているものと推測される。また、炉の粘土は黄色や赤褐色を呈するものが多い。

炉跡群の中で良好に遺存している、SX01~03について調査をおこなった。SX01は、直径30cmの円形の範囲が1層の黒褐色土で、この中に炭化物・焼土・羽口・カラミを含んでいる。炉跡の西側に粘土貼りが確認され、8層の赤茶色土は被熱し、硬化していることが観察された。断ち割りによる土層断面をみると、2・3層の粘土は操業後に入り込んだ可能性がある。この炉跡について注目される点は、粘土貼りの中に7層の灰白色土がバチ形に埋設されていることである。この灰白色土は粒子が細かく均質であることから、灰になる可能性がある。

SX02は直径30cm前後で、円形に粘土を貼った様子がよく残っていた。炉内1層の暗黃褐色粘質土から、羽口片や板状土製品の破片が出土し、2層の黒色砂質土も羽口片やカラミを包含してい



第58図 藤田地区 S B 0 4 実測図 (1/40)

る。3層の茶褐色粘質土の上面に黄褐色粘土ブロックが部分的にのっていることから、3層の上面が最初に築かれた炉底となると考えられる。3層の下は礫が隙間をもちらながら敷かれており、蓄熱と防湿を目的とした炉の下部構造と推測される。最終操業時の炉底は2層上面になるか、削平を受けた可能性がある。

S X 0 3 は直径45cm前後で、粘土を貼った痕跡は確認されない。2層黒褐色土が炭を多く含み、羽口片・カラミを包含している。3層は羽口片・礫・炭・粘土ブロックの層となっている。断ちわりによる断面の土層をみると、炉は3層および7層の下を炉底として築かれたと観察される。その後数度の操業後、最終操業時は3層の上面が炉底となり、3層は炉の下部構造となった可能性がある。なお2層に含まれる羽口片は断面が方形になる羽口で、3層の羽口片の中には断面が円形になる羽口片が含まれている。またS X 0 2 とS X 0 3 で出土した断面方形の羽口が接合し、ほぼ一個の羽口になることが判明し、この点については検討する課題となっている。

S K 0 1 は、S B 0 5 内で中央の北よりに位置している。平面形は一辺が1m前後の正方形で、検出面からの深さは45cmを測る。埋土を完全に掘り上げていないため推定であるが、断面形は方形で、立ち上がりも垂直に近いと考えられる。確認している埋土は上層が10~20cm程度の礫を含む暗褐色土で、粘性がなく炭化物を含み粒子は細かい。第2層は埋土のほとんど占める暗茶褐色砂質粘土である。均一で細かい粒子を多く含むこの土は、やや強い粘性をもっており、水性堆積と判断された。第3層は第2層よりも明るめの褐色土で、土質もよく似ていた。また、土坑北辺と東辺には最大で3段の石積みが検出され、石と石の隙間を粘土で充填している。土坑底面は固く締まっており、埋土の状況や、粘土貼りからこの土坑は水を溜める目的で構築されたと考えられる。

S K 0 2 は、建物の東側に位置し、土坑の概ね

1/3は岩盤を穿って構築されている。平面形は、長辺1.0m、短辺0.8mの隅丸方形である。埋土のほとんどが竹根により擾乱されていたが、下層には黄褐色粘土が敷かれる状態で認められた。掘り形の西側は断ち割りによって、茶褐色土、紫灰色土が確認されたが、建物の土間面の土であることが、断面の土層より観察された。土坑内と土坑上面には礫があり、上面のものは掘り形を覆うように置かれた状態で出土した。土坑の断面形は歪な逆台形を呈し、底面は西側にかけて傾斜している。

S K 0 3 はS B 0 5 の東端に位置し、建物背後と考えられる岩盤を掘削して構築されている。平面形は一辺が1.3~1.5mの正方形、断面形は逆台形、検出面からの深さは最大で25cmを測る。埋土はほとんどがS K 0 1 の埋土に似た茶褐色の砂質粘土で、水性堆積と判断された。土坑東側の側面に暗茶色粘土が認められ、底面は茶~黒色を呈する粘土貼りであった。粘土の色が黒ずんでいるのは、鉱石中に含まれたマンガン、鉄分によって変色したものである。

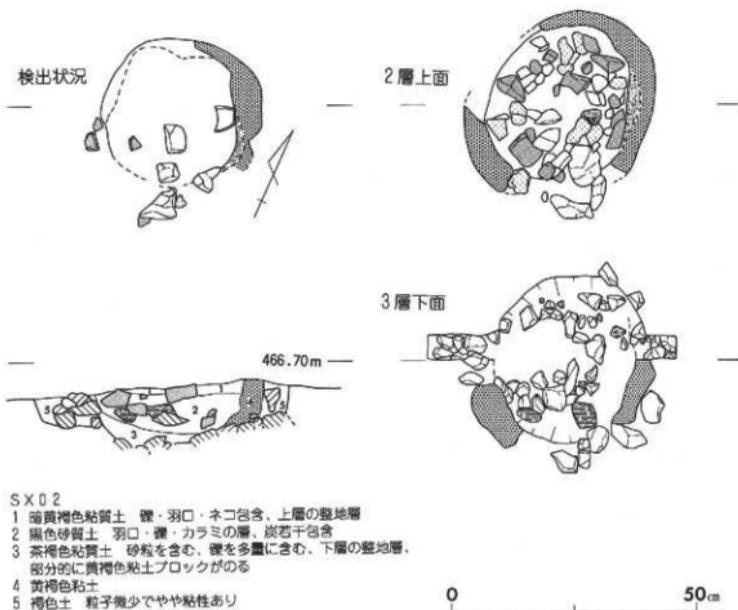
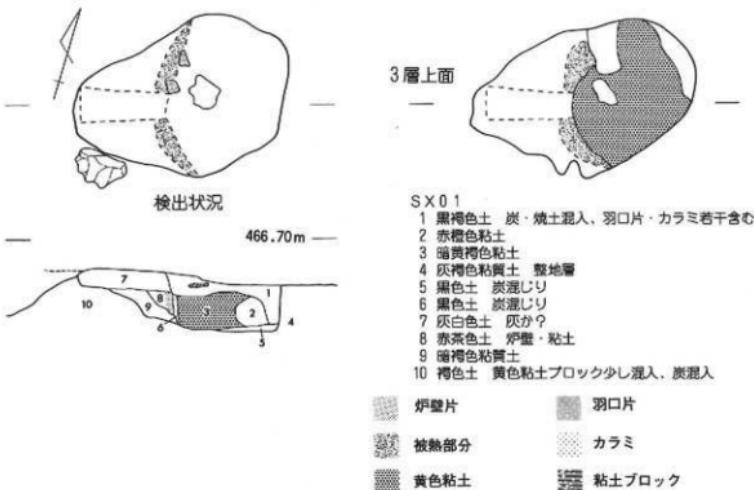
この土坑の性格については、土坑の中で直接比重鉛をおこなうか、または半切桶の中に水を入れて比重鉛を行なう際に水を溜め置くという、二つの場合が想定されよう。

採鉱遺構

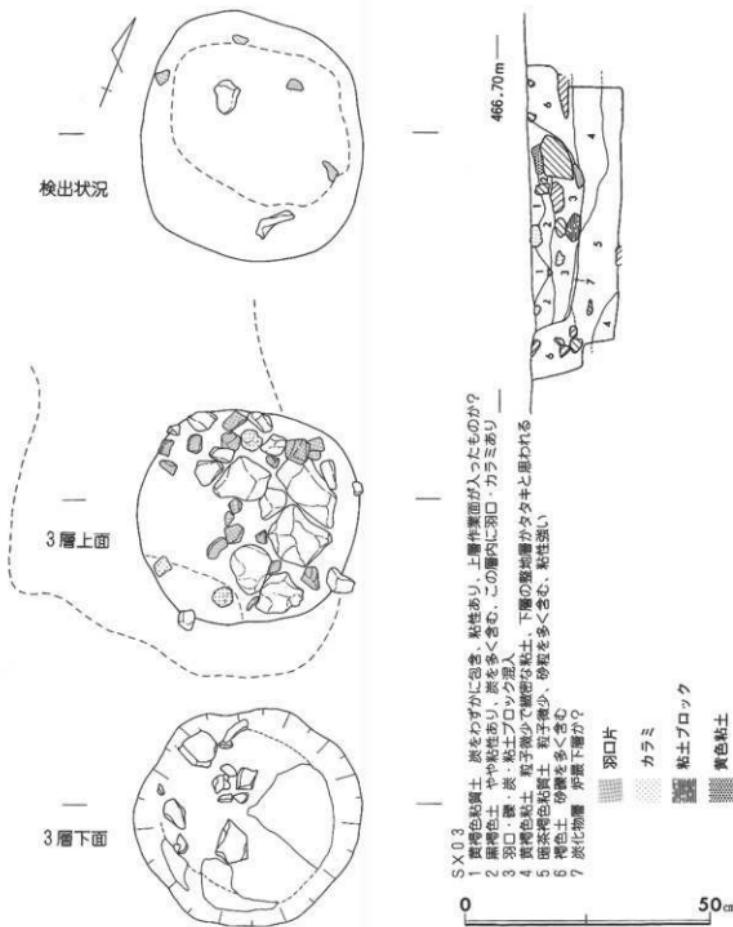
S B 0 4・0 5 の東側丘陵斜面では、表土除去後に岩盤を検出している。この岩盤表面には鉱脈を探鉱した痕跡と推測される、鉱脈の部分だけが穿たれその跡が溝状になっている遺構を検出している。これは露頭掘りの跡と考えられ、溝状遺構の両側には鉄・マンガン分が脈状となっていることが観察される。

またこの岩盤には、S B 0 4 の東では坑口と推測される加工の跡や、削平により平坦面を造り出したところがある。

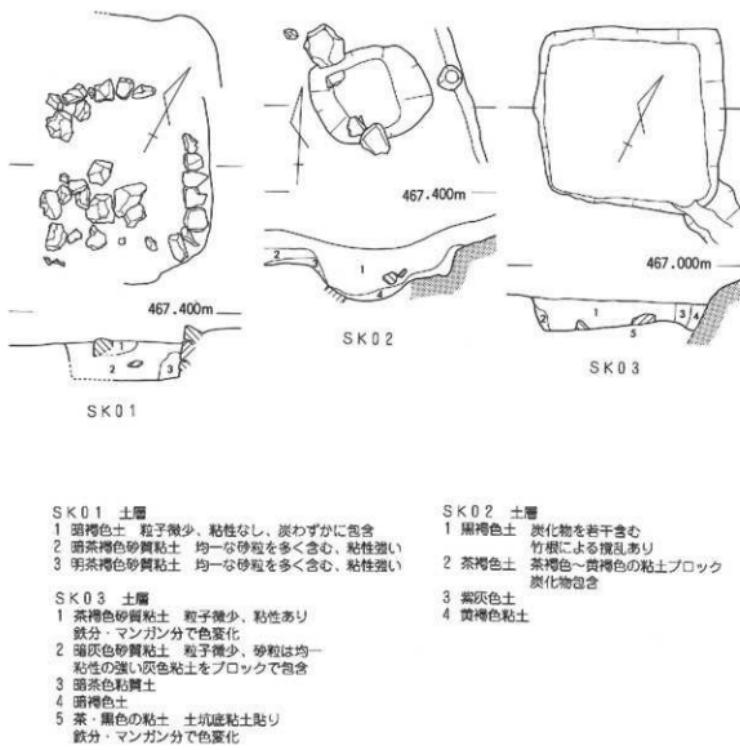
S B 0 5 の東、S K 0 2・0 3 に近いところでは、露頭掘りの痕跡ではない幅20~30cm、深さ5



第59図 藤田地区 S B 0 5 内 S X 0 1・0 2 実測図 (1/10)

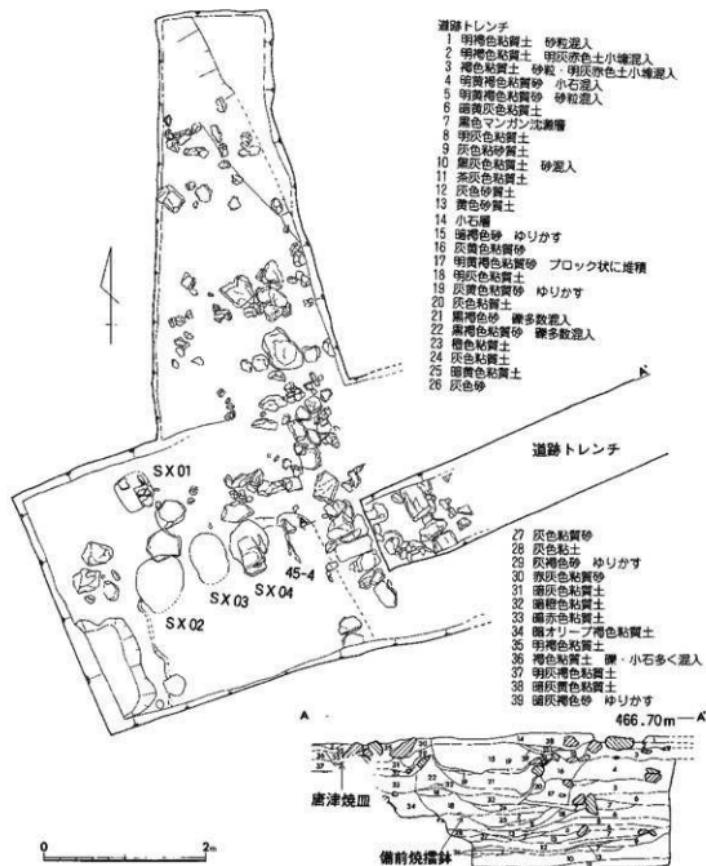


第60図 藤田地区SB05内SX03実測図(1/10)



第61図 藤田地区SB05内SK01・02・03実測図 (1/40)

cm前後で加工された溝状造構を検出している。こ
の溝状造構はSK03に北側でつながっており、
関連が注目される。また岩盤では直径10~20cmの
ピットを9基検出している。これらのピットはS
B05の建物に付属する柱穴などの造構になると
考えられる。



第62図 藤田地区 SB06 実測図 (1/60)

(4) SB 0 6

道跡

表土を除去した後に確認した、幅2.0mに小石を敷き詰めた道跡である。道の両端には石列があり、この石が建物と道の境界になっている。道の下には溝があり、幅1.5m、深さ0.35mを測り、その溝内にはユリカスが堆積している。この溝の上面から1.3m下層まで溝が最低5回作り替えられている。下層の建物から何回かの建て替えにより盛り土がされ、古い時代の建物、溝が埋められた結果と思われる。上層においては唐津焼皿が出土しており、江戸時代初め頃と考えられる。また、トレーナー内からは、備前焼鉢（第66図17）が出土しており戦国時代末のものである。

S X 0 1

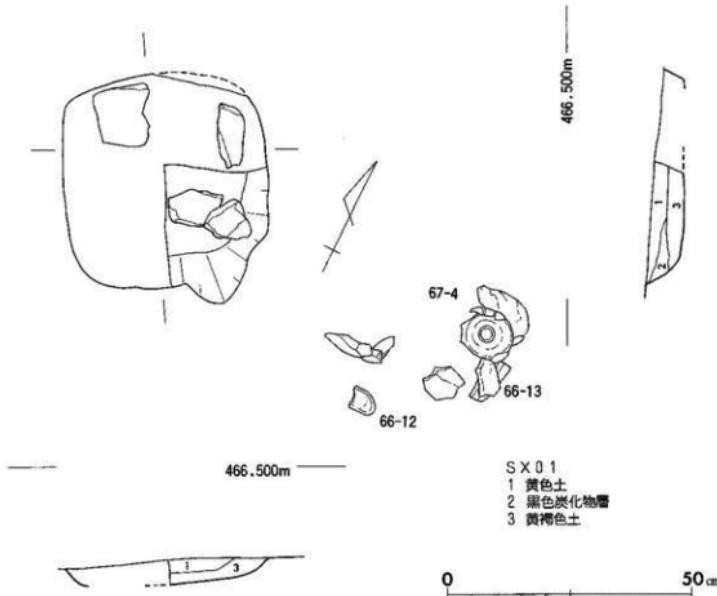
S X 0 1 は、上層の遺構面において検出してお

り、平面形は正方形の角に丸みを持つものである。南壁の一部が屈曲しており、ややいびつな形となっている。炉は、一辺40cm、深さ9cmを測る。覆土は、黒色と灰色の土が入っており、底には灰らしきものもみられた。炉内からは、拳大の石が4個出土している。この炉の近くからは唐津焼の皿が出土しており、この遺構面の時代は江戸時代初めと考えられる。

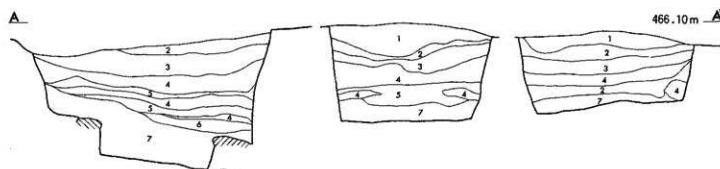
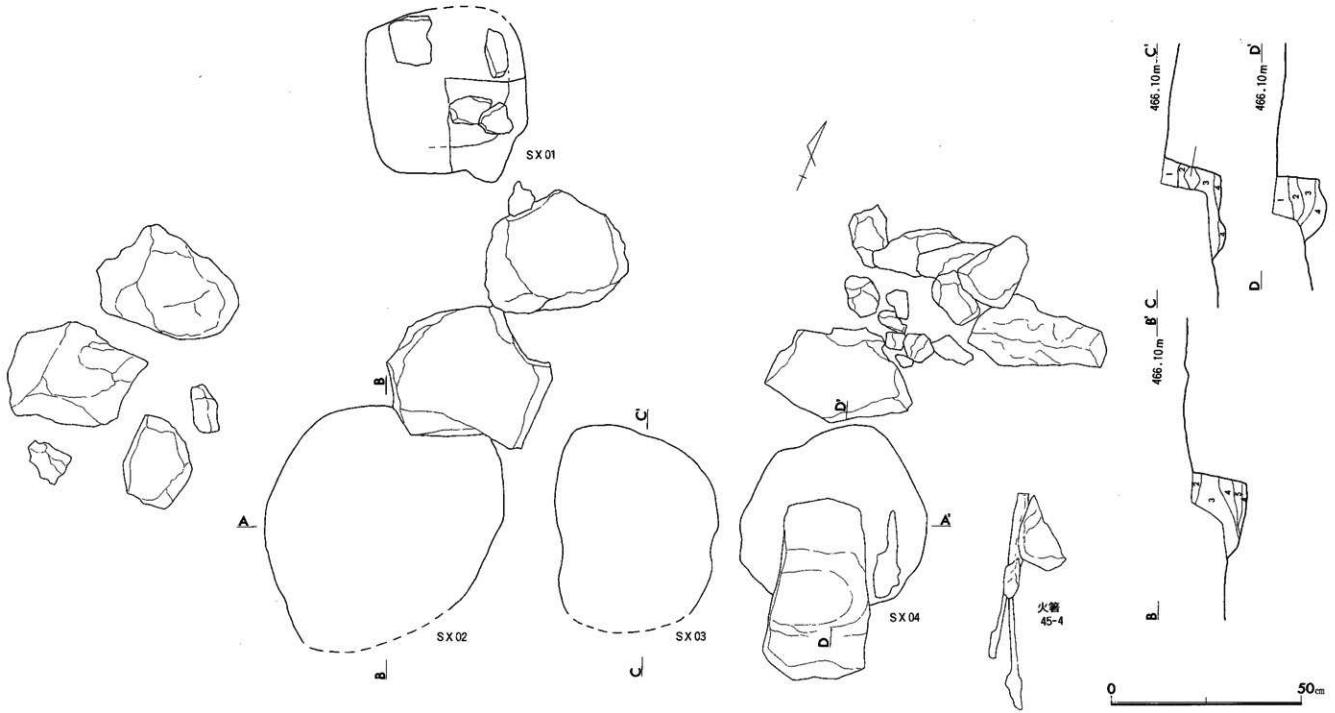
S X 0 2 • 0 3 • 0 4

S X 0 1 と礎石列を挟んで南側の一層下層の遺構面において、3基の炉跡を並んだ状態で検出している。礎石列より南側は、黄色粘土が建物床面に貼られており、黄色粘土を掘り込んで炉が築かれている。炉跡は、西から便宜的に S X 0 2 • 0 3 • 0 4 としている。

S X 0 2 は、75cm×62cmの大きさで平面形が精



第63図 藤田地区SB 0 6内S X 0 1実測図(1/10)



- S X 0 2 · 0 3 · 0 4
- 1 黄色粘質土 地山ブロック（白色粘子）を含む
- 2 黒色土 炭を多く含む サラサラの土
- 3 墓穴灰土 白色（骨片入り）粒子を含む ゼンイを多く含む サラサラの土
- 4 圖鑑灰色土 炭を多く含む
- 5 深褐色土 赤色（燒土）粒子の土
- 6 酸灰土粘土 白色粘子を含む
- 7 灰色礫層 小石を多く含む土

第64図 藤田地区SB06内SX02・03・04実測図(1/10)

円形を呈している。内部には、上から黒色土、暗灰色土、赤褐色土の順に堆積している。黒色土は、ほとんどが炭でできた土と思われる。暗灰色土は、重量の少ない土で植物繊維を多く含み、白色の骨もしくは貝殻の粒子と思われるものを含んでいる灰の層と考えられる。赤褐色土は、焼土の粒子でできている。最下層には、小石でできた灰色の礫層が厚く堆積している。

S X 0 3 は 61cm × 42cm で、長めの梢円形を呈し、内部の上層には黄色粘土が堆積している。この土は地山の白色粒子を含んでおり、床面を構築している粘土とは異なる土である。

S X 0 4 は、50cm × 46cm で、正方形の角が丸い形である。S X 0 3 と同様に上部に黄色粘土が入り、黒色土、灰色土が互層に入っている。S X 0 2、0 3、0 4とも壁は垂直に近く立ち上がるものである。S X 0 4 の一段上部には要石があるが、これらの炉跡より後の時期のものである。炉跡の直上からは鉄製品が出土している。破片のため形態は不明であるが、薄い板状のもので、鍋の可能性もある。また、S X 0 4 の東側より鉄製の火箸が出土している。炉の横に位置することから精錬の際に使用された可能性がある。

S X 0 2、0 3、0 4 の南側は、黄色の粘土層と黒色の炭化物層が互層状に敷き詰められており、炉を築くために防温を考えて床面を作ったものと思われる。3基の炉の上部は 2.5m × 2.0m の範囲に礫が敷かれた状態であった。

S B 0 4 出土遺物（第65図1～7）

1、2は土器皿で底部に糸切り痕を残す。3は肥前系・唐津の碗で、薄い緑色の釉がかかる。4と7は、中国製青花の碗（4）と皿（7）である。4は見込みに花文と團線を表現し、7は内面に花文を描いている。5は備前・播鉢、6は肥前系・唐津絵皿で内面に草花を筆致で描く鉄絵を施している。

S B 0 5 出土遺物（第65図8～17）

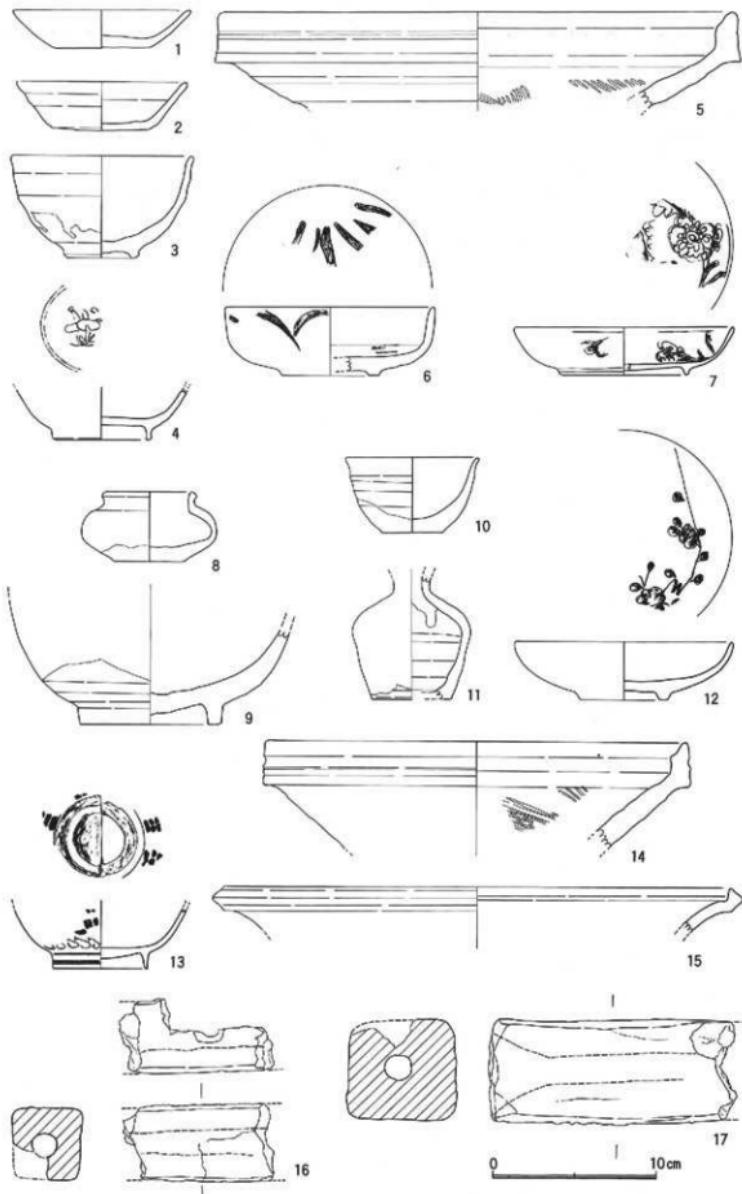
8～11は、肥前系唐津の製品である。12、13は

伊万里染付である。14は備前播鉢、15は肥前系唐津播鉢である。16は S X 0 2 内より出土した羽口で、断面が方形のものである。先端に近い部分には黒色に熔着する部分がある。17は断面の厚さが 6.8cm でやや大型のものであり、吹子の木呂竹を受ける部分の径は 5.0cm である。外面には、比熱により溶着する部分がある。

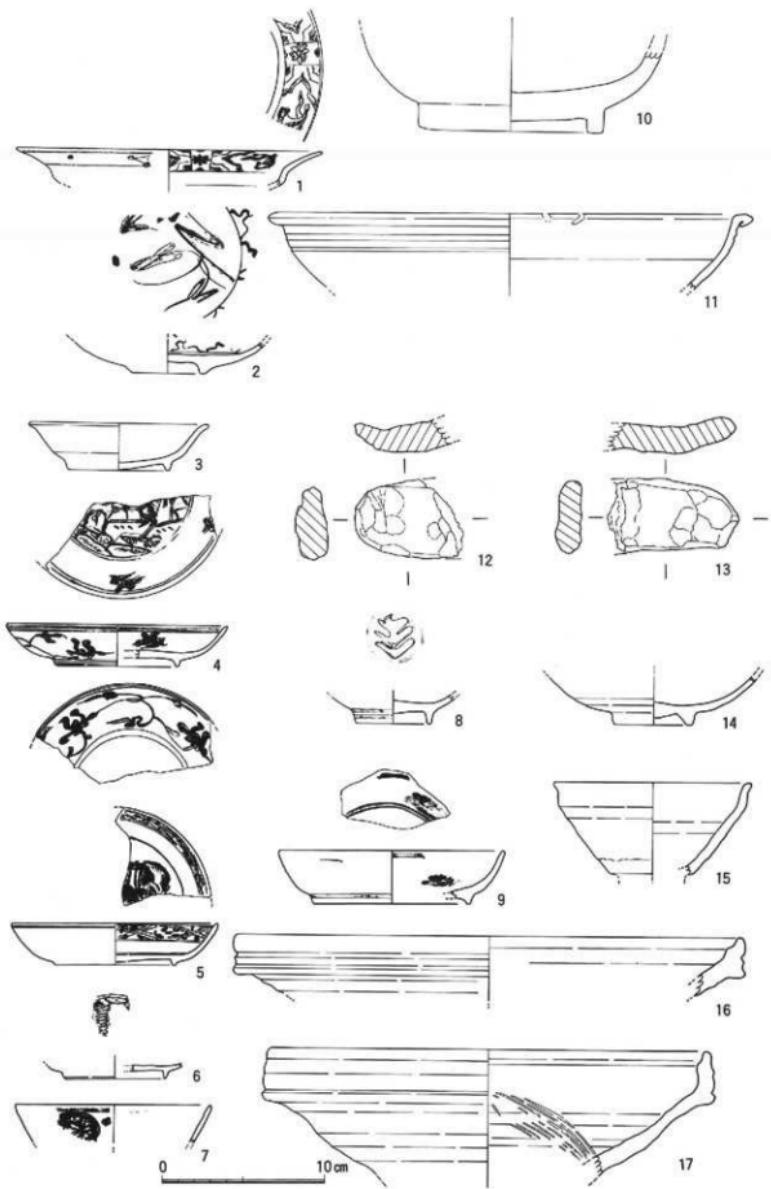
S B 0 6 出土遺物（第66、67図）

第66図1、4、5～9は中国製青花であり、7、8が碗で他は皿である。3は中国製白磁皿、15が美濃系天目茶碗、16、17が備前播鉢で、これらの時期は16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。2、10、11、14は肥前系陶器である。12、13は、S X 0 1 の近くから出土した土道具・ねこの破片で対で使用されたものと思われる。粘土を手捏成形しており、表面に指頭圧痕が残る。第67 1～22は S X 0 2 ～0 4 を検出している遺構面から出土している肥前系唐津の製品である。1～14は皿で1～8は胎土目、9～11は砂目当痕が残る。3、4、6、7は内面に鉄絵を施している。15は唐津ぐい呑である。18～21は瓶で外面に白色釉が描かる。21、22は甕で、22は内外面に叩きを消した痕跡が残る。23は肥前系伊万里の鉢である。

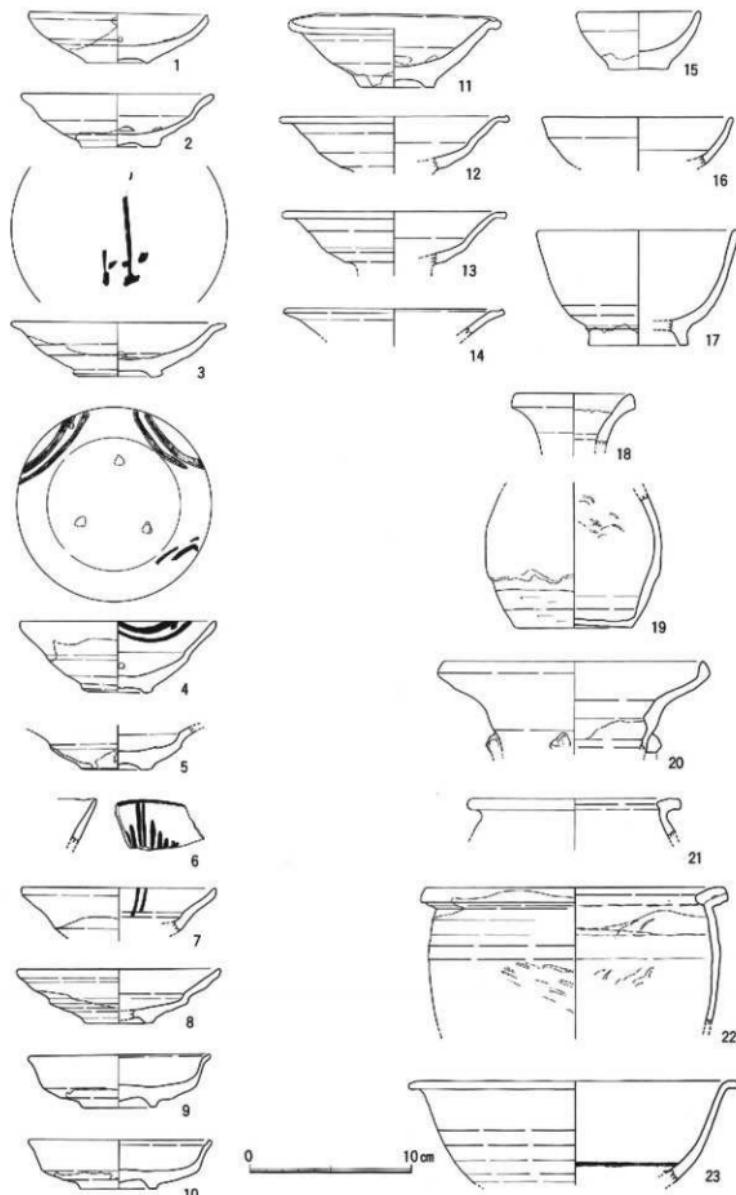
第45図4は、S X 0 4 の横から出土した鉄製火箸である。X線写真によると、箸2本が接着しておらず途中で交差した状態であった。箸の頭部は輪状に折り曲げられ、円形の輪に 6.5cm の両端を折り曲げたものでそれぞれの箸と繋いでいる。箸の長さは 46.4cm 、断面は方形で厚さ 0.9cm を測るやや大形のものである。



第65図 藤田地区SB 04・05出土遺物実測図(1/3)



第66図 藤田地区SB04・05・06出土遺物実測図(1/3)

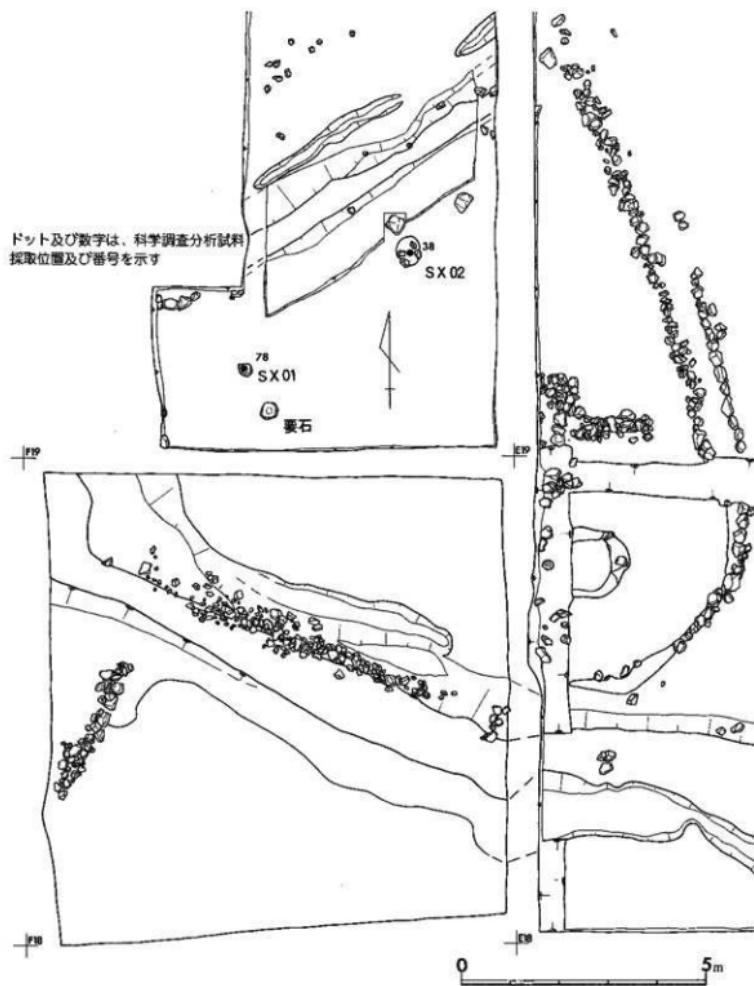


第67図 藤田地区SB06出土遺物実測図(1/3)

(5) SB 07・08

調査区を設けた平坦地の中央をほぼ南北方向に
通る道跡から、西へ分歧する道跡を E 19・F 19 ゲ

リッドで検出した。これまでの調査成果にもとづ
くと、道に面して建物が存在したと想定される。
そこで、この道跡より南側部分を SB 07、北側



第68図 藤田地区SB 07・08実測図(1/100)

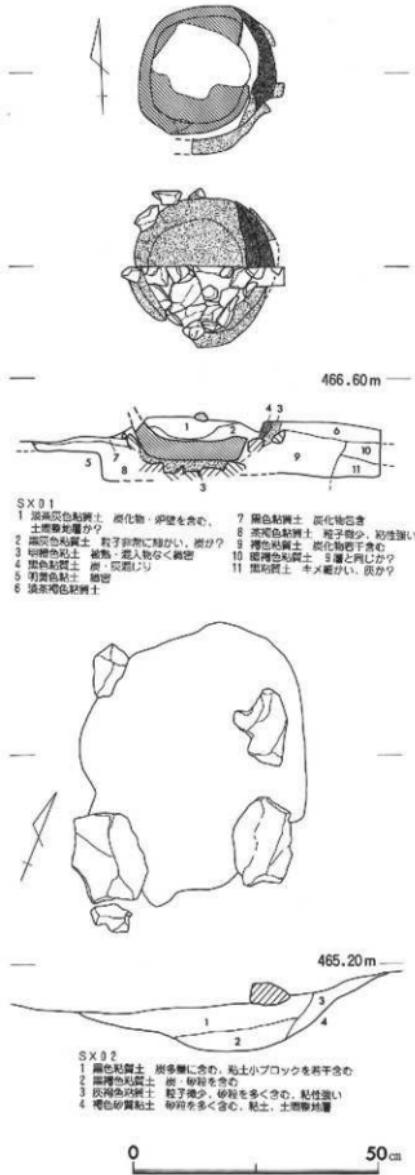
部分をSB08として、以下調査成果を記述する。

SB07では、表土と遺物包含層である明褐色土層を掘削し、土のしまった面を検出した。グリッド西側で石列1条を検出したほかは、柱穴・礎石といった建物の存在を示すような遺構は確認できなかった。土間によく用いられる黄色系粘質土を貼った部分や精耕施設、土坑なども確認できなかった。とはいっても後世の耕作などによって、遺構面自体が既に破壊されている可能性も充分考えられる。また、E19グリッドでは道跡南側に溝跡1条が検出されているが、F19グリッド内でその延長部分を確認することはできなかった。

F19グリッド西側で確認された石列は、長さ約3.2m。北東から南西にかけて、ちょうど道跡に直交する方向に並ぶ。積み方はあまり丁寧でない。北側では比較的大きな石が使用されている。SB07全体の状況からすると、構築当時の状況をそのままとめていい可能性がある。したがって現時点では、この石列は土地空間を利用する上でなんらかの機能を果たしたもの、と推測するにとどめたい。

SB07と08の間の道跡は、F19グリッドを東西に横断し、調査区外に続くと推測される。幅は約0.8~1.0mで、明褐色土層上に砂利や小礫を敷いて造られている。SB07・08検出面と道跡とは高低差があり、道跡両側からそれぞれの検出面に向けては緩やかな斜面となっている。北側斜面の上端には道跡に沿って石が多くみられた。ただ、その大きさはまちまちであり、列を成すものではない。南側斜面は北側と異なって、石が全く無かった。

SB08の範囲は、北はF20グリッドの道跡まで、東は石列を伴う南北方向の溝跡、南はF19グリッドの道跡までで、整った方形ではない。竹根の多い表土を重機により掘削後、遺物包含層である褐色粘質土を掘り下げていった。SB08出土遺物の多くは、この褐色粘質土層からのものである。途中部分的に面を検出したが、しっかりした



第69図 藤田地区SB08内 SX01・02実測図 (1/10)

遺構なども無かったため掘削を進めて、0.7m以上掘り下がったところで遺構面を検出した。遺構検出面やF19グリッド内の擾乱坑には水が染み出し、E19グリッド内のサブトレンチには常に湧水があった。

検出された遺構は、礎石列1条・溝跡1条・炉跡3基・集石1基である。また、SX01から約0.7m南東で要石が出土した。炉跡の存在から、SB08は銀精錬作業を行った施設と考えられる。

礎石列はF20グリッドで検出され、SB08東側の溝跡に直交する方向に並ぶ。SB08は礎石建物跡と考えられる。しかし礎石列を部分的にしか検出していなかったため、建物全体の規模などを復原するまでには至らなかった。また礎石の内1基は、道跡に伴う上層の面を部分的に掘り下げて検出した。したがって、道跡は建物より新しい時期のものである。

F19グリッドの道跡北側に溝跡が検出されたが、道跡上面とは大分高差がある。また10~15cmとかなり浅く、西端はどこまでか確認できなかった。

炉跡のうち2基は、どちらもF20グリッド内、SB08北半に位置する。

SX01は、土間を掘り込んで石製の鉢を据えて使用した炉跡である。この鉢は底部が残るもの、胸部から口縁部にかけて、ほとんどが欠損している。底部径は18cm、厚さは底部で5cm、残存する胸部で3cmを測る。地元産と考えられる凝灰岩系の石を材料として、加工したものである。鉢内部の堆積土は、1層が炭・カラミを含む粘質土である。2層黒灰色粘質土は、粒子が非常に細かい土であることから、灰であった可能性がある。鉢の周囲と底部の下には粘土が貼られ、被熱して明橙色に変化している。この粘土層の下層には礎が敷き詰めてあり、これは蓄熱と防湿を目的とした炉の下部構造であろう。以上の検出状況から判断すれば、鉢の内部が炉として使用されたと考えられる。

SX02は、長径52cm、短径45cmの楕円形の範

囲に、炭・焼土と4個の礎が検出された炉跡である。土層断面の観察からは、炉の下部構造と推測される。

SX03は、E19グリッド、SB08南東に位置する。直径約1.4~1.5m、やや楕円形の形状である。平面の状況や炉跡を切っているサブトレンチの土層を観察すると、周囲約0.2~0.3mの幅で黄白色や橙色の粘土があり、その内側は上層の明褐色土が堆積している。おそらく、内面に粘土を貼り付け、内側はくぼんでいたものと推測される。この土坑の使用時、内側に何が充填されていたかは不明である。被熱部分がないものの、あるいは炉としていた可能性がある。

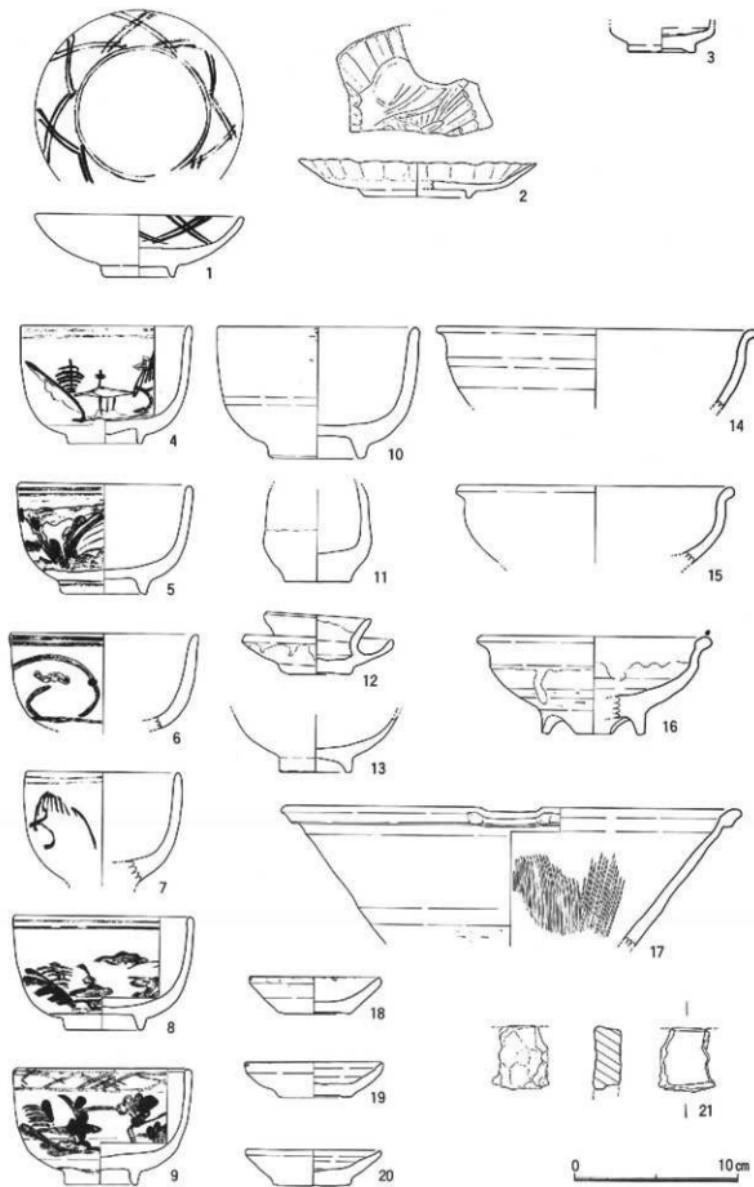
集石は、前述の土坑の北側で検出された。部分的にサブトレンチにかかるが、比較的大きさのそろった石が南北方向に複数並ぶことを確認できた。ただ石の並びは東側の溝跡と平行でなく、SB08の礎石列とも垂直方向には位置しない。集石北端と東側には、石がさらさまとなっていた状態である。この集石の機能やSB08との関係などは、今後の検討を待ちたい。

S B 0 7 • 0 8 出土遺物（第70図・72図）

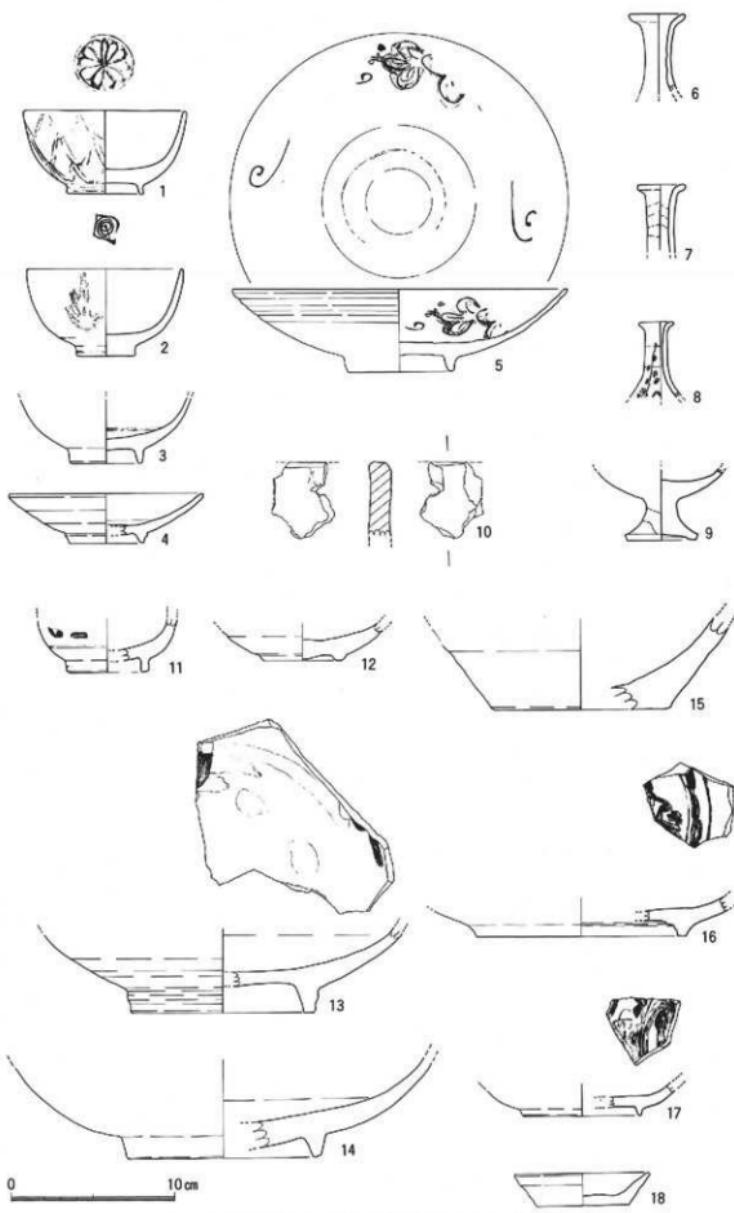
SB08では、第70図4~21・第72図1~10のように、明褐色土層から多くの遺物が出土した。完形品が多く、仏像などもみられる。第72図11~13・15~17は、E19グリッドサブトレンチ内やその周辺から出土したものである。14はSB08内の炉跡が検出された遺構面で、18はSX02に伴って出土した。

第70図のうち、1~3はE19グリッドの道跡から出土したものである。1・2は肥前系磁器皿である。1は、見込みの釉が蛇の目状に剥き取られている。2は型打ち成形により内面に文様を描くもので、波状の口縁部を持つ。3は肥前系陶器筒型小碗で、高台置付に目積痕跡が2箇所残る。

4~10は肥前系の陶胎染付碗である。いずれも器壁は厚く、体部は上方へまっすぐ立ち上がる。また、外面上に文様が描かれ、口縁部には圓線が2



第70図 藤田地区SB08出土遺物実測図(1)(1/3)



第71図 藤田地区SB 0 8出土遺物実測図(2)(1/3)

条まわる。4・9には山水文が、6・7には唐草文が施される。

11～17は肥前系陶器である。11は底径4.1cm、底部付近は露胎である。12は灯明皿で、灰色の釉がかけられている。底面には回転糸切り痕が残る。13は黄褐色を呈する碗で、外面の釉が若干とんでいる。14～16は鉢である。14・15の口縁部は外側へ屈曲し、15は口縁部付近に施釉されている。16は、高台に3箇所半円形のくり込みを持つ。折り返された口縁部周辺に鉄輪が施されている。17は片口付き擂鉢で、体部が直線的に開くものである。内面に1単位19条の擂目が密に施されている。体部下方はヘラケズリ調整である。

18～20は土師器の皿で、器壁はやや厚い。いずれも底部は回転糸切りである。18は、糸切りの後にヘラケズリがなされる。18・19の口縁部にはすすぐ付着している。21・第72図10は、精錬戸の周りに立てて使われたとされる土製品である。10の左側面は被熱し、一部付着物が認められる。

第72図1～9は肥前系磁器である。1は外面に二重網目文が、見込の二重圈線の中に花文が描かれた碗である。高台外面には3条の圈線がめぐり、底裏には方形枠内に文字が渦状に崩れて描かれる。2の碗は外面にコンニャク判によって装飾が施される。4・5は見込の釉が剥ぎ取られている皿である。5は、口径20.4cmを測る大型のものである。6・7・8は小瓶の口縁部から頸部片である。9の外面は施釉により緑色を呈する。6～9は、仏壇具といった用途が想定されるものである。

11は肥前系の陶胎染付碗である。体部や高台外面に3条の圈線がめぐる。12・15はサブトレント内の青灰色土層中より出土した。12は削り出し高台を持ち、外面は無釉である。見込に砂目積み痕跡が残る。15は備前焼擂鉢で、内面には1単位10条の擂目が施される。底部には回転糸切りの痕跡が残る。13・14は底径がそれぞれ11.2cm・11.5cmと大きなもので、ともに見込に砂目積み痕跡が残る。13は内面のみ施釉されている。16は中国南方

産のものであろうか、青花皿である。暗赤色粘質土（ゆりかす）層より出土した。全面に施釉されている。17は、高台の低い肥前系磁器皿である。高台疊付は露胎で、施釉部分は淡灰色を呈する。18は土師器の皿で、底部は回転糸切りである。外面及び口縁部内面にはすすぐ付着しており、黒くなっている。

S B 0 8 出土遺物の時期であるが、大半を占める遺物包含層出土のものは、おおよそ17世紀後半から18世紀代とみられる。E 19グリッドサブトレント内やその周辺から出土したもの、S B 0 8 遷移検出面などから出土したものには、17世紀前半までさかのぼるものもあると考えられる。

(6) S B 0 9 + 1 0

南北方向に通る道跡は、F 22グリッドまで確認された。一方、F 21グリッド中ほどの溝跡を境に、検出した遺構面に段差がついている。道跡東側の調査成果によれば、道に面して建物（S B 0 1～0 3）が存在し、建物間には石積みや法面などで段差がつけられていた。そこで、道跡西側の部分で、この溝跡より南側部分をS B 0 9、北側部分をS B 1 0として、以下調査成果を記述する。

S B 0 9・1 0 の部分でも他と同様に、竹根の多い表土を重機により除去した後、人力で掘削し遺構面の検出作業を行った。明褐色土層中の出土遺物を確認しつつ、0.3～0.6m掘り下げて、遺構面を検出した。

S B 0 9では、黄白色粘質土を貼った範囲が部分的に認められたものの、柱穴や礎石、炉跡や土坑などは確認できなかった。しかし、F 20グリッドの道跡北側と、F 21グリッドのS B 1 0との境にそれぞれ溝跡を検出した。

F 20グリッドの溝跡は、全長約6.1m、幅0.3～0.5m、深さ約0.2mである。途中1.3～1.4mの間隔があくが、両端で規模・埋土は変わらない。埋土は黄灰色のやや粗い砂であった。

F 21グリッドの溝跡は、調査区を横切って東西

方向に位置する。東端は南北方向の遺跡に伴う石列まで、西端は調査区外へと続いている。全長約5.0m、幅0.6~0.8m、深さ約0.3mである。溝跡のSB09側の肩には石が一部まとまってみられたが、とくに積まれておらず、大きさにばらつきがある。石の幾つかは溝へ転がり落ちた状態で出土している。埋土は砂混じり褐色土であった。

SB10で検出された遺構は、礎石数基・溝跡1条・土坑1基・ピット複数である。また、SB10と遺跡の間には、部分的に石列が確認された。第74図に掲げたように、無文銭が縦状で2列に納められた小土坑も検出した。

SB10周辺の検出遺構面では、土色の違いが確認できた。この違いは、建物内外での空間利用状況の違いを反映したものと考えられるため、第72図では土色の異なる範囲を注記して示している。調査時には、土色の異なる範囲ごとに土を適量採取し、科学調査の分析試料とした。図中のドット及び数字は、試料採取地点及び試料番号を示す。

具体的には、遺跡及びその周辺にベースとなる暗赤色粘質土がみられ、建物内側の土間に相当する部分には黄色系粘土がみられた。調査区西側へも土間部分は続くようであり、想定される建物の規模は現時点では把握できていない。部分的に暗赤色粘質土が方形に広がるところがあるが、遺構であるかどうかは判断できなかった。

礎石は数基検出されたが、列とならず、間隔も一定になるものではなかった。黄色系粘土をわずかに取り除いた状態で存在を確認できるものもあったことから、今後精査を進めていく中で、新たに礎石が検出される可能性もある。

F22グリッド南西隅で、溝跡1条を検出した。全長約0.6m、幅0.4~0.5m、深さ0.1~0.2mである。両端とも調査区外へ続いているとみられる。SB10の西側の境となるものかどうかは、現状では判断しかねる。

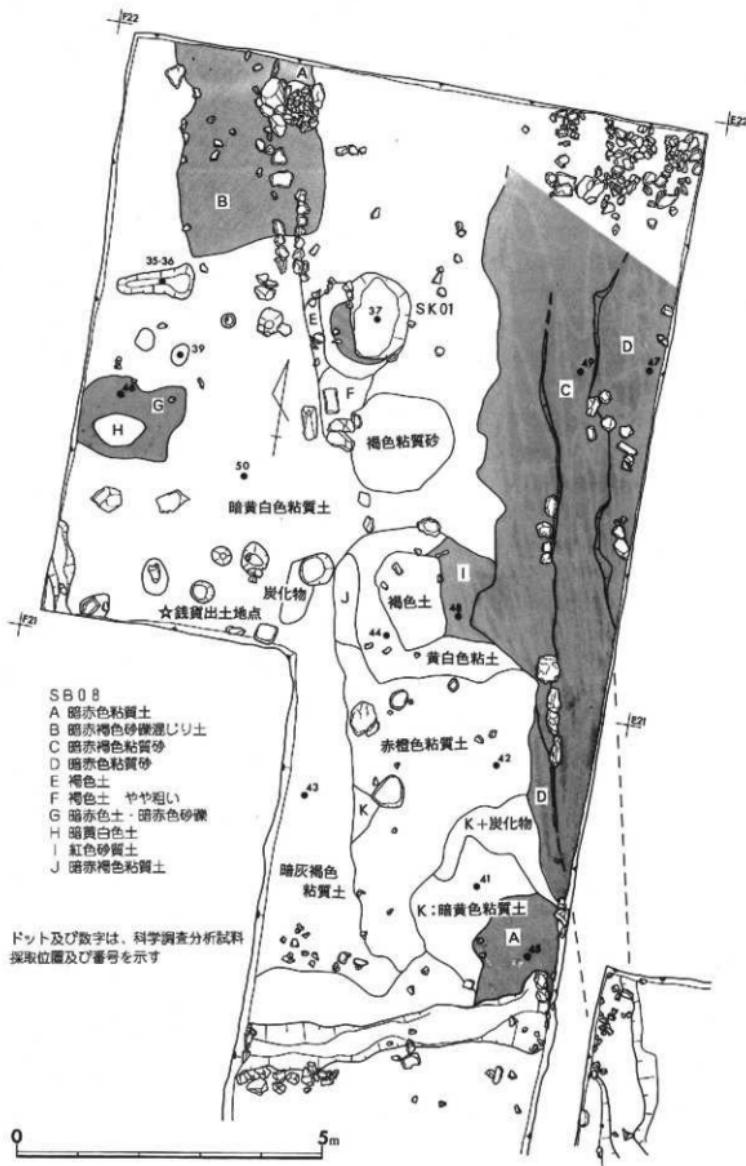
第73図は、埋土にゆりかすや砂を含む土坑の実測図である。主軸をほぼ南北方向にとり、長さは

長軸で約1.4m、短軸で約1.0m、深さは約0.2mである。断面は舟底状で、東西方向に比べて南北方向の立ち上がりはやや急である。土坑西側から南側周辺にかけて、暗赤色粘質土層がみられた。土坑の堆積土をみてみると、4層が暗赤色粘質土(ゆりかす)、3・6・9・10層が砂層となっている。堆積状況に大きな乱れはない。土坑底面には粘土が貼られていたが、断ち割りを行っていないため粘土層の厚さなどは不明である。底面の粘土貼りは、水を溜める目的で貼られたものと考えられる。このこととゆりかす・砂の堆積を考え合わせると、この土坑には水が溜められて、比重選鉱作業に使用されたものと思われる。

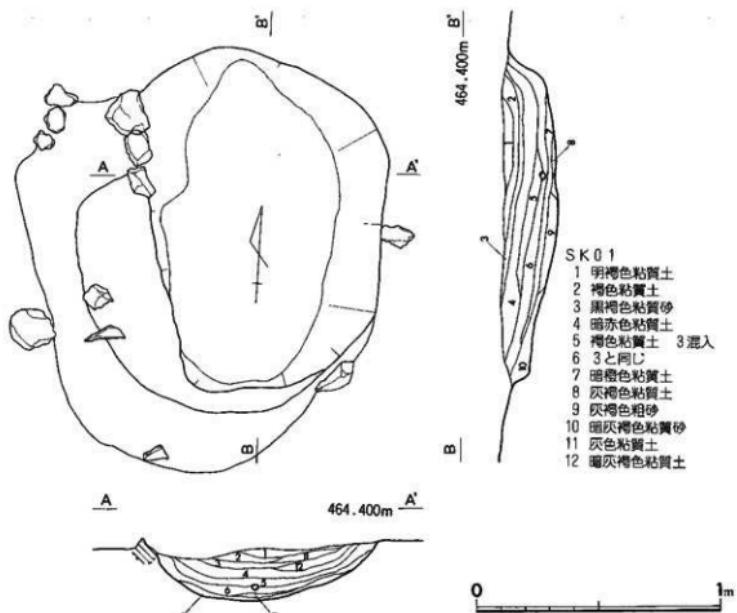
第74図は、無文銭が埋蔵されていた小土坑の実測図である。位置はF22グリッド南側、SB10の内側になり、周辺には幾つかピットが存在する。小土坑は、SB10の土間面と思われる暗黄白色の粘土面に掘り込んで作られていた。平面形は長軸約13cm、短軸約9cmの不整形で、深さは約5cmである。無文銭は土坑内に2列に並んであって、中国銭などを全く含まない構成であった。出土した時点では錢貨が棒状に密着した状態であったが、取り上げの際、幾つかの固まりに分かれた状態となっている。取り上げ後の観察では、錢貨をつなぎ紐やその痕跡は認められなかった。

なお、小土坑の存在を確認できたときには、かなりの枚数が上層の明褐色土層からの出土として取り上げられた後であった。したがって、各列の正確な枚数や元來の埋蔵状況などは不明であり、実測図は小土坑を検出後の状況である。

小土坑内から、陶磁器等の共伴遺物の出土はなかった。SB10では他に表土(明褐色土層)から熙寧元寶・永樂通寶・寛永通寶などが出土している。これらの錢貨は流れ込み等の理由により同一層から出土したものであるから、小土坑の時期を決定するものではない。したがって無文銭が埋蔵された小土坑の時期は、SB10の時期とほぼ同じで、近世前期と考えられる。



第72図 藤田地区SB10実測図(1/80)



以上SB10で検出された遺構について記述してきた。科学調査の試料分析によれば、SB10内採取の土で、銀精錬工程で必要な鉛を比較的多く含むものがあることが判明した。また、ゆりかすや砂が堆積した土坑は、比重運搬作業の土坑とみられる。よってSB10は銀精錬作業を行っていた施設と考えられる。

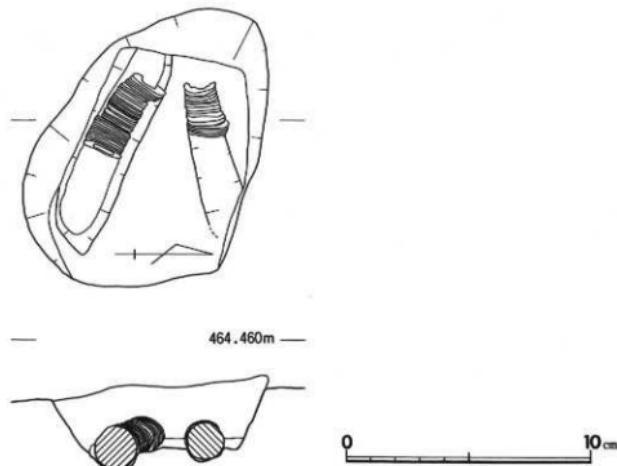
SB09・10出土遺物

第74図は、SB09・10の出土遺物実測図である。2・3・6・8・9・16がSB09から、それ以外がSB10から出土した。7・11・12・13・18は、SB10の遺構面精査中に出土した。

2は全面に施釉された李朝系の陶器皿である。口径13.8cm、器高4.4cmを測る。6は肥前系磁器碗で、高台内側に砂がわずかに付着している。推定で口径11.2cm、器高7.0cmのものである。3・8・9は肥前系陶器皿で、3は底径8.0cm、8は底径5.0cm、9は底径4.8cmを測り、3・8の見込には砂

目積みの痕跡が残る。16は土師質土器の小皿で、口径10.8cm、器高2.2cmのもので、底部に回転糸切り痕が残る。

1・7は唐津焼の陶器皿で、1は口径10.8cm、器高3.0cm、7は口径13.2cm、器高3.5cmのもので、7は見込に砂目積みの痕跡が残る。4・5は共に肥前系の陶器で、4は直径11.1cmを測り、擬宝珠状のつまみをもち、蓋の底には回転糸切り痕が残る。5は蓋の口縁部で、推定で口径21.0cmのものである。10は肥前系陶器碗で、全面に施釉され黄白色を呈する。口径11.1cm、器高8.4cmを測る。石銀藤田地区的調査では出土数の多いものである。11・13・14は伊万里焼の磁器皿である。11は口径9.8cm、器高2.2cmのもので、見込には直線を基調とした文様が描かれている。13・14は同種の皿であり、13は底径6.0cmで草花文が描かれ、14は推定で口径13.3cm、器高3.3cmで梅花文が描かれている。



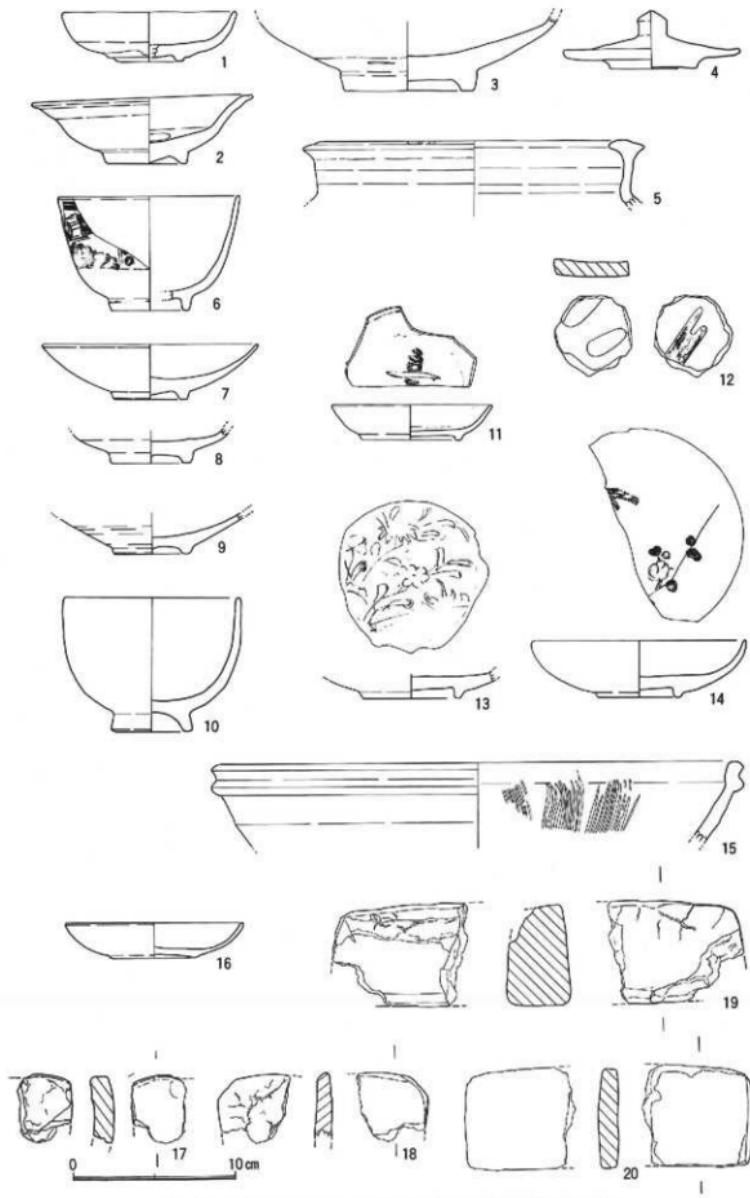
第74図 藤田地区S B 1 0 錢貨出土状況実測図 (1/2)

12は陶器を打ち欠いて円形にしたものである。この用途については不明であるが石銀地区においては10個体以上が出土している。富田川河床遺跡では多数出土していることが報告されている。15は唐津系の擂鉢で、推定で口径32.7cmのもので、9条を1単位とする擂り目が施されている。

17～20は「土道具」といわれるもので、精錬炉の周囲に立て掛けたとされている。粘土を成形後素焼きした土製品である。19は幅6.3cm、厚さ4.0cmと厚く、片面を除く3面にカラミ状の溶融物が付着している。20は厚さ1.2cmを測り、片面にカラミ状の溶融物が付着している。

これらの遺物の時期は、17世紀はじめにさかのぼるものもあるが、およそ17世紀から18世紀前半の範囲におさまるものとみられる。石見銀山で記された19世紀の技術書によれば、この「土道具」は「ねこ」と呼ばれ、炉の周囲を吹子の羽口が取

り付く部分以外に立て掛けたとある。使用目的についてふれたものはないが、吹子羽口からの送風を受け、炉内の環境を保つ働きをしたと推測される。



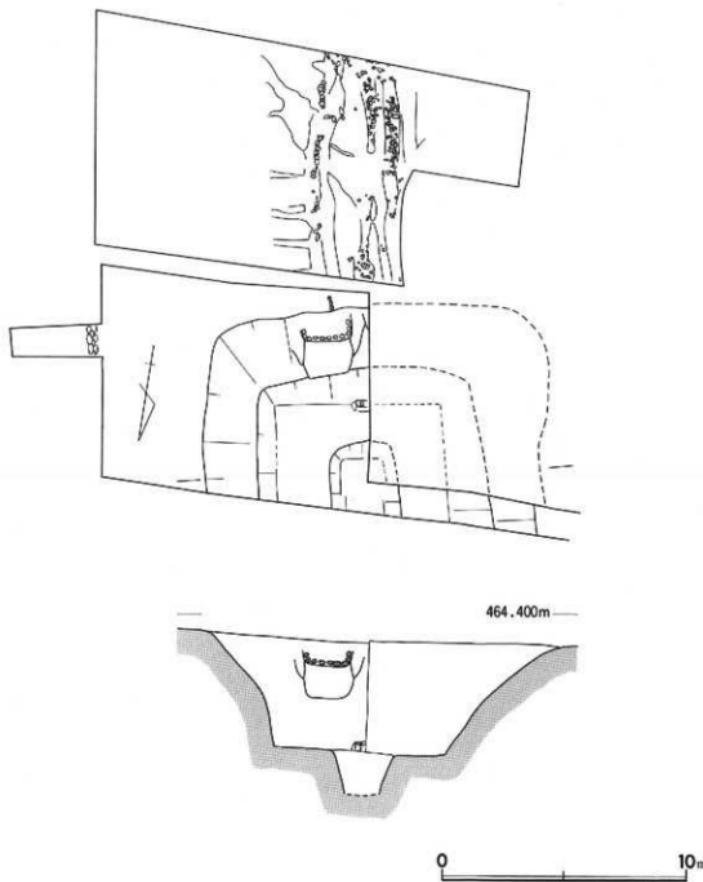
第75図 藤田地区SB 09・10出土遺物実測図(1/3)

(7) 窠地・溝状遺構

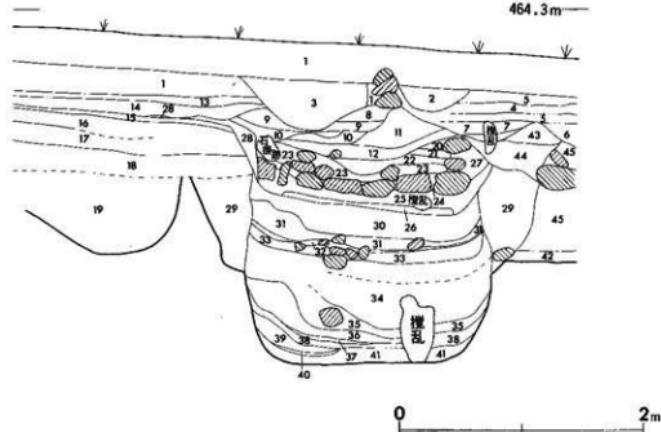
窠地

調査区北端に窠地を横断する形でのトレンチ調査を実施したところ、窠地は二段構造であることが判明した。その後南東部の4分の1を平面的に下げ、遺構検出を試みた結果、南北方向に主軸を持つ大規模な遺構であることが判明した。上部は

崩壊しているため正確な規模は不明であるが、下半部の壁面が同様な角度で立ち上がるものと仮定すれば、東西幅は14m前後を測るものと推定される。南北長については、調査区外の地形も考慮して、約15mを測るものと推定している。上段部の底面は平坦に加工されており、東西幅は7mと推定される。またこの面の北端中央部には上面に小



第76図 藤田地区くぼ地実測図（1/200）



溝状遺構

- 1 黒褐色土 やわらかい、石をほとんど含まず、耕作土か?
 2 茶褐色砂質土 溝壁埋土
 3 1層と同様
 4 赤褐色砂 ゆりかすず、固くしまる
 5 赤褐色ズレ層 厚3cm以下
 6 黒褐色砂（ゆりかす）と桃色粘土の互層
 下部はマンゴンで固くしまる
 7 6層と同じ
 8 明黄色砂質粘土
 9 桃色粘土 黒褐色砂（ゆりかす）との互層
 10 9層と同じ
 11 9層と同じ
 12 黑褐色砂（ゆりかす）
 13 桃色粘土 ゆりかす砂層はさむ
 14 桃色粘土、ゆりかす・ズリ（厚3cm以下）の互層
 15 灰色砂質粘土 固くしまる
 16 褐灰色砂質粘土 黄色粘土・白色粒子・炭化物・含む、固くしまる
 17 16層と同じ
 18 16層と同じ
 19 16層と同じ 小窓多く含む
 20 黑褐色砂質粘土 桃色粘土・白色粒子混入、固くしまる
 21 20層と同じ
 22 20層と同じ
- 23 黒褐色砂質土
 24 黄色粘土 固くしまる
 25 褐灰色粘土 上部に一部砂層
 26 灰色粘土 木質・腐殖質・板根跡か?
 27 24層と同じか? 竹根でやや不明瞭、固くしまる
 28 黄色粘土 固くしまる
 29 黄色粘土と灰色粘土の混入層 固くしまる
 30 黑褐色砂質粘土・白色粒子多く含む、埋め土か?
 31 褐灰色粘土と幽灰色粘土の互層
 32 灰黄色粘土
 33 黄灰色粘土とゆりかすの互層
 34 黄色粘土と薄葉灰砂粘土・ゆりかすの互層
 35 褐灰色粘土 黑褐色ゆりかす砂層はさむ
 36 37層と42層の互層
 37 黑褐色粗砂 ゆりかすか?
 38 明褐色粘土
 39 桃色粘土 ゆりかす層はさむ
 40 37層と同じ
 41 桃色粘土 層はさむ
 42 灰色砂質粘土と黄色粘土の混入層 砂礫混入
 43 明黄色砂質粘土 固くしまる
 44 黑褐色砂質粘土 固くしまる
 45 灰色砂質粘土 壊き心、固くしまる

第77図 藤田地区大溝実測図 (1/40)

孔を持つ箱形の造り出し部分が認められ、ほぼ主軸ラインに位置する。下段部は底面付近が非常に硬化しており、完全に掘りきることはできなかつたが、上端で幅3m、下端で2m前後を測る。遺物は堆積土中からわずかに陶器・古錢（寛永通宝）等が出土しているが、遺構の時期を決定するものとは言えなかった。

溝状遺構

地形状遺構の南側壁面、及び 区南半部の調査区では複数の溝を検出している。このうち南半部

で検出された最上層の溝は、耕作によるものと判断しており、これに関連する石列も確認された。下層で検出された溝は断面観察により、整地面を伴っていることが判明しており、周辺部の造成と共に溝が造り直されているものと考えている。また、崖地壁面で検出されたもので最も大型のものは、旧地形で谷底にあたる位置に走っているものと考えられ、規模は幅2m、深さ1.5m以上を測る。この本線水路とも言うべき溝は少なくとも2回の造り替えが行われており、2回目には大型の

石材によって底と側壁を構築している。また床面石敷の下には厚さ4cmの有機質部(26層)が認められ、板材による施設が存在していたものと考えている。

各溝の堆積物はそれぞれ異なっており、シルト～砂粒～小礫状の様々なユリカス・ズリで構成されているように観察された。また、大溝の堆積物(34から41層)はほとんどがユリカスと考えられる水性堆積であり、溝端が(少なくともある時期には)遮断された状態であったと考えるのが自然であろう。この点は、実際にサブトレンチ部分で遮断物らしき板材痕跡を確認している。

これらの溝の設置開始時期は、少なくとも戦国期にまで遡るものと推定され、18世紀には畠地として利用されていたものと考えている。

くぼ地出土遺物

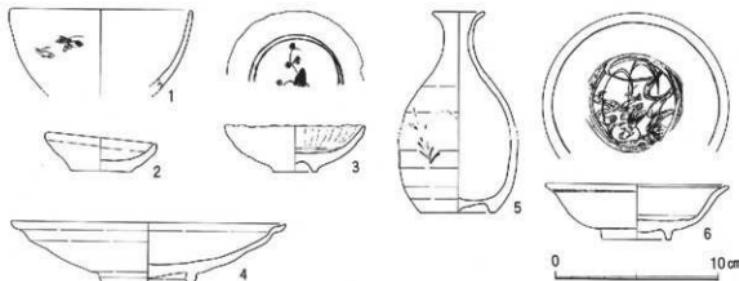
第78図のうち、1～3はくぼ地南側部分から、4～6はくぼ地から出土している。

1は肥前系磁器碗で、外面に呂須で淡く文様が描かれる。2は土師器の皿で、口径6.7cmと小さいものである。底部に回転糸切り痕が残る。3はくぼ地南側に設定したサブトレンチ下層より出土したもので、李朝系の可能性がある。口縁部近くで段をつくり折り返す「溝縁皿」である。見込には胎土目積み痕跡が見られ、高台疊付を除き全面に施釉されている。

4は肥前系磁器稜花皿である。見込に2条の圓線がめぐり、その内側に草花文が描かれる。口径に対し高台径は比較的小さい。5はくぼ地の肩に存在したピットより出土した。体部外面に草文が描かれている。頸部内面まで施釉され、底部周辺には砂が熔着している。6はくぼ地底面付近から出土したもので、中国南方系と思われる青花皿である。口縁部は緩やかに外反し、全体に淡い灰緑色を呈する。高台内は無釉である。

(8) 墓区

VII区は藤田地区の東100mにある丘陵尾根上に位置する調査区である。この尾根上には東に向かってテラスが連続してつながり、そのうち最も広いテラスで、任意に東西方向に2m×5mのトレーニチを設定し調査を行った。第79図がVII区の造構配置図である。表土と浅い堆積土を除去すると、平坦に加工したと考えられる地山面とピットが検出された。これらのピットのうちいくつかは掘り方や形状から柱穴と観察されるものやピット内に砾が埋設された集石造構が2基ある。検出した柱穴の配置からは掘立柱建物跡を復原することはトレーニチ調査のため不可能であるが、何度かの建替えがあったと推測される。2基の集石造構は、1号が一辺45cm深さ20cmを測る隅丸方形のピットの中に砾が埋められている。1号は長径45cm深さ20cm



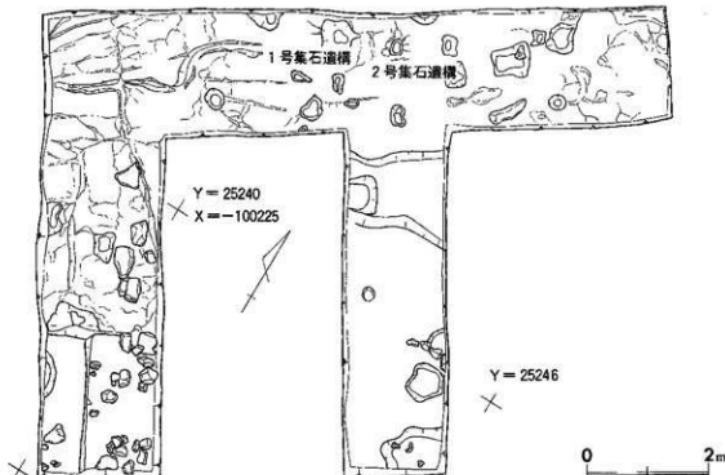
第78図 くぼ地出土遺物実測図 (1/3)

を測る梢円形のピットの中に1号と同じように、地山岩盤の跡が埋められている。

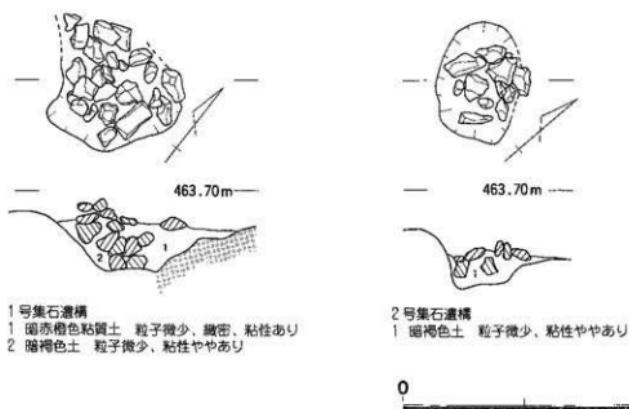
トレンチ内西側では、地山岩盤が溝状に穿たれた跡が認められ、幅20cm前後長さ1.5mで東西方向から南に曲がるように加工されたものや、東西と南北方向に岩盤の摺理の方向を穿ったものが數

本ある。後者は石銀田地区で観察されたマンガソが黒色の脈状になったものとは異なり、鉛脈とは考えられない。

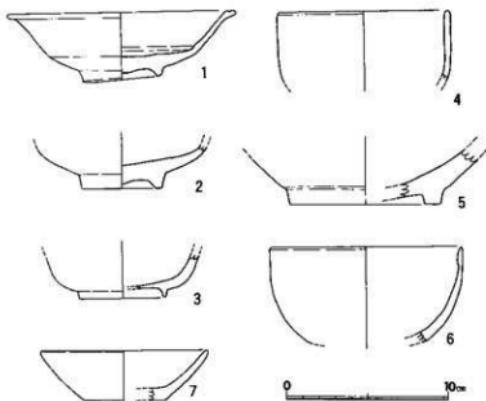
トレンチ内で検出したピット群と岩盤を加工した造構の広がりを確認するために、南に2本のトレンチを設定し、部分的に拡張し調査を行った。



第79図 藤田地区VII区遺構実測図 (1/80)



第80図 藤田地区VII区集石造構実測図 (1/20)



第81図 藤田地区VII区出土遺物実測図(1/3)

西トレンチでは南側で礎石と考えられる平坦な石とピットの一部を検出した。この造構面は表面が締まり、炭化物と焼土が出土したことから作業面になると推測される。この造構面の下層の様子を掘るために、部分的に掘り下げた。下層では岩盤がほぼ60cmに垂直に加工され、先に検出した岩盤面より一段低く岩盤を加工し平坦面を造っていることが判明し、その上に加工された、礎石と考えられる石が数個検出され、さらに南で岩盤の平坦面は造成した整地面に繋がっている。この整地した面では、小規模ながら上面が平坦な石や礎を検出している。検出状況から上層と同じように、造構面になると考えられる。

東トレンチ内では、幅1.2~1.6m、深さ20cmの溝状造構とピットを検出している。これらの造構を検出したレベルは西トレンチの下層の造構面に繋がるものと推測される。

VII区の検出造構は、掘立柱建物や礎石建物の一部になると考えられる。調査区の5m南には、坑口があり周囲にズリの堆積が認められることから、採鉱に関連する施設の可能性はある。ただ、わずかにカラミも出土しており、ここで製錬作業が行われたことを否定できない。造構の年代につ

いては西トレンチの下層の造構面から李朝系陶器の皿(第81図-1)が出土しており、概ねの指標と考えられる。

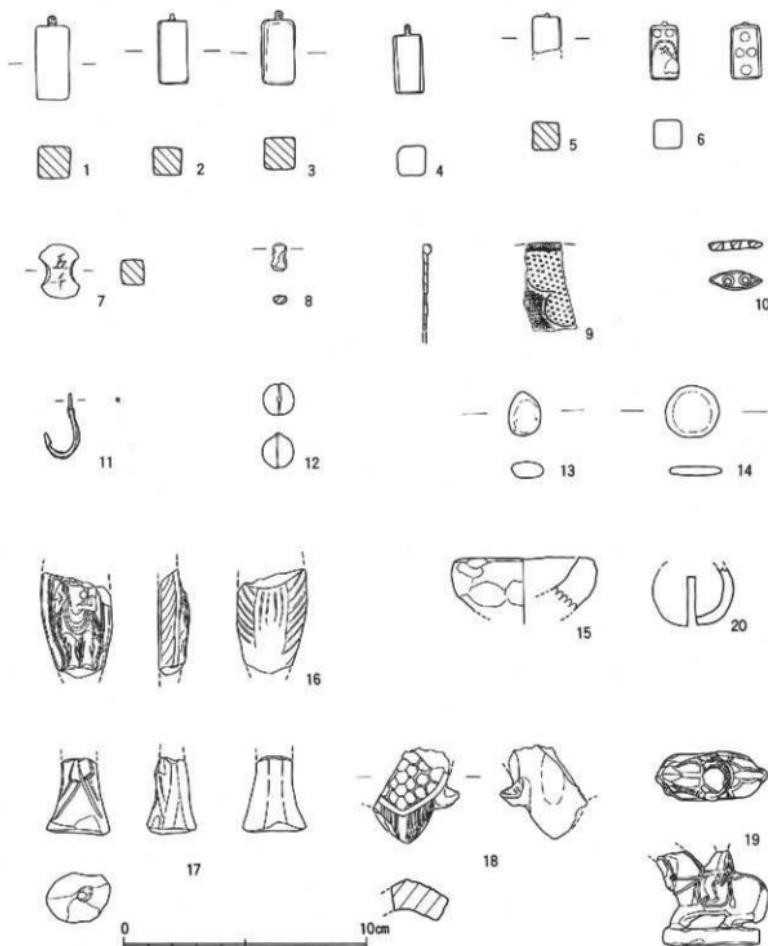
第81図はVII区の出土遺物である。1は李朝系陶器の皿で、内外面とも施釉され明灰緑色を呈す。内面に砂目当ての痕跡があり、高台置付には目当ての砂が培着している。口径13.8cm、器高4.3cmである。2~5は肥前系陶器で、2、3は碗の底部で2は灰色、3は暗黄緑色の釉がかかる。4は碗の口縁部から胴部にかけての破片で明灰緑色の釉がかかる。5は鉢の底部で、高台径9.2cmを測る大型のものである。6は肥前系磁器の碗で、口縁部から胴部の破片で、外表面は淡緑色、内面は無色の釉薬を施釉する。7は土師質土器の皿で暗黄白色を呈し、体部が直線的に開くものである。口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。遺物の年代は、1は16世紀末から17世紀初頭、2~7は江戸期のものである。

(9) その他の遺物

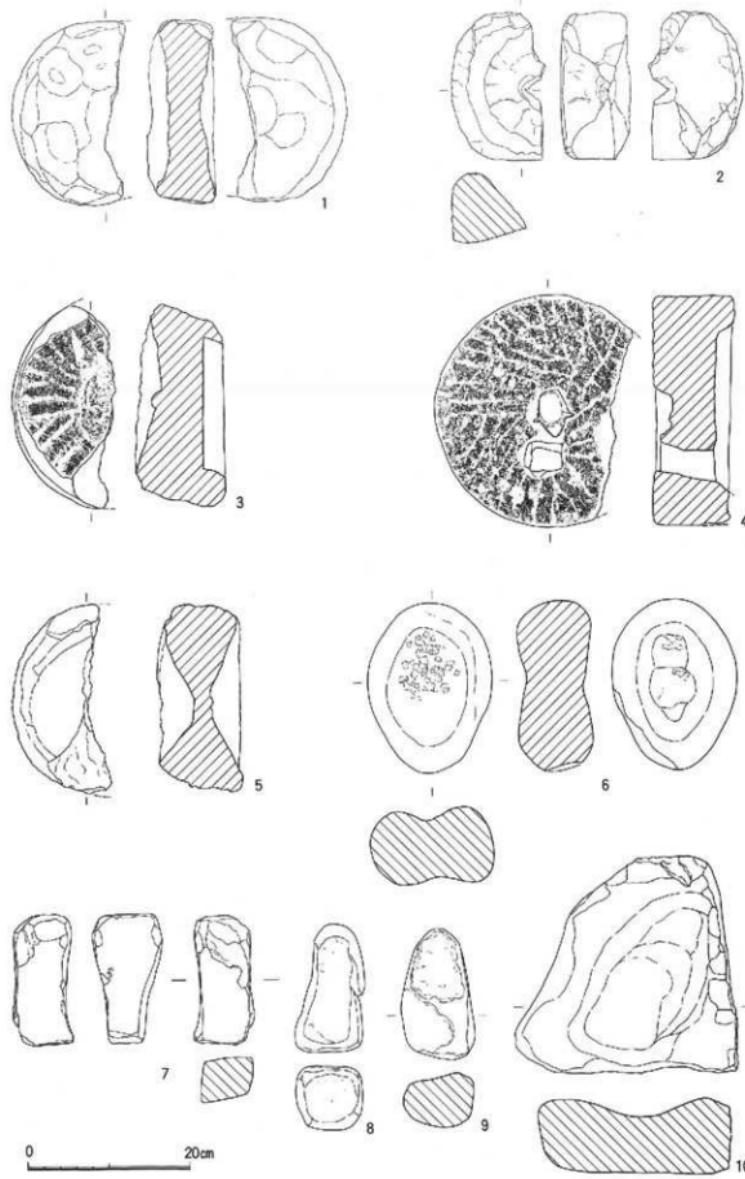
第82図1~8は竿秤の分銅である。1は、直方体で一辺が1.3cm、長さ3.1cm、重量40.48g(10匁8分)である。頂部に吊り手が付く。2は、一辺

1.1cm、残存する長さ2.9cm、重量27.94g(7匁4分5厘)である。3は、一辺1.3cm、長さ3.1cm、重量35.8g(9匁5分4厘6毛)である。4は、一辺1.2cm、長さ2.85cm、重量25.84g(6匁8分9厘1毛)を測る。5は分銅の下部が欠損するものであ

る。一辺1.1cm、残存長1.6cmを測る。6は、一辺1.1cm、長さ2.35cm、重量22.92g(6匁1分1厘2毛)を測る。側面は対になるように刻印が刻まれており、一対は径3.5mmの円形が4つ、もう一対は上部に円形が2つと下部に印判状に「大」の字



第82図 藤田地区出土金属製品・土製品実測図(1/2)

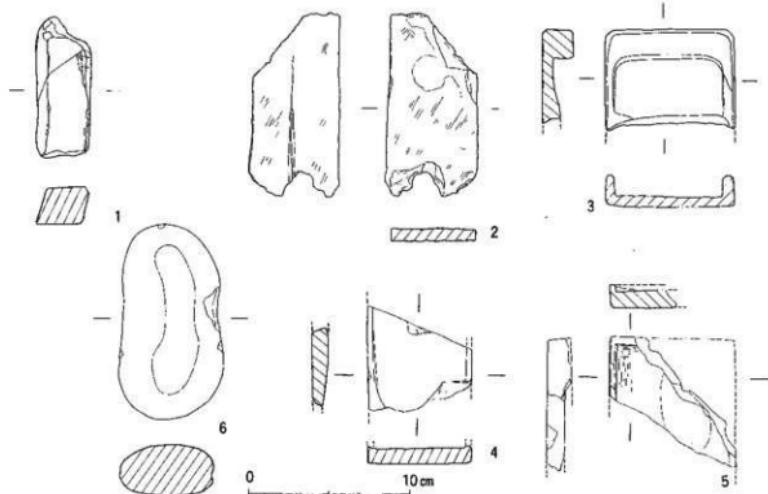


第83図 藤田地区出土石製品実測図 (1) (1/6)

円形の線の中に刻まれている。7は天秤秤の彫形の錐で片面に「五□(矢)」と刻まれている。長さ2.2cm、重量40.48gである。8も小形の彫形の錐で長さ1.2cmを測る。9は和鏡の破片である。10は、青銅製の紐の留め金具と考えられる。径2.0mmの穴が2箇所開いている。11は鉄製釘であり、長さ2.6cmで返しが作られている。12は土製の鉄砲玉と思われ中央に型の合わせ目がみられる。13、14は碁石と思われる小石である。扁平で表面が極めて滑らかに作られている。13が白、14が黒色の碁石である。15は坩堝と思われるもので口径5.8cm、器高2.3cm以上の中形のものである。16~19は型作りの泥人形である。16は仏像と思われ、光背に尊光、片手に接物を持っている。衣の両端には紐が延びており、背中にも線が刻まれている。17も仏像と思われるもので頭部を欠いている。衣は左を前に重ねている。18は亀の下分で右後足と甲、尻尾を表現している。甲には、六角形の模様で表現されている。腹部はやや窪めている。19は

馬に人物が騎乗している。馬には馬具として、日常騎行用の水平鞍装具が表現されている。人が鞍に股がり足が縋にかかり、臂から手繩がつながっている。樹は円形鏡地に十字文透しと思われ、舌長燈・鞍橋・障泥が表現される。胸懸・尻懸からは縄が下がっている。馬は立てがみ、尻尾が表現されている。20は鉢の半分の破片と思われる、鉢口が切り込まれている。

第83図は石器である。1は臼で全体の1/2が残っている。使用により中央が磨滅し円錐状に窪んでいる。直径22.5cmを測る。2も臼で長辺18.2cmを測り、中央部が円錐状に窪んでいる。特に片面からの使用が著しい。5も臼で径23.3cmを測り、中央部が円錐状に窪んでいる。3は下部が径16.0cm、深さ25cm窪んでいる。表面に1.5cm間隔の握り目が刻まれている。4は穀臼で下部に抉りがあり、表面中央に軸受の穴がありその横に法形の穴が開けられている。6は摺り石で表面に敲打と擦り痕が残っている。8、9は臼の上で鉱石を碎



第84図 藤田地区出土石製品実測図(2)(1/3)

くための叩き石である。8は敲打面が使用により平坦になっている。10は要石で建物の床面に据えられていたようで、片面のみ使用痕が残り産んでいる。7は、砥石で3面が使用により擦り減っている。第84図1は砥石で四側面が使用されている。2は平坦で厚さの薄い砥石である。両面共にしようされ、片面には溝状の使用痕が残る。3～5は観である。3は上部、陸の部分が残っており、幅6.5cmをはかる。4は中央部分の破片である。5は下部、陸の部分の破片である。6は擦り石で側面がやや産み、表面が使用により磨滅している。

00 出土銭貨

ここでは、平成9・10年度調査時の出土銭貨について記述する。出土銭貨には、大別して中国銭・日本銭・無文銭がある。銭文を判読できなかったものについては、不明銭とした。なお中国銭には、中国製の本銭と日本国内で模倣し铸造した模銭銭とがあるが、その判別は成しえなかった。

中国銭には、熙寧元寶・聖宋元寶・政和通寶といった北宋銭と、洪武通寶・永樂通寶などの明銭がある。第85図8は開元通寶と思われる。遺構に伴うものとして、4の洪武通寶がD21グリッド井戸跡埋土より出土している。またD18・D19グリッドの各トレンチ内から洪武通寶・永樂通寶が何点か出土しており、これらは下層の遺構面に伴う可能性もある。

日本銭はすべて寛永通寶銅一文銭であり、計31点出土した。寛永通寶には寛永13年(1636)初鋤の「古寛永」と、寛文8年(1668)以降各地で鋤造された「新寛永」がある。出土した31枚のうち、新古不明の2枚を除いて「古寛永」が大半を占める。遺構や遺構面に伴って出土した「古寛永」も多い。これは石銀藤田地区の時期・変遷を検討する上で注目すべき点と思われる。24は背面に「文」字が入れられており、寛文8年に江戸亀戸で鋤造された「文銭」である。

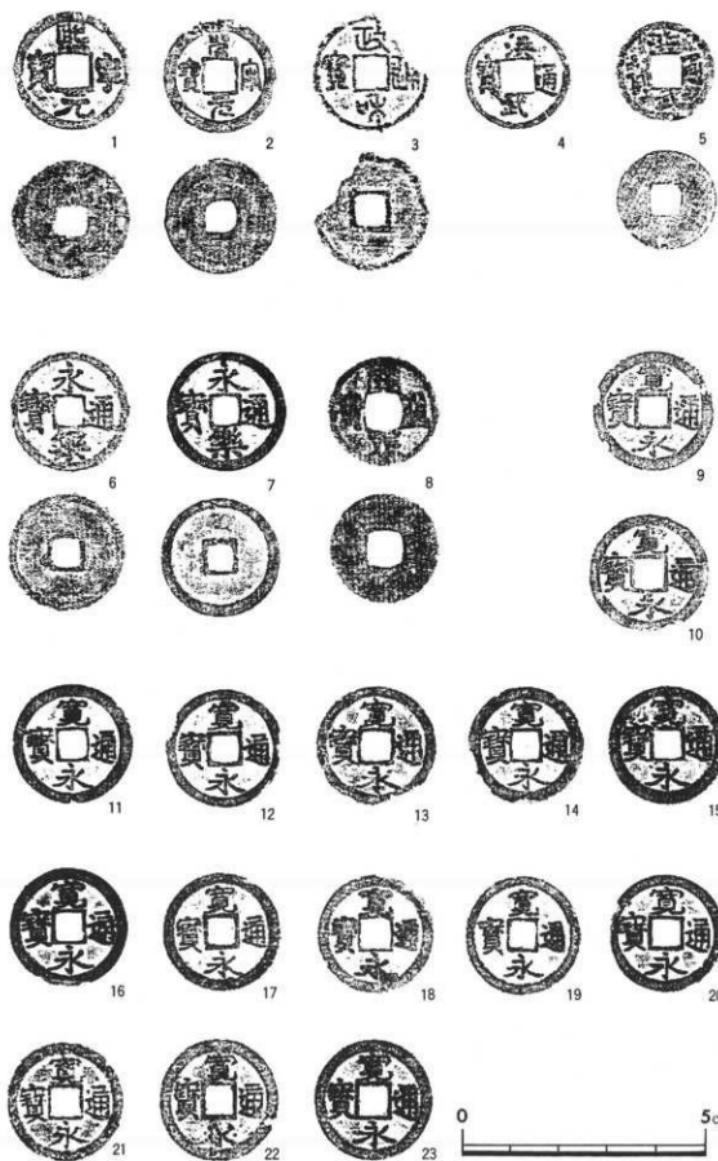
無文銭は、薄く銭文が無く平坦であるといった

特徴を持つ。これには第86図52のように鉄貨の形態を残すもの(孔が四角)と、37のようにリング状のもの(孔が丸)があるが、両者の中間にあたるものも数多く存在する。したがって時間的制約もあり、細かな分類は行わなかった。無文銭の出土点数は中国銭・日本銭の合計を上まわる。ほとんどは坑口前トレンチ下層とSB10内小土坑から出土した。表・拓影は一部を掲載した。

坑口前トレンチの灰色粘土層は、木製品や種子・獸骨などの有機質遺物を含む層であった。この層の土を洗浄したところ、完形のものだけで数十点の無文銭が検出され、点数はさらに増加すると思われる。この層出土の無文銭の傾向として、リング状のものが多いように見受けられる。共伴する遺物から、時期は16世紀末以前と考えられる。

47から51は、SB10内小土坑から出土した無文銭である。A・B2列に並んでいた無文銭は取り上げ時に幾つかの固まりに分かれてしまい、この5枚が1枚ずつ分離した状態になった。A列の中には、銭貨に近い形状の47とリング状の50が混在している。B列も同様の状況である。52から61は小土坑上層の明褐色土層出土として取り上げられているが、出土位置も近く小土坑の無文銭の一部とみられるものである。これらでも銭貨に近い形状のものとリング状のものがあり、両者が特に区別されず扱われたことがうかがえる。小土坑出土の無文銭の点数は、A列が25点、B列が41点、明褐色土層出土分が43点で、完形のものは109点になる。他に破片12点があるので、総点数は121点である。ただし現在も付着し固まりとなっているものも肉眼で数えたため、点数が若干上下する可能性がある。

島根県内で無文銭が出土した遺跡には、広瀬町富田川河床遺跡・出雲市姫原西遺跡・仁摩町坂灘遺跡がある。また、大田市南八幡宮には戦国期に六十六部郷親王が納経した鉄塔が残っており、の中に中国銭や多数の無文銭が納められていた。



第85図 藤田地区出土錢貨拓影 (1)



第86図 藤田地区出土錢貨拓影 (2)

中 国 錢

番号	拓影番号	地区・グリット	出 土 点	種 別	初期年	状態	最小直径・最大直径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
1	1	F22		漢半元寶	1091	光形	24.4-24.8	1.5	2.7	
2	2	第1攝集		聖宋元寶	1101	光形	23.6-23.8	1.5	3.2	
3	3	D18	東宮トレンチ・底面下/褐色砂土上	政和通寶	1111	破片	24.4-24.5	1.5	1.87	
4	4	D21	井ノ跡 No.1	洪武通寶	1368	破片	21.6	1.2	1.1	
5	5	D19	杭口前トレンチ上層	洪武通寶	1368	完形	20.1-20.4	0.6	0.76	
6		D19	杭口前トレンチ上層	洪武通寶	1368	破片	19.0-19.2	0.9	0.89	
7		D19+K19	杭口前トレンチ	洪武通寶	1368	破片			0.74	
8		D20	表土・ズリ山	洪武通寶	1368	破片		1	0.77	
9	6	残		永樂通寶	1406	完形	24.7-24.8	1.5	2.63	
10	7	F22	灰土	永樂通寶	1406	完形	24.7-24.9	1.4	2.4	
11		E20+P21	E20+G21開拓中	永樂通寶	1406	破片	23.7	1.3	1.66	
12	8	D19+T19	杭口前トレンチ	開元通寶?		完形	22.5-23.6	0.7	1.44	
13		D20	1号墳壁跡	不明		破片	24.7-25.1	1.4	2.54	

日 本 錢

番号	拓影番号	地区・グリット	出 土 点	種 別	初期年	状態	最小直径・最大直径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
14	9	D20	SD01/灰色土	古賀永	1636	光形	24.6-24.7	1.7	2.98	
15	10	D19	杭口前トレンチ上層	古賀永	1636	完形	24.4	1.5	2.57	
16	11	D20	灰土	古賀永	1636	完形	24.6-24.7	1.2	2.54	
17	12	F19	鉄張り・漆喰附	古賀永	1636	完形	24.3-24.4	1.3	2.27	
18	13	E19	1号墳地蔵ベルト	古賀永	1636	完形	24.6-24.7	1.3	2.15	
19	14	E19	第1道所山	古賀永	1636	完形	24.2-24.3	1.4	2.75	
20	15	E20	1号墳地蔵SK 0.3	古賀永	1636	完形	24.5-24.6	1.5	3.19	
21	16	E20	第1道構内	古賀永	1636	完形	24.3-24.4	1.3	3.06	
22	17	E20	第1道側面	古賀永	1636	完形	24.8-24.9	1.6	2.97	
23	18	E20	南東平坦地	古賀永	1636	完形	24.3-24.4	1.4	2.88	
24	19	W19	赤褐色土	古賀永	1636	完形	24.5-24.6	1.7	2.85	
25	20	F19	道跡上	古賀永	1636	完形	24	1.2	2.67	
26	21	I20		古賀永	1636	完形	24.2-24.5	1.5	3.28	
27	22	F20+P21	表土	古賀永	1636	完形	25.0-25.1	1.4	2.67	
28	23	D20	1号建物跡/猪土中	古賀永	1636	完形	24.7-24.8	1.5	3.76	
29		D20	猪土	古賀永	1636	完形	24.3	1.3	3.37	
30		V8	猪土中	古賀永	1636	完形	26.1	1.2	2.61	
31		H	猪土中	古賀永	1636	完形	23.4	1.1	2.01	
32		E	猪土中	古賀永	1636	完形	25	1.2	2.58	
33		E20	SD01裏	古賀永	1636	破片		1.4	1.01	
34		F19		古賀永	1636	破片	23.9-24.0	1.5	2.34	
35		F20		古賀永	1636	破片	24.3	1.1	0.69	
36		I20		古賀永	1636	破片	24.7-24.8	1.2	1.62	
37		F20+P21	構台中	古賀永	1636	破片	24.5	1.3	1.05	
38	24	F22	表土	新賀永	1699	完形	25.0-25.2	1.5	2.58	裏面「文」字
39	25	C18	山側斜面	新賀永	1698	完形	22.5-22.8	1.1	1.88	*
40	26	T20	表土	新賀永	1698	完形	33.3-33.5	1.1	2.47	
41		T20	猪土	新賀永	1698	完形	23.3	1.2	2.68	
42		D20	猪土	新賀永	1698	完形	23.2-23.4	1	2.34	
43		E20	1号建物跡/赤褐色土	新賀永(新古不明)		破片		1.3	1.66	
44		I20+J21	表土	新賀永(新古不明)		破片		1.1	0.4	

第1表 藤田地区出土錢貨一覧表 (1)

不 明 錢

番号	撮影番号	地区・グリット	出 土 地 点	種 別	切跡年	伏部	最小底径・最大底径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
45		D19・E19	杭口前レンチ	不明	光形	20.1	0.7	0.98		
46		F20・F21	表土	不明	破片	23.5-23.6	1.1	1.43		
47		E19	1号植物ベルト	不明	破片			2.06		
48		E19	第3面壁地盤上	不明	破片			1.63		
49		E19	第3面壁地盤上	不明	破片			0.49		
50		E20	第1邊界面	不明	破片			0.77		
51		F21	検査中	不明	破片			0.33		

無 文 錢

番号	撮影番号	地区・グリット	出 土 地 点	種 別	切跡年	状態	最小底径・最大底径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
52	27	D19	杭口前レンチ／灰色土	無文銭	光形	14.4-14.7	0.8	0.53		
53	28	D19	杭口前レンチ／黒灰色粘土	無文銭	光形	16.7-16.9	0.9	0.45		
54	29	D19	杭口前レンチ／黒灰色粘土	無文銭	光形	12.5-12.6	0.6	0.27		
55	30	D19	杭口前レンチ／黒灰色粘土	無文銭	光形	17.5-18.2	0.7	0.45		
56	31	D19	杭口前レンチ／黒灰色粘土	無文銭	光形	17.2-17.4	1	0.78		
57	32	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	13.9-15.0	0.7	0.42		
58	33	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	17.2-17.8	0.7	0.85		
59	34	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	11.9-12.9	0.6	0.17		
60	35	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	15.0-15.6	0.5	0.24		
61	36	D19	杭口前レンチ／下緑色土	無文銭	光形	16.6-17.0	0.5	0.36		
62	37	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	11.0-11.3	0.5	0.09		
63	38	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	13.4-13.6	0.7	0.14		
64	39	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	15.2-16.0	0.6	0.22		
65	40	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	16.8-17.2	0.6	0.46		
66	41	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	16.3-16.7	0.5	0.38		
67	42	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	15.9-16.5	0.5	0.25		
68	43	D19	杭口前レンチ／灰褐色粘土	無文銭	光形	11.9-12.7	0.9	0.21		
69	44	D19・E19	杭口前レンチ	無文銭	光形	13.8-14.4	0.8	0.3		
70	45	D19・E19	杭口前レンチ	無文銭	光形	14.0-15.7	0.5	0.36		
71	46	V8	第3トレンチ／第2地盤	無文銭	光形	12.6-13.3	0.9	0.18		
72			鉄土中	無文銭	光形	14.5-15.0	0.8	0.18		
73			鉄土中	無文銭	光形	17.2-18.9	0.9	0.51		
74			鉄土中	無文銭	光形	17.0-17.4	0.8	0.43		
75			鉄土	無文銭	光形	11.2-11.8	0.4	0.12		
76	47	F22	縦鉄(鉄A)	無文銭	光形	18.2-18.4	0.9	0.66		
77	48	F22	縦鉄(鉄A)	無文銭	光形	16.5-16.6	0.9	0.44		
78	49	F22	縦鉄(鉄A)	無文銭	光形	17.0-17.2	0.7	0.37		
79	50	F22	縦鉄(鉄A)	無文銭	光形	16.7-17.8	0.8	0.26		
80	51	F22	縦鉄(鉄B)	無文銭	光形	16.2-17.1	0.9	0.42		
81	62	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	17.5-18.0	0.8	0.73	科学分析試料1	
82	63	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	18.1-18.9	1	0.65	科学分析試料2	
83	54	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	17.4-17.9	1	0.65		
84	55	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	18.0-18.3	0.6	0.58		
85	56	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	17.9-18.0	1	0.85		
86	57	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	17.3-17.7	0.8	0.57		
87	58	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	14.3-14.7	1.1	0.49		
88	59	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	17.3-17.6	0.8	0.47		
89	60	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	16.6-16.8	0.7	0.29		
90	61	F22	明褐色土層(縦鉄の一部)	無文銭	光形	16.5-17.2	0.8	0.34		

第1表 藤田地区出土銭貨一覧表(2)

第6章

遺構と遺物の検討

1 町と吹屋の構造

(1) 町割、道・水路と建物の関係

石銀地区の調査は、6年間にわたっておこなってきた。ここでは、建物内の配置を含め町の構造について多少の検討を加えておきたい。

石銀地区的調査前の状況は、テラスが階段状に続いており、抗道跡や井戸跡が確認されていた。また、地元に伝わる「石銀千軒」の伝承から集落の存在が想定されていたところである。調査の結果、露頭掘りと抗道掘りなどの採鉱の跡や、選鉱から精錬までの工程が判る施設が残る吹屋建物跡(製錬所)が検出された。また、これらの建物の道に面した部分は石列で区画され、さらに建物が連続していたと考えられた。石銀地区では、一帯に計画的に造成された町の存在が確認された。

石銀藤田地区では谷の中央を道が通り、その道に面して建物が建てられていた。この道は、藤田地区の南側にある本谷と北の清水谷を結び、分岐して西に延び桟畠谷へとつながっていたと思われる。桟畠谷への道の中程から南へ行くと千賀敷地区となり、ここでも谷の中央に道跡を検出している。さらに千賀敷地区の南には於紅ヶ谷が位置している。道跡は建物の造成に併せ盛り土がされ、溝も造り替えられている。藤田地区で検出した道跡には片側に溝があり、建物からの排水が流れている。これらの溝は藤田地区の北側で検出した搗鉢状の遺構へと続いている。ここでは幅2mの大きな溝の断面を確認している。溝の中には細かな粒子が層状に堆積しており、繊続的に排水が流れているようである。搗鉢状の遺構には、調整池

もしくは鉱石の再回収などの用途が想定される。

千賀敷地区において検出したSB02は、露頭掘りの跡を埋めて建物敷地を造成している。露頭掘りの時期は16世紀後半で、建物跡は17世紀初頭と石銀地区でも古い段階のものである。このことから、当初は銀の鉱脈を探し谷筋の露頭から採掘を開始し、後に抗道掘りの近くに吹屋建物が建てられたと考えられる。藤田地区においてSB06前の道跡を断ち切ったところ、下層から中国製染付磁器片、美濃系天目碗、備前系搗鉢が出土し、時期は16世紀後半と考えられた。更に下層は遺物・石を含まない土層であり自然堆積と考えられた。このことから、石銀地区的町の形成は16世紀後半から始まり、上層建物跡の18世紀代に至るまで道の位置は多少の移動はあるものの谷の中央に位置し、町割に大きな変化はなかったことがわかる。

文献史料に石銀の名が登場するのは、天正9年(1581)、「石見銀山納所高注文」(『毛利家文書』)に「代八十貫いし金口役」と書かれている。藤田地区と千賀敷地区の間の谷は発掘調査を行っていないが、平坦地に石列、井戸、抗道が確認され、町が広がっていたと考えられる。また、この町を見下せる周囲の丘陵上と藤田地区西側のテラス上には墓地が点在している。石造物調査により年号が判明したものは、古いもので慶長年間(1596~1615)、新しいもので天明年間(1781~1789)であった。これらの墓地と町の存続年代はほぼ同一と思われ、墓地のまとまりの近くには寺も存在していたようである。

石銀の銀山町としての景観は、谷底の道の両側に吹屋建物が連なり、丘陵上に墓地と寺が位置す

る。この石銀から北を望むと遠く日本海を見渡せる場所である。

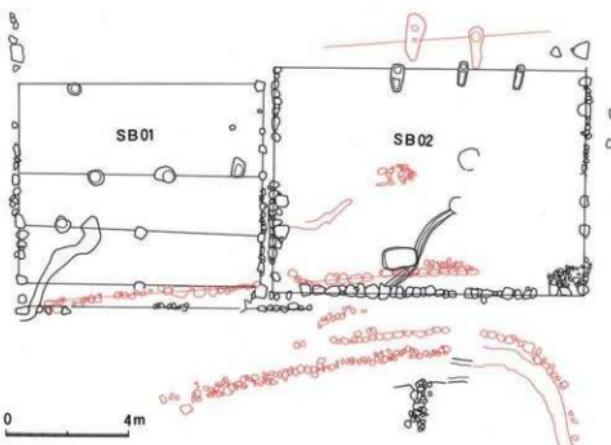
(2) 吹屋の規模・構造

藤田地区で検出したSB01は石列で区画された吹屋建物である。建物区画として確認できるのは、第1、第2造構面である。第1造構面の石列は、道との境で5.5m残り、推定される間口は11mである。奥側には掘立柱の柱穴が2基確認されている。建物の前の道幅は2mで、反対側に溝がある。第2造構面の建物の前の道も幅2mを測り、古い段階の方が道が西側へ寄っている。建物の敷地は間口が5間（約10m）、奥行側に礎石列があり、奥側に掘立柱の柱穴が3基確認されている。第1、第2造構面では選鉱施設が前側にある一方、第3造構面では炉跡が道寄りに位置し、時期により施設の配置に変化があるようである。SB01において造構面は、トレンチの調査により鉄錠が出土した面（第8面）を含め合計9面が確認された。第7造構面の礎石列の方向性は上層と同様であり、地割に大きな変化は認められない。

SB02では、建物の区画と内部の施設が良く

残っていた。第1造構面では道との境の石列のみ残存する。第2造構面では道側に礎石が3基確認された。礎石間の距離4m、奥行側に礎石列があり、礎石間の距離は1m(半間)である。確認できた建物内の施設配置をみると、選鉱施設の溝が北西コーナー、要石が前側中央に位置し、炉跡は建物の奥側に配置されている。建物の床面は炉跡付近から道側へ向けて傾斜している。この建物の後方では井戸、比重選鉱の土壌があるが、施設の無い空間があり、選鉱、精練以外の作業がおこなわれたスペースと考えられる。この空間は、SB01の後から坑口へと続いている。千畳敷地区においてもSB01、SB02の後方斜面との間に空間があり、SB02の後には坑道が位置することから藤田地区と同様の状況である。石銀で検出された建物の礎石間距離は2mで、1間が6尺5寸（1.97m）となる。これは、現在の大森の町に残る江戸時代の建物と同単位である。

藤田地区SB01、02ともに間口が4～5間と広いものである。同時期の広瀬町富田川河床遺跡において検出されたSB031は間口12.5mと広く、鉄錠が出土したことから鐵冶屋とされ、間



藤田地区SB01・02上下層建物跡（赤は第1造構面、黒は第2造構面）

口の広い建物は工房的な性格があったものと考えられる。石見銀山において検出された建物の間口が広いのは、運転・精錬といった作業スペースの確保が必要だったためと思われる。

2 遺構と遺物の検討

(1) 炉跡

石銀地区で検出した炉跡については第3表に示した。平面形は方形、橢円形、円形等がみられ、粘土貼りの有無や、規模に大小がある。ほとんどが土間に掘りこぼめて構築されるが、藤田SB02のSX08~10の炉は意図的にゆりかす堆積の上に構築される状況が観察された。この炉跡下のゆりかすは、粘土貼りの土坑の内に認められるゆりかすよりもやや粗く、炉の保温や防湿を目的として土壤改良的な用途に使用された可能性がある。また、既にSB02の説明のなかで述べたように、炉の形態に加えて、数基の炉をまとめて構築するという特徴に注目し、以下に分類を試みた。

I類

藤田SB06SX01や千葉敷SB02SX03の例で、単独で築かれ、平面形はほぼ正方形にちかく、1辺は概ね40cm程度である。藤田SB04SX01~04はすべて方形の平面形であるので、I類に含まれるとしたが、掘り下げを行っていない上に、上面に焼土が認められるものもあり、機能が全く違う遺構の可能性がある。

II類

千葉敷SB01SX01~03にみられるように、3基が近接して構築される形態である。他に藤田SB01SX08~10、藤田SB06SX02~04、がそれである。炉の平面形は円形もしくは橢円形で、粘土貼りも認められる。

III類

藤田SB08SX03の例で、直径90cmと大型の炉である。千葉敷SB02SX02もこれに該当し、形態は若干違うが、千葉敷SB02SX0

1も可能性としてこのタイプとみることができる。

IV類

藤田SB02SX04~05に代表される形態で、粘土を貼り、被熱を受けた炉に近接して、小規模な炭化物を埋土とする土坑が伴う例である。藤田SB01SX06~07やSB05SX02などがあり、藤田SB01SX07は灰状の土が認められ注目される。藤田SB02SX05は、炉底に隙を敷いた後に粘土を貼り、炭化物を充填させている。

V類

藤田SB02SX08~10の例で、小径で粘土貼りがみられない炉で、重複しながら築かれる。先に述べたように、粗いゆりかすを用いた面に炉が構築されている。藤田SB05SX03は近接して築かれた炉はないが、粘土貼りが認められず、立ち上がりもさほど怪が大きくならないように看取され、V類に含まれる可能性が高い。しかし底面が平らであることから、炉内の容器の存在も注意しておきたい。また、藤田SB05SX01は小径だが、底面に粘土が敷かれているためV類には含まれない。断面形もいびつで、灰色土などが認められるなど、炉ではあるが、上面がかなり削平されており、他の分類にも含めていない。

この5類の他にも特徴的である、藤田SB08SX01の石製の鉢が伴う例や、藤田SB01の坑口前トレチ出土の鉄鍋といった、容器が存在する形態については除外した。石製の鉢が伴う藤田SB08SX01では粘土貼りや、被熱、炭化物も認められ、容器の存在という点だけ他者と区別される。したがって他の炉についても容器存在の有無は問題となってくる。

しかしながら、科学分析の成果として、①炉のなかにはAg、Pb、Cu、Mnなどの元素が認められるものがあること、②炉中の粘性の低い灰状の土はCa、Pを比較的多く含み、灰の可能性が高い、といった所見を得ており、確実に容器は存

在しない炉があるといえよう。

上記の分類における炉の年代については、炉内から時期を示す遺物が皆無で、特定は難しい。そのため周辺の年代の判明している遺構や、土間面上にて出土した陶磁器により年代を勘案した。

確実に16世紀代とみられる炉としては藤田SB01の鉄鍋があげられる。その上面で検出されたI類の藤田SB01SX11や、同じくI類の千疊敷SB02SX03も古く考えられる炉である。

16世紀末～17世紀初頭とみられるものは藤田SB01SX08～10、藤田SB06SX02～04があげられ、ともにII類である。I類の藤田SB06SX01、IV類の藤田SB01SX06・07も同時期の構造と推定される。

17世紀前半では、千疊敷SB02SX01・02や藤田SB08SX03といったIII類があげられる。II類の千疊敷SB01SX01～03、IV類の藤田SB02SX04・05、V類の藤田SB02SX08～10はこの時期の可能性がある。

石船地区においては18世紀代の遺物も出土しており、18世紀中頃まで集落が存続したとみられるが、確実に18世紀代といえる炉は特定できない。

次に科学分析の成果をもとに藤田SB02SX04・05について述べたい。この炉は断ち割り

の結果、粘土貼りや礫敷きといった炉の構造的な遺存状況が良好であったため、重点的に分析したものである。分析結果は、科学調査報告をもとに定量分析結果をまとめる。

所見にあるように、黄色粘土を除いて、いずれも相対的に高いAgの濃集が認められた。黄色粘土部分は、炭化物層などが付着していない純粋な粘土を試料とした点に注意しておきたい。炉内では、焼け締まった土として土層No.5の緑灰色土を選んだ。この土は炉の壁全体にみられるものではなく、焼土内側の一部分に認められた。まとめにみるとAgが1tあたり1,000gを越えるような結果が得られたことから銀製錬のなかでの、いわゆる灰吹を行っていた可能性が想定される。

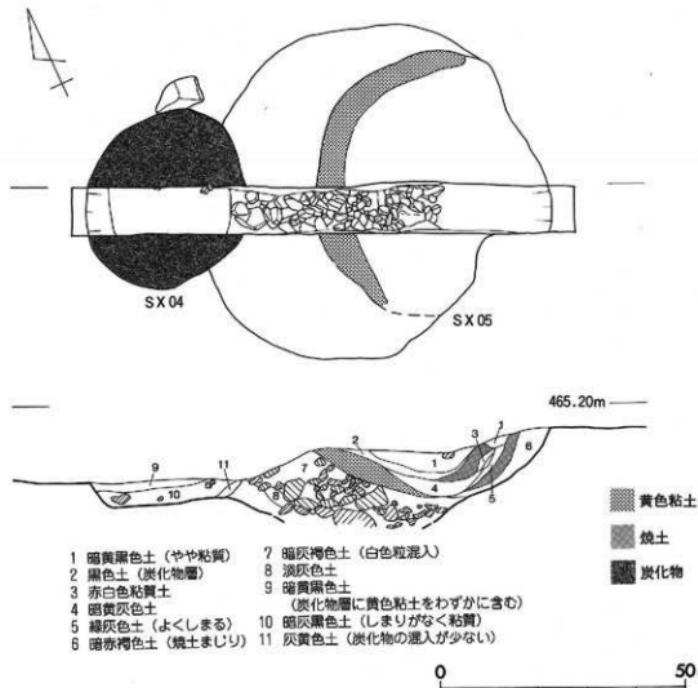
粘土より下の土として土層No.7、8を試料とした。他の試料と同様、相対的に高いAgの濃集が認められた。

付属するSX04は検出手面からの深さがわずかで、分層して試料を採集できず、埋土を一括して掘り上げた後、断面を再精査して上下層の観察を行った。したがって分析試料は一括の埋土として供しているが、微細なカラミの破片を多数含むことにより、Feが非常に多いことなどの特徴があった。ただし分析結果は、あくまで、土層の中での一部分の上を試料としているため、同一土層の分

分析試料	SX	土層No.	サンプル意図	土色等	定量分析所見
H10-01	05	1	上層	暗黄色土	Agを130g/t含有し、Pbは約0.5%含有する。
H10-02	05	2, 4	中～下層	炭化物混じり土・暗黃灰色土	Agを400g/t含有し、Pbは約0.7%含有する。
H10-03	05	粘土	貼り粘土	黄色粘土	いずれの含有量も少ない。
H10-04	05	5	焼け締めた 炉内土	緑灰色土	Agを1040g/t含有し、Pbは約1%含有する。
H10-05	05	7	粘土下の土	暗灰褐色土	Agを130g/t含有し、Pbは約0.3%含有する。
H10-06	05	8	構築土最下層	淡灰色土	Agを200g/t含有し、Pbは約0.3%含有する。
H10-07	04	9, 10	付属している SX04埋土	暗黃黑色土 暗灰黑色土	Agを280g/t含有し、Pbは約0.6%、Feは約30%含有する。

(Cuはいずれの試料も微量で、FeやMnの含有量も少ない。)

第3表 藤田地区SB02SX04・05科学分析結果一覧



藤田地区SB02内SX04・05土層断面図(1/10)

析に供されなかった他の部分では、結果が違ってくる可能性がある。

(2) 土坑

石銀地区において検出した土坑を第4表に示す。分類の要素として、平面形、粘土の充填、石積み、ゆりかす堆積、建物内の位置、年代という点をあげた。年代については造構に伴う遺物が希少であるため、周辺の建物内の造構、遺物により推定した。したがって、年代的にはやや幅のある捉え方となる。

土坑16基のうち、ゆりかすの堆積がみられる土坑が13基と多く、それ以外の土坑は3基である。

ゆりかすの堆積しない土坑については、それに用途が推定されており、いずれも比重選鉱との関係は認められない。個々にみると、まず、千畳敷SB01内SK04、SK05は岩盤を穿つて造られた土坑で、土坑内に礫の堆積がみられ、土坑内に採鉱の痕跡が残ることから、採鉱用の土坑と推定されている。また、千畳敷SB02 SK01は、深さが1.4mと容量が最大の土坑であるが、土坑内で鉱石を砕く機能が推定されている。

ゆりかすの堆積がみられる土坑については、平面形や規模、粘土の用い方、石積みの有無などで、多様性が認められる。

平面形では、土坑の規模の大小に関係なく、D

字、正方形、長方形、橢円形の4つに区分した。半圓形がD字の土坑は、藤田SB02内SK04の1例である。このSK04は、検出した土坑の中で、規模が最も小さく、検出面からの深さは15cm程と浅い。上部が削平されたと仮定しても、断面形の立ち上がりがそうした形状にないことから、比重運転に用いられたとはい、他者とは性格の違う土坑とみなしてよいであろう。可能性として、近接する場所に排水溝とみられるSB02内SK01が所在することから、これに伴う施設とも捉えることが可能ではないか。

平面形が正方形となる土坑は、藤田SB05内SK01～03の3例がある。このうちSK01は石積みがあり、他の2基はそれが認められない。また建物内での位置をみると、SK01が建物の中央に近い場所に構築されるのにに対して、他は建物奥に築かれている。このことは、SK01とSK02、03における機能の差を示す可能性がある。しかし、SB05では、岩盤付近出土の遺物が古い傾向にあり、岩盤加工遺構と建物跡に時期差があることが指摘されたため断定しがたい。これらSB05内の土坑付近には炉跡が多くみられるため、水は用いるが、精錬など他の用途に使用された可能性が指摘されている。こうした比重運転以外の用途に関連して注目されることは、SK03に岩盤に穿たれた溝が取り付く形状となっている点である。仮に、この溝が、土坑に付属する施設と仮定すれば、土坑に水を流し込む形態を考えられないであろうか。同じように、建物奥の岩盤付近に位置している千骨敷SB02内SK04においても、岩盤との関わりが注目されるところである。

平面形が橢円形、もしくは長方形で粘土貼りが認められる土坑は、粘土の充填という点から水溜の目的で構築されたとみることができよう。しかし、従来からいわれるようすすべてが比重運転に関連するとは限らない。水溜めだけの機能の土坑に限っていえば、精錬作業等に用いられる可能性

もある。建物内で、土坑と炉の位置関係において、炉に近い箇所に構築される例があり注目される。これまで、土坑内のゆりかすの堆積が比重運転の根拠とされてきたが、ゆりかすは土坑内の他に、道跡や溝跡、建物埋土にも堆積がみられ、土坑内でのゆりかすの出土状況に注意が必要である。

平面形の規模でみると、千骨敷SB01内SK01とSK03とが、ほぼ同じ大きさとなる他に、規格は認めがたい。また、長方形と橢円形の違いはあるが、藤田SB02内SK02と藤田SB01内SK01は、上面に石を配するという共通点が見いだせる。石は、礫石となる可能性があり、土坑に付属する施設が設けられたとも考えられる。

長方形を呈する土坑の形態の一つとして、千骨敷にのみ認められた石積みの土坑があげられる。地面を穿ち、石を積んだ後に粘土で充填するという、素掘の土坑よりも堅牢な造りであるため、地形や、給排水といった要因などにより、場所を限定して構築される形態なのか、または年代によっての相違点なのか注意しておきたい。

比重運転はゆりわけといわれ、水中で金属鉱石の部分と石とに分ける工程である。ただし、ゆりわけを①土坑内でおこなう、②土坑に溜めた水を汲み上げて桶の中で行う、という二つの可能性が考えられてきた。したがって、単に水を溜めるだけの土坑か、ゆり分け作業をも行う土坑か、または併用する機能なのかといった土坑の機能が想定される。

また、粘土貼りの内側に板などを仕組んだ例は検出されなかったものの、存在の可能性があり今後の検討課題である。

(3) 遺物からみた採鉱と製錬

出土遺物の中には、鉱山遺跡に特有な遺物が含まれている。それらは主に鉱山の採鉱や製錬に使用された道具類であるが、生産の過程で廃棄されるズリ、ユリカス、カラミなども科学分析などにより、採鉱製錬技術やその工程を推測する上で貴

地区		住居跡地名		分類	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	粘土貼りの状況	被熱	測数	推定年代	容屋・埋土の状況・調査者所見等
千葉県	S B 0 1	戸林跡		SX01	円形	90×50	5	○	○	×	17C前半	溶土化した部分に乳白色の石3個
	SX02	II		円形	直径60	5	×	○	×	×	17C前半～前半	
	SX03	III		円形	直径60(半壁)	5	×	○	×	×	17C前半～前半	
S B 0 2	SX01	IV		円形	直径150×100	20±	底面のみ	○	○	○	17C前半	剥口・粘土板・本葉切妻の繋りがわかる。
	SX02	III		円形	直径90	15	全面	○	○	○	17C前半	船頭收の跡跡
	SX03	I		方形	一辺38	未調	底面	○	○	不規	16C後半	
藤田	S B 0 1	SX06		IV	円形	直径24	5	×	×	×	16C末～17C初め	築き出し用の上が 骨片状の白色土。灰吹を示す。SX06とセット。
	SX07	V		円形	直径40	4	側面から底面半分	○	○	不規	16C末～17C初め	
	SX08	VI		円形	直径55	未調	未調	○	○	○	16C末～17C初め	
S B 0 3	SX09	II		円形	直径55	未調	未調	○	○	○	16C末～17C初め	
	SX10	III		円形	直径45	15	未調	○	○	○	16C末～17C初め	
	SX11	I		正方形	一辺50	10	全面	○	○	○	16C?	
鉢輪	-	-		-	直径25	8	-	-	-	-	-	-
	SX03	I		隅丸方形	50×30	15	×	○	○	○	16C代	
	SX04	IV		円形	直径35	5	×	○	○	○	17C前半	
S B 0 2	SX05	V		円形	直徑分直50	10	側面から底面半分	○	○	○	17C?	
	SX06	VI		円形	直径35	15	×	○	○	○	17C?	
	SX09a	V		円形	直径40	15	未調	○	○	○	17C?	
S B 0 4	SX09b	V		円形	直徑25	10	未調	○	○	○	17C?	
	SX10a	VI		円形	直徑25	7	-	○	○	○	17C?	
	SX10b	V		円形	直徑25	7	×	○	○	○	17C?	
S B 0 5	SX01	I?		方形	一辺40	未調	○	不規	不規	不規	黄色粘土成	
	SX02	I?		方形	一辺40	未調	○	○	○	○	○	黄色粘土成
	SX03	I?		方形	50×40	未調	未調	○	○	○	○	黄色粘土成
S B 0 6	SX04	I?		方形	40×45	未調	未調	○	○	○	○	黄色粘土成
	SX01	II		円形	直径30	10	底面	○	○	○	17C前半	底土の可塑性がある白灰色子。
	SX02	IV		円形	直径30	10	全面	○	○	○	17C前半	埋土中より羽口サやカラミ、粘土板。埋土板が伴う。
S B 0 7	SX03	V		円形	直径45	10	未調	○	○	○	17C前半	羽口合せり、SX3との同時。円、万字の羽口土
	SX04	I		方形	一辺40	9	○	○	○	○	17C前半	帝大の石4、灰？灰吹
	SX02	II		椭円形	75×62	15	底面	○	○	○	17C前半	白色(骨片か) 破子を含む
S B 0 8	SX03	III		円形	直径45	15	-	○	○	○	17C前半	火薬伴う
	SX01	I		円形	直径30	10	未調	○	○	○	17C代	石製の棒が残る。灰吹子
	SX02	-		椭円形	50×45	10	全面	○	○	○	17C代	上部をほさんど失った下削溝跡

第4表 石綿地区検出併存一覧表

地区	遺物名	土坑No.	規格	横(m)	容量	粘土	粘土+土色等	石楠	ゆりかご	推定年代	ゆりかご土の内容	遺物・調査時所見等
子置敷	SB01	SK01	平面形	1.5×1.3×0.70	1.37	○	黄褐色粘土	×	○	17c前半	黒褐色土	遺物・調査時所見等
	SK02	SK01	椭円形	2.1×1.2×0.40	0.96	○	海藻色粘土	上面	○	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
	SK03	SK01	長方形	1.6×1.2×0.70	1.34	○	黄褐色粘土	×	○	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
	SK04	SK01	椭円形	2.3×1.6	-	×	-	×	×	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
	SK05	SK01	不整形	-	-	×	-	×	×	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
石楠み1	SK01	SK01	長方形	1.8×0.5×0.70	0.63	○	黄色粘土	○	○	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
石楠み2	SK01	SK01	長方形	2.3×1.0×0.80	1.64	○	黄褐色粘土	○	○	"	暗褐色粘土	遺物・調査時所見等
SB02	SK01	SK01	椭円形	2.4×1.5×1.40	5.04	×	-	○	×	17c前半	鉄石を含む施設	鉄石を含む施設
	SK02	SK01	長方形	2.2×1.4×1.20	3.70	○	粘土	×	?	"	秋、マングン分	水溜土坑
	SK03	SK01	長方形	2.1×1.1×0.45	1.04	×	-	×	×	"	岩盤加工	水溜土坑
石楠み	SK01	SK01	長方形	2.0×0.6×0.50	0.60	○	粘土	○	○	"	要石保え付け	茶褐色沙層
篠田	SB01	SK01	長方形	1.15×0.7×0.30	0.24	×	-	×	○	17c前半	遺物・施設	遺物・施設
	SB02	SK02	長方形	2.1×1.9×0.90	3.19	○	黄色粘土	上面	○	17c前半	桃色色粘土地	井戸に付随
	SK04	SK04	D字形	0.75×0.6×0.15	0.07	×	-	×	×	"	桃色色粘土地	井戸に付随
	SE01	SE01	椭円形	2.6×2.1×2.0+	-	×	-	×	×	"	井戸跡	井戸跡
SB05	SK01	SK01	正方形	1.0×1.0×0.45	0.45	○	粘土	○	○	江戸時代前半	暗褐色土	水性堆積、遺物後の堆積か
	SK02	SK02	楕円形	1.0×0.8×0.40	0.32	○	-	○	○	"	暗褐色粘土	水性堆積、遺物後の堆積か
	SK03	SK03	正方形	1.4×1.4×0.25	0.49	底面	-	×	○	"	暗褐色粘土	水性堆積、他の用途使用か
SB10	SK01	SK01	椭円形	1.4×1.0×0.20	0.28	底面	-	×	○	江戸時代前半	暗褐色土	遺物・施設

第5表 石鎚地区検出土坑一覧表

重要な資料として考えられている。ここでは、採鉱と製錬の工程に限って、出土した道具類からみた石見銀山の生産技術についての検討をおこなう。

鉱山の生産工程は採鉱→選鉱→精錬という段階を経て、最終的に鉱石から金銀銅などが抽出される。この工程の間で様々な施設と道具が使われ、その具体的な内容は鉱山技術書や絵巻などの資料の研究により明らかにされている。石見銀山については『銀山旧記』に代表される、19世紀の記録からその大要がわかるが、調査で出土した遺物は17~18世紀代の遺構に伴うものが大半を占め、この間の時間差には技術の進歩や改良、新しい鉱床鉱石の採掘などが予測されるため、発掘資料は当時の技術を考える上で重要な意味をもっている。

採鉱に使われる道具にはタガネがある。タガネだけでなく鉄製の道具類は出土例が少ない。この理由には、使用に伴って何度も鍛え直され最終的には磨滅してしまうこと、錆が進行し腐食しやすいことなどがその理由と推測される。千疊敷地区と藤田地区ではタガネが数点出土しており、腐食しているため詳細は不明であるが、10数cmを測る。長さから山箸に似んで使用されたものと推測される。19世紀の鉱山技術書の中では、坑内の作業によりいくつかのタガネがあることが知られており、大龍寺谷地区では長さ33.0cm、一辺1.4cmを測る細長いタイプのものが出土しており、用途に応じて大きさの異なるものが使用されていると考えられる。

ツルハシは坑口前トレンチから出土している。(第45図) 長さ11.7cm、最大幅2.1cm、厚さ1.0cmを測り、刃部の摩耗が少なくあまり使用されていないと考えられている。採掘した鉱石を荒削りする際に使用したと推測される。

採鉱、粗選別された鉱石は選鉱工程に回される。選鉱は臼と磨石によって粉成がおこなわれ、微粉状に粉碎される。精錬の成否は選鉱技術に左右されるといわれ、石見銀山では鉱石の性質から、要石と呼ばれる磨臼タイプの臼が主流を占めている。

近年調査が進む甲州金山などの東日本の鉱山遺跡では、回転臼が主流であることが報告され、選鉱臼が磨臼で代表される遺跡に石見銀山はある。藤田地区では検出した製錬遺構に比べ、要石の数が少ないと報告されているが、要石は持ち運ばれ、別の作業場所で使用されたと推測される。

精錬工程の道具であると思われる遺物に、鉄鍋、火箸、板状土製品、羽口、坩埚がある。坑口前トレンチから鉄鍋が出土している。(第36・37・45図) 鉄鍋は灰吹法の精錬炉の容器として使用したもので、鉄鍋を含む遺構の年代が16世紀後半と考えられたことで、調査成果として注目されたものである。鉄鍋の形態は、弦のある片口鍋で径23cmを測り、内部には黄色土が堆積している。科学分析により骨の成分である水酸化アバタイトが検出され、この土は灰吹用に骨を焼いて作った骨灰であると考えられている。鉄鍋を容器とすることは、防湿と蓄熱に有利であることや、灰に吸収された酸化鉛の回収にも適していたことなどが理由と推測される。この鉄鍋が出土した遺構面からは、長さ32.7cmの火箸が出土している。(第45図) これは鉱山絵巻などの資料から、精錬作業中に炉内の熔解を操作するのに使われたものと考えられる。このほか藤田地区SB06の炉跡に近接した位置から火箸が出土している。(第45図) 板状土製品は石見銀山の技術書の中では、ねこと呼ばれるもので、炉の周囲に送風の風受けと耐火用として置かれた、湾曲した板状の土製品である。藤田地区SB01・02・05・09・10、千疊敷地区SB02から出土している。藤田地区SB01から出土したものは、残存長10.8cm、高さ6.0cm、厚さ1.5cmを測る。(第41図18) これらの土製品はほとんどが破片で、炉に面した内湾する片側に金属分が付着しているものが多い。

羽口は吹子の送風管の先に付き、羽口先端が炉内に置かれるものである。藤田地区SB01・04・05、千疊敷地区SB02SX01内から出土している。そのほとんど全体が直方体を呈し断

面は方形となり、円形の通風孔が開いている。先端が残存するものは、金属分の付着がみられる。藤田地区SB01から出土した羽口片は円筒形の先端部分で、直徑5.5cm、通風孔の径1.3cmを測る。(第39図6)またSB04からも円筒形のものが出土している。鉱山技術書や絵巻には直方体の羽口しか記載がみられないことから、石見銀山には円筒形の羽口が存在しないと言われていたが、調査により円筒形の羽口の存在が明らかになった。藤田地区SB05から大小二つの羽口が出土している。小さいものはSX03内出土の羽口で、断面の厚さが最大で4.8cm、通風孔の径が1.5cm前後のもの、大きいものは断面の厚さが最大で6.7cm、通風孔の径が1.8cm前後を測り、吹子の木呂竹との接合部分がほぼ完全に残る好資料である。羽口は送風装置の先端だけでなく、炉内で鉱石の熔解とともに熔け出し、造渣剤としての役割を果たすことが知られている。羽口の製作は専門職人によっておこなわれ、羽口原料の粘土は厳選されたと考えられる。吹子の台数や精錬工程により、使用される羽口の大きさと形態は異なる。今後の出土例の増加を待って、用途の解明や、付着する金属分の科学分析によって精錬炉を特定していくことが課題である。

坩堝は千量敷地区から3点出土している。(第41図15~17)いずれも口縁部から体部にかけての破片であるため器形等は不明である。内面に金属分の付着痕がみられるものがあり、鉱石の熔解に使用したと推定されている。坩堝がどのような炉で、どの段階で使用されるのかは科学調査と併行して解明すべき点である。

秤の鍾として分銅形や直方体の鍾が出土している。(第82図)天秤秤と竿秤の鍾として使用されたものである。竿秤の鍾が多いことが注目される。これらは吹屋において秤が使用されていたことを示すものであり、竿秤の鍾からは小型の秤になると思われる。試し吹(坩堝での品位分析)や灰吹炉で得られた銀の重量を計測することに使用され

たと推測される。

出土した遺物から石銀における採鉱と精錬の技術を中心に検討を加えてみた。今後資料の増加を待って、遺構と遺物から石見銀山の技術を復元することが必要であろう。

(4) 出土した下駄について

ほとんどの下駄は、石銀藤田地区D19グリッドの坑口前トレーンチ・灰色粘土層より出土した。この層の時期は16世紀後半と考えられ、下駄の他に漆塗り椀・建築部材など木製品が多く出土している。各下駄の出土状況は散在的で、一括発掘された形跡はみられない。これらの下駄は、日常的に使用されていたものと推測される。

出土した下駄の特徴として、1点を除きみな連齒下駄であることがまず挙げられよう。台の形状は、角・丸を問わず幅に対し長さが短く、全体にばっかりした小判状である。一方、17世紀前葉・中葉の島根県広瀬町富田川河床遺跡出土の下駄は、露卯差曲下駄が大半を占め、台が長くほっそりした印象を受ける。これらの違いの理由として様々な点が挙げられようが、今後の研究を待ちたい。

また、台表後部に山・船が具体的に線刻された連齒下駄の出土が注目される。近世には漆塗りのものや台表にビロードなどを張った例が多く、線刻が施される例は見られない。各地の中世遺跡出土の下駄にも線刻が施されたものは少ない。線刻下駄でも、格子目文様や「X」印などの抽象的なものが多い。具体的なものには、広島県草戸千軒町遺跡で、台表後部に鳥や花弁を描くものがわずかにみられる。

この下駄の線刻画については、『銀山旧記』の石見銀山発見の記述が連想される。それを念頭に描かれたものであるかは不明である。しかし、当時の石見銀山地域の人々が、日本海での日常的交流を背景とする船舶の往来を身近にとらえていたことは、充分窺えよう。

まとめ

以上、特徴的な遺構・遺物について検討を加えたが、調査範囲を中心にならためて石見銀山遺跡の発掘調査の成果を整理し、課題を列挙すると下記のとおりである。

1 発掘調査のいきさつと経過

石銀地区は地元に伝わる「石銀千軒」の伝承や階段状の平坦地（テラス）・井戸跡などから集落跡の存在が想定されていたが、標高500m近い山中であることや、一面が竹林に覆われていたことからその実態は明らかでなかった。

平成4年に大田市の総合整備構想に基づく林道工事が石銀に達し、道路予定部分の千疊敷地区で遺跡の一部分が発見され、本格的な調査に取りかかることになった。

平成5年度からの発掘調査は発掘により遺跡の性格を究明すると共に、広がりを確認する目的で必要な部分について竹林を伐採し、同時に1/500地形図を仙ノ山全城について作成する方針で6年間継続された。

2 調査成果

(1) 鉱山町について

16世紀後半から17世紀にかけての鉱山町が出現し、町割や建物の実態が判明した。

石銀地区では当初からの予測通りに当時の町が出現し、当時から偏溝を有する道が谷の中央に造られており、整然とした町割がなされ、計画的に造成された町の存在が確認された。

かつ1/500地形図の成果に基づくと1,000か所を超える平坦地が広がり、仙ノ山一帯に粗密をもちらながらも遺跡が広く分布することが明らかとなった。

露頭掘りと坑道掘りなどの採鉱の跡が間歩調査の成果とあわせ発掘調査によって明らかになった。

採鉱から精錬までの工程が判る施設が残る吹屋建物跡（精錬所）が検出された。

吹屋は窓口が広く選鉱、精錬といった作業スペースが建物敷地内に設けられていた。

石造物調査の成果により周囲の墓地と町の存続年代はほぼ同一で、近くには寺も存在した。

(2) 特徴的な遺構・遺物

土坑：ゆりかすが含まれている例が多く直接、間接を問わず選鉱に使用されたものが多い。銀山に特有の遺構である。

炉跡：出土例が増加し、分類が可能となりつつある。銀山特有の遺構であり、科学分析の成果も含めあわせ時期差、用途差が判別できそうである。同時に文献との比較検討も必要である。

採鉱と製錬の遺物

ア. 採鉱の道具

タガネ・ツルハシが確認された。遺存確率は低いが類例が増加すれば大小など用途や成分の検討がこれから可能である。要石はこれまでの表面採集にあわせ出土品となつたことで磨臼として粉成しに多用されたことが判明した。

イ. 精鍊工程の道具

鉄鋸、火箸、羽口、坩堝、板状土製品（ねこ）、分銅形や直方体の錘（天秤錘と竿錘の錘）など初出の道具が確認された。

木製品

建物柱・壁などの部材、下駄があり石鋸での使用が想定され、「町」の存在を明らかに示す。

3 鉱山町「石銀」

他分野の調査を活用しながら発掘調査の成果に基づけば、16世紀後半から17世紀における石銀地区の実態と特質は次のように考えられる。

- (1) 山中に計画的な平坦地を造成し、石を組み、建物を連ねる町があった。
- (2) 町は道路が広く側溝も備えるなど整えられ、当時の城下町に匹敵する。
- (3) 何より鉱山の町として採掘や製鍊が最優先にされていた。
- (4) 山上の町であり「選鉱」と「生活」の両方に使う水の確保と使い方に工夫が見られる。
- (5) 鉱山での労働と生活が密着し、職住同一である。
- (6) 立地条件の良くない山中でありながら、陶磁器の流通や墓石・供養塔の使用など、生産と消費の賑わいがあった。

4 課題

本格的調査開始からわずか数年であり、性格不明の遺構を含み、遺構面も4面～9面と多く充分な解明ができなかった点が多い。調査の継続が最大の課題である。

しかし、上記のように鉱山遺跡として初めてわかったことも多く、また文献の記述を再確認できた事項や、文献と異なる現地の様相なども明らかになった。

今後の調査では、露頭・坑道の採掘遺構、土坑・石積の選鉱遺構、炉跡・鉄鍋などの製鍊遺構の三種を全てもち、「銀を現地生産する遺跡」ということに改めて着目して、その全工程を系統的に解明し、当時の生活実態を明らかにすることが必要である。

幸い、ここ石見銀山遺跡は、遺跡が良く保存され、さらに他分野の調査も同時並行で行われていることなど国内の他の鉱山遺跡にない好条件を備えている。

図 版



下河原吹屋跡全景（西から）



山吹城下屋敷地区第5トレンチ遺構検出状況（南から）